

上野原遺跡

(第10地点)

所在地 鹿児島県国分市大字上之段字水ヶ迫ほか

第6分冊

縄文早期土器編3(早期後葉編2)・土製品編



2001年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

『国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書上野原遺跡(第10地点)』の各分冊構成

口 紋	(3) 石 器・石製品
序 文	A. 本文・一覧表編 (以上, 第7分冊)
例 言	B. 挿図編 (以上, 第8分冊)
第Ⅰ章 調査の経過	図版編1 (モノクロ編) (以上, 第9分冊)
第1節 調査に至るまでの経過	図版編2 (カラー編) (以上, 第10分冊)
第2節 調査の組織	
第3節 調査の経過	
第Ⅱ章 遺跡の位置	
第1節 遺跡の位置	
第2節 周辺遺跡	
第Ⅲ章 層位	
第Ⅳ章 発掘調査	
第1節 調査の概要	
第2節 近代の調査	
第3節 歴史時代の調査	
第4節 古墳時代の調査	
第5節 弥生時代の調査	
第6節 繩文時代後期の調査	
第7節 繩文時代前期の調査	
	(以上, 第1分冊)
第8節 繩文時代早期の調査	
1. 遺構	
付 篇 壺形土器内の土の分析	
	(以上, 第2分冊)
図版編	(以上, 第3分冊)
序 文	なお第1・2・3分冊については、第1集として平成12(2000)年3月に刊行した。
例 言	今年度、第4・5・6・7・8・9・10分冊を第2集として平成13(2001)年3月付けで刊行。
2. 遺物	また、第4分冊以降の各項の執筆責任者は次のとおりである。
(1) 土 器	
A. 繩文時代早期中葉の土器	第8節 2. (1) 八木澤一郎
(以上, 第4分冊)	2. (2) 中村耕治
B. 繩文時代早期後葉の土器	2. (3) 富田逸郎
(以上, 第5分冊)	
B. 繩文時代早期後葉の土器	
(2) 土製品	
(以上, 第6分冊一本分冊)	

第6分冊凡例

- 1 本分冊は、縄文時代早期後葉後半の時期に属する土器を報告した部分である。他の時期に属する遺物については、「各分冊構成」を参照の上、該当する分冊にあたられたい。
- 2 土器については、各型式ごとに「～式土器出土状況全体図」、「～式土器出土状況図」、「～式土器実測図」の3種類の挿図を作成した。また、土器型式内において細別が可能であると判断した場合は、細別型式ごとに3種類の挿図を掲載した。
- 3 土器観察表の多くは、「実測図」の最後にまとめた形で掲載した。
- 4 上野原遺跡第10地点の発掘調査は、40m四方のグリッドを設定し、原則としてグリッド単位で行った。また遺物取上では、遺物番号を各グリッドごとに1番から通し番号を付けて取り上げることとした。さらに遺物取上図面は、原則として1/50で作成することとし、調査担当者がそれぞれ分担し作成した。
- 5 本報告書掲載の「～式土器出土状況全体図」は、各グリッドごとに遺物取上図面を50%縮小した図面を元図として、各土器型式ごとに拾い出した図面を下図として作成した。
この下図を10%縮小のうえトレースし、版下とした。それを50%縮小して掲載したので、各図は1/2000の仕上がり図面である。
またこの図で使用した地形測量図は、アカホヤ火山灰直下のVI層上面で作成した図を1mセンターで掲載した図である。
- 6 本報告書掲載の「～式土器出土状況図」は、4で作成した下図を、37%縮小のうえ、原則として6グリッドを1枚の挿図としてトレースし、版下とした。それを50%縮小して掲載した。
またこの図に掲載した土器の番号は、「実測図」の番号と一致する。
- 7 本報告書掲載の「～式土器実測図」は、土器実測図を67%縮小のうえトレースし、版下とした。それを50%縮小して掲載した。したがって、各図は1/3の仕上がり図面である。
なお報告番号は、各土器型式ごとに1番から通し番号をふった。この番号は該当する「～式土器出土状況図」や土器観察表の報告番号と一致する。
- 8 本報告書掲載の「土器観察表」は、実測図として資料化した土器片のみを対象とした表であることをお詫びする。
- 9 さて「土器観察表」中の記号などについては次のとおりである。
 - 1) 胎土中の鉱物欄での記号は、
 - ◎…含有量が特に多いと思われる鉱物。
 - …含有量が多いと思われる鉱物。
 - △…含まれはするものの含有量が少ないと思われる鉱物。を示しているが、「多い」「少ない」は全くの主観に基づく判断である。
 - 2) 器面調整については概ね最終調整に近い段階の調整を示す。内容は次のとおりである。
「ハケ」…
木製と思われる工具によるハケ目調整を行っていることを示す。方向が判明するときは方向を明示。多方向の調整が観察できるときには単に「ハケ」と記載した。
「ナデ」…
指および工具によるナデ調整を行っていることを示す。「丁寧なナデ」はほとんどそれ以前の調整が観察できないほど丁寧にナデ調整を行っているが、「ミガキ」調整ほど光沢ができるまで調整を続けていないことを示している。
 - 3) 「色調」については全くの主観である。

第6分冊目次

第Ⅳ章 発掘調査	
第8節 繩文時代早期の調査	
2. 遺物	5
(1) 土器	8
B. 繩文時代早期後葉の土器	8
b. 塚ノ神式土器様式・苦浜式土器	9
① 第1群 微隆帯文土器	10
② 第2群 塚ノ神Aa式土器	36
③ 第3群 塚ノ神Ab式土器	64
④ 第4群 塚ノ神Bc式土器	74
⑤ 第5群 塚ノ神Bd式土器	77
⑥ 第6群 苦浜式土器	115
⑦ 第7群 型式不明の土器	132
⑧ 小結	134
(2) 土製品	139
① 土偶及び異形土製品	139
② 土製耳飾り(耳栓)	139
③ 土製円盤	149
④ 線刻画を有する土器	149
⑤ 小結	157

第6分冊挿図目次

第1図 上野原台地周辺地形及び上野原チクノパーク旧地形	6
チクノパーク内道路分布図	6
第2図 上野原遺跡第10地点の上層	7
第3図 塚ノ神・微隆帯文土器出土状況全体図	12
第4図 塚ノ神・微隆帯文土器出土状況図1(P-Q-R-S-8-9)①-13	13
第5図 塚ノ神・微隆帯文土器出土状況図2(Q-R-S-10-11)①-14	14
第6図 Q-R-S-10-11②出土塚ノ神・微隆帯文土器実測図	15
第7図 塚ノ神・微隆帯文土器出土状況図3(N-O-P-12-13)①-16	16
第8図 塚ノ神・微隆帯文土器出土状況図4(Q-R-S-12-13)①-17	17
第9図 塚ノ神・微隆帯文土器出土状況図5(P-Q-R-14-15)①-18	18
第10図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図1(1類-1)	19
第11図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図2(1類-2)	20
第12図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図3(1類-3)	21
第13図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図4(2類-1)	22
第14図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図5(2類-2)	23
第15図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図6(3類-1)	24
第16図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図7(3類-2)	25
第17図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図8(4類-1)	26
第18図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図9(4類-2)	27
第19図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図10(4類-3)	28
第20図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図11(5類-1)	29
第21図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図12	30
第22図 塚ノ神・微隆帯文土器実測図13(6類-1)	31
第23図 塚ノ神Aa式土器出土状況全体図	38
第24図 塚ノ神Aa式土器出土状況図1(Q-R-S-7-8)①-39	39
第25図 塚ノ神Aa式土器出土状況図2(Q-R-S-9-10)①-40	40
第26図 塚ノ神Aa式土器出土状況図3(N-O-P-11-12)①-41	41
第27図 塚ノ神Aa式土器出土状況図4(Q-R-S-11-12)①-42	42
第28図 Q-R-S-11-12②出土塚ノ神Aa式土器実測図	43
第29図 塚ノ神Aa式土器出土状況図5(P-Q-R-13-14)①-44	44
第30図 塚ノ神Aa式土器出土状況図6(Q-14)①-45	45
第31図 塚ノ神Aa式土器出土状況図7(O-P-Q-15-16)①-46	46
第32図 塚ノ神Aa式土器実測図1(1類-1)	47
第33図 塚ノ神Aa式土器実測図2(2類-1)	48
第34図 塚ノ神Aa式土器実測図3(2類-2)	49
第35図 塚ノ神Aa式土器実測図4(2類-3)	50
第36図 塚ノ神Aa式土器実測図5(2類-4)	51
第37図 塚ノ神Aa式土器実測図6(2類-5)	52
第38図 塚ノ神Aa式土器実測図7(2類-6)	53
第39図 塚ノ神Aa式土器実測図8(3類-1)	54

第40回 寒ノ神 A a 式土器実測図9(3類-2).....	55
第41回 寒ノ神 A a 式土器実測図10(3類-3).....	56
第42回 寒ノ神 A a 式土器実測図11(4類-1).....	57
第43回 寒ノ神 A a 式土器実測図12(4類-2).....	58
第44回 寒ノ神 A a 式土器実測図13(小型深鉢).....	59
第45回 寒ノ神 A b 式土器出土状況全体図.....	65
第46回 寒ノ神 A b 式土器出土状況図1(Q・R・S-7-8).....	66
第47回 寒ノ神 A b 式土器出土状況図2(Q・R・S-9-10).....	67
第48回 寒ノ神 A b 式土器出土状況図3(P・Q・R-11-12).....	68
第49回 寒ノ神 A b 式土器出土状況図4(P・Q・R-13-14).....	69
第50回 寒ノ神 A b 式土器実測図1.....	70
第51回 寒ノ神 A b 式土器実測図2.....	71
第52回 寒ノ神 A b 式土器実測図3.....	72
第53回 寒ノ神 B c 式土器出土状況全体図.....	75
第54回 寒ノ神 B c 式土器出土状況図(Q・R・S-8-9).....	76
第55回 寒ノ神 B c 式土器実測図.....	77
第56回 寒ノ神 B d 式土器出土状況全体図.....	80
第57回 寒ノ神 B d 式土器出土状況図1(Q・R・S-7-8).....	81
第58回 寒ノ神 B d 式土器出土状況図2(N・O・P-9-10).....	82
第59回 寒ノ神 B d 式土器出土状況図3(Q・R・S-9-10).....	83
第60回 寒ノ神 B d 式土器出土状況図4(N・O・P-11-12).....	84
第61回 寒ノ神 B d 式土器出土状況図5(Q・R・S-11-12).....	85
第62回 寒ノ神 B d 式土器出土状況図6(P・Q・R-13-14).....	86
第63回 寒ノ神 B d 式土器出土状況図7(P-14).....	87
第64回 寒ノ神 B d 式土器出土状況図8(Q-14).....	88
第65回 寒ノ神 B d 式土器出土状況図9(R-14).....	89
第66回 寒ノ神 B d 式土器出土状況図10(O・P・Q-15-16).....	90
第67回 寒ノ神 B d 式土器実測図1(1類-1).....	91
第68回 寒ノ神 B d 式土器実測図2(1類-2).....	92
第69回 寒ノ神 B d 式土器実測図3(2類-1).....	93
第70回 寒ノ神 B d 式土器実測図4(2類-2).....	94
第71回 寒ノ神 B d 式土器実測図5(2類-3).....	95
第72回 寒ノ神 B d 式土器実測図6(2類-4).....	96
第73回 寒ノ神 B d 式土器実測図7(2類-5).....	97
第74回 寒ノ神 B d 式土器実測図8(2類-6).....	98
第75回 寒ノ神 B d 式土器実測図9(2類-7).....	99
第76回 寒ノ神 B d 式土器実測図10(2類-8).....	100
第77回 寒ノ神 B d 式土器実測図11(3類).....	101
第78回 寒ノ神 B d 式土器実測図12(4類-1).....	102
第79回 寒ノ神 B d 式土器実測図13(4類-2).....	103
第80回 寒ノ神 B d 式土器実測図14(5類-1).....	104
第81回 寒ノ神 B d 式土器実測図15(5類-2).....	105
第82回 寒ノ神 B d 式土器実測図16(6類-1).....	106
第83回 寒ノ神 B d 式土器実測図17(6類-2).....	107
第84回 寒ノ神 B d 式土器実測図18(6類-3).....	108
第85回 寒ノ神 B d 式土器実測図19(小型深鉢).....	109
第86回 芥派式土器出土状況全体図.....	119
第87回 芥派式土器出土状況図1(Q・R・S-8-9).....	120
第88回 芥派式土器出土状況図2(N・O・P-10-11).....	121
第89回 芥派式土器出土状況図3(Q・R・S-10-11).....	122
第90回 芥派式土器出土状況図4(Q・R・S-12-13).....	123
第91回 芥派式土器実測図1.....	124
第92回 芥派式土器実測図2.....	125
第93回 芥派式土器実測図3.....	126
第94回 芥派式土器実測図4.....	127
第95回 芥派式土器実測図5.....	128
第96回 芥派式土器実測図6.....	129
第97回 芥派式土器実測図7.....	130
第98回 芥派式土器実測図8.....	131
第99回 型不明土器実測図1.....	132
第100回 型不明土器実測図2.....	133
第101回 土製品出土状況全体図1.....	
(土偶、棒状、異形土製品、上製耳飾り、縁刻土器).....	140
第102回 土製品実測図1(土偶、棒状、異形土製品).....	141
第103回 土製品実測図2(バレット形土製品).....	142
第104回 土製品実測図3(上製耳飾り1).....	144
第105回 土製品実測図4(上製耳飾り2).....	145
第106回 土製品実測図5(上製耳飾り3).....	146
第107回 土製品実測図6(上製耳飾り4).....	147
第108回 土製品出土状況全体図2(土製円盤).....	150
第109回 土製品実測図7(上製円盤1).....	151
第110回 土製品実測図8(上製円盤2).....	152
第111回 土製品実測図9(上製円盤3).....	153
第112回 土製品実測図10(縁刻土器).....	156

上野原遺跡周辺の環境と土層

上野原遺跡の立地する上野原台地は、始良カルデラの外輪山に相当する。外輪山は第2図のように想定されるが、天降川・別府川・検校川等によって開析されている冲積平野部分は定かでない。カルデラから霧島山麓へかけては、入戸火碎流で形成されており、ゆるやかな傾斜の台地になっている。その台地全体がこの台地は天降川や新川、検校川などで開析され、樹枝状の谷が複雑に入り組む。これらの様相は、第2図の霧島・桜島地形断面図に示すとおりである。上野原台地の標高は海側の最高所が263m、その南側、霧島に面する所でおよそ240mであり、北側に向かってゆるやかな傾斜をもっている。台地の基盤は安山岩の岩盤であり、海側でカルデラ壁の断崖を形成している。その直上には亀割角砾層が堆積し、さらに始良カルデラ噴出物やサツマ火山灰などの桜島噴出物が堆積して台地を形成している。

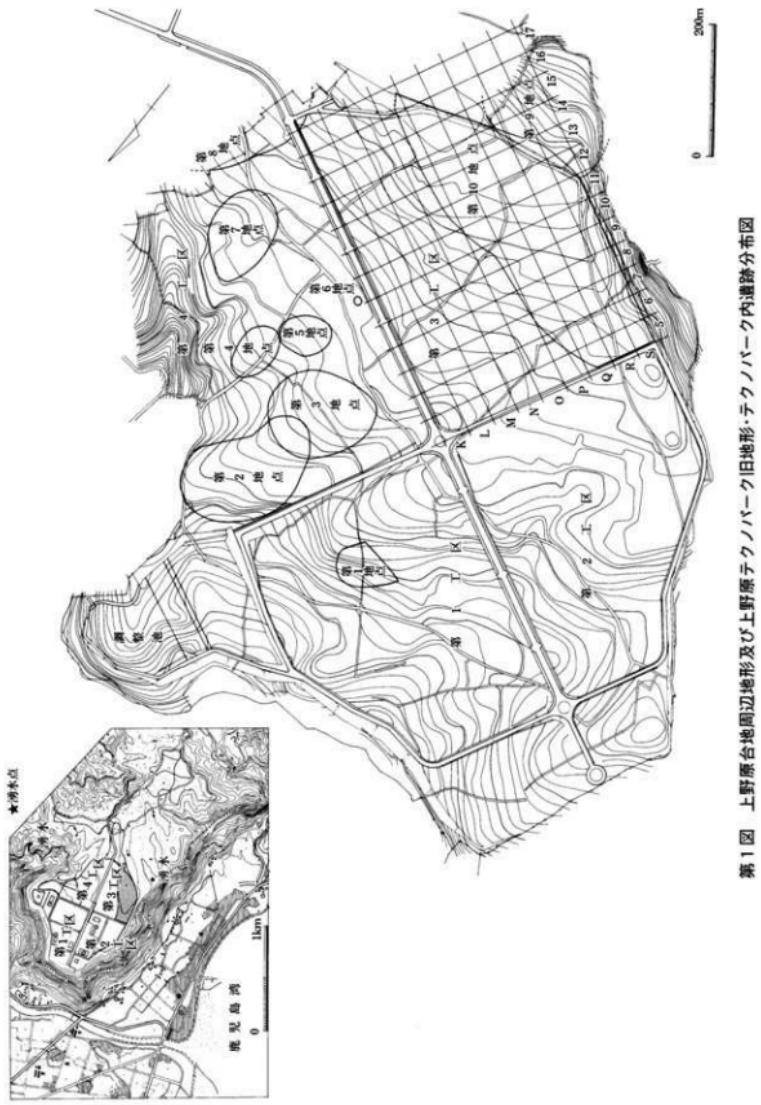
台地の東側はカルデラ壁頂部が続くが、それ以外の三方は断崖もしくは急峻な谷になっており、周辺と隔絶している。台地東側のカルデラ壁頂部には海側への浅い開析谷があり、その開口部、断崖近くには湧水がみられる。また、台地の北側にも湧水があり、台地上ではあるものの、現在も一定の水量は確保されるようである。

この始良カルデラ周辺には南九州の主要な縄文遺跡が数多い。中でも、上野原台地と検校川を挟んで向き合う位置にある平祐貝塚は、本遺跡第10地点の主体的な土器の一つである平祐式土器の標識遺跡である。また、カルデラ南西部外側を流れる稻荷川流域に立地する加栗山遺跡は、本遺跡第2地点と同じく早期前葉前平式土器期の集落が検出された。同じ立地条件の加治屋園遺跡では草創期の微隆起突帯土器が出土した。別府川の沖積地には、縄文後期中葉から後葉にかけての南九州のほとんどすべての形式の土器が膨大な量出土した干迫遺跡がある。検校川の上流に位置する城ヶ尾遺跡では、埋納された塞ノ神様式の壺が3個体出土している。この遺跡は、縄文時代早期後葉の埋納された壺形土器という共通項もあるため本遺跡との関連が注目される。

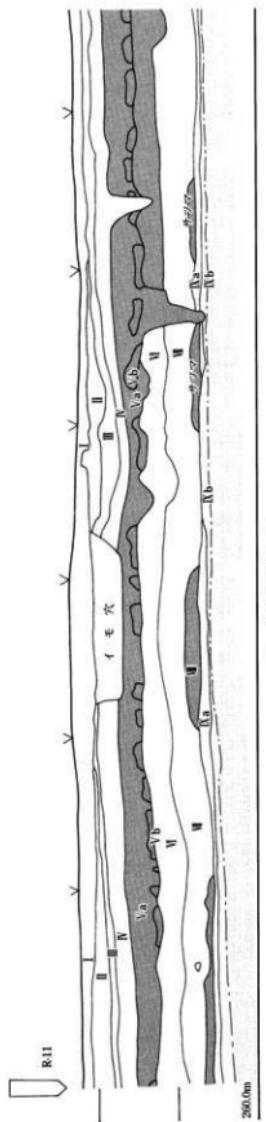
上野原台地内の遺跡分布を概観しておきたい。第

I工区と第2工区のほとんどの区域については不明であるが、第1工区内の第1地点で弥生時代中期後葉の集落が検出されている。また第1地点は、ほぼ完全に復元された塞ノ神式土器の深鉢形土器1点と石器1点だけからなる特異なありようを示す早期後葉の遺跡である。第3工区と第4工区は全域が調査されている。旧石器時代から縄文時代草創期の包含層は1ヶ所も確認されていない。縄文時代早期前葉に第2地点で前平式期の集落が出現し、同中葉になると、第2・3・6・10地点と広がりを見せ、同後葉になると、第7・9・10地点に分布を変える。第7地点の出土状況は第1地点とよく似ているようであり、この二者と第9・10地点との関連は今後究明されねばならない課題となるであろう。なお、第9地点は、工業用水道タンクの建設予定地であったが、確認調査の結果遺構・遺物の出土が多量に上ることが予想されたため、全面調査を実施せず、工業用水道タンクは現在地に建設された。縄文時代前期になると、第10地点の西側にごくわずかに分布するだけで、早期後葉との落差が大きい。同中期になると台地上からほとんど姿を消し、同後期になって陥れ穴列が出現し、ごくわずかの土器が残される。同晩期になって再びにぎやかになり、第4・5地点で遺構・遺物とも多量に出土している。

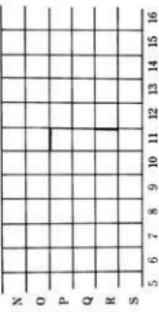
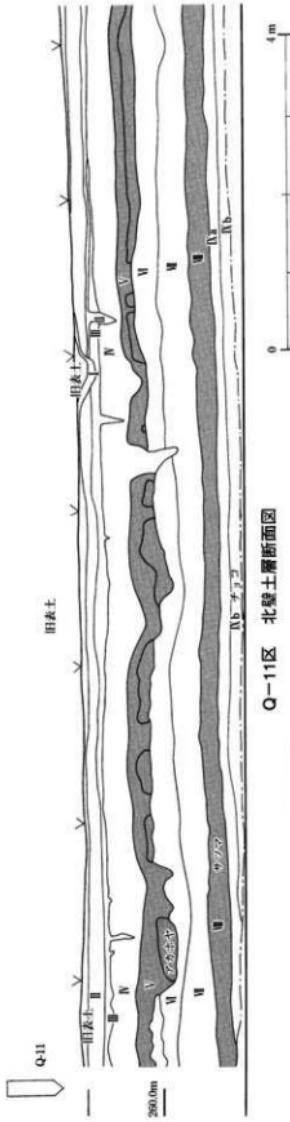
次に、土層について概略述べる。I層は表土。II層黒色土は、中世以降の包含層である。III層は暗茶褐色を呈するII層とIV層の漸移層で、縄文時代晩期から弥生時代の包含層である。IV層は黄褐色土と黄白色の火山灰に二分され、黄褐色土は縄文時代後期の包含層で、陥れ穴の掘込み面でもある。V層は上部に縄文前期の遺物を包含するが、下部は無遺物層であるアカホヤ火山灰層である。VI層及びVII層が縄文早期の包含層であり、第10地点の主体となる層である。VII層は白色の軽石を多く含む暗茶褐色土で、VIII層は軽石が少なく、黒褐色を呈する。VIII層はサツマ火山灰層で明黄褐色を呈し、第10地点でもブロック場の堆積を見せず、全面に堆積している。IX層は黒褐色ロームであり、本遺跡では遺構・遺物は出土していない。以下、入戸火碎流まで何枚かの桜島バミスを介在しながらロームが堆積している。



第1図 上野原台地周辺地形及び上野原テクノパーク旧地形・テクノパーク内道路分布図



R-11区 東壁土層断面図



第2図 上野原遺跡第10地点の土層

第IV章 発掘調査

第8節 縄文時代早期の調査（再掲）

VI層およびVII層が遺物包含層であった縄文時代早期の時期の発掘調査は、各グリッドごとに進捗状況に応じて適宜行った。

上野原遺跡第10地点の発掘調査を行った結果は、約15万点にのぼる多量で、しかも多種多様な遺物が出土したこと、多様な遺構が検出されたことであつた。これらのこととは、南九州では縄文時代早期の段階において、すでに全国に先駆けて多彩な縄文文化が開花していたことを示すものとして、発掘調査期間中から注目された。

その成果として、平成10年6月30日には767点の上野原遺跡出土品が重要文化財として指定された。

なお、第2分冊では縄文時代早期の時期に属する遺構として検出した、集石遺構・石核母岩集積遺構・磨石集積遺構・石斧埋納遺構・土器埋納遺構についてすでに報告を行つた。

そこで、第4・5分冊と第6分冊前半部分とでは出土した土器について、第6分冊後半部分では土製品について、第7・8分冊では石器・石製品についての報告を行うこととする。

したがつて、遺構検出状況などに圍むる部分について必要がある場合は適宜述べるが、詳細については第2分冊を併せて参照されたい。

2. 遺物（再掲）

上野原遺跡第10地点で、縄文時代早期の時期の包含層であるVI層およびVII層からは、約15万点に達する遺物が出土した。VI層およびVII層から出土したこれらの遺物が属する時期は、南九州の土器編年に照らせば、縄文時代早期中葉の時期に編年されている下剥茎式土器や桑ノ丸式土器などの土器群と、早期後葉の時期に編年されている平柄式土器・塞ノ神式土器などの土器群とが出土している。しかしながら、その出土量の比率は、早期後葉の時期の土器群が出土土器全体の9割以上を占める状況にあった。

以上の状況から上野原遺跡第10地点では、縄文時代早期中葉の時期から早期後葉の時期に人々の生活が行われ、遺跡が形成されたと考えられる。

さて遺物の分類では、壺形土器などを含む土器や耳栓などの土製品、多種多様な石器そして垂飾品などの石製品に分かれることが明らかとなった。

そこで、土器・土製品・石器・石製品の順に順次報告していくこととする。

では、まず土器について報告を行う。

（1）土器（再掲）

先に述べたように上野原遺跡第10地点で出土した土器は、現在示されている南九州の縄文土器編年に照らせば、縄文時代早期中葉の時期に編年されている下剥茎式土器や桑ノ丸式土器などの土器群と、早期後葉の時期に編年されている平柄式土器や塞ノ神式土器などの土器群とに属することが明らかになつた。では本分冊では、次に縄文時代早期後葉半の時期に属する土器群から報告を行うことにする。

B) 縄文時代早期後葉の土器

b. 早期後葉後半の土器

上野原遺跡第10地点で出土した縄文時代早期後葉後半の時期に属する土器は、河口貞徳氏が設定した型式分類に従い、下記のように6群に分類することができた。

- 第1群 塞ノ神・微隆帶土器
- 第2群 塞ノ神A a式土器
- 第3群 塞ノ神A b式土器
- 第4群 塞ノ神B c式土器
- 第5群 塞ノ神B d式土器
- 第6群 苦浜式土器

なお、上野原遺跡第10地点の報告を行うにあたり、縄文早期後葉の時期に位置づけられている各型式に属する土器が、本地点でどのように出土しているか、その分布状況を比較し、検討を行つた。その結果や、近年の南九州における当該期の層位的な土器出土状況の結果、そして放射性炭素年代測定法での測定値の結果、さらに土器型式組列を検討した結果、などを考慮した。その上で本報告では、河口編年に基づいた土器分類での報告を行うこととした。

b-1 塚ノ神式土器群について

① 定義

塚ノ神式土器は、鹿児島県伊佐郡菱刈町市山に所在する塚ノ神遺跡出土の土器を標識とする土器である。1933年に木村幹夫氏が全国に紹介して以来、約70年間にわたり、多くの研究者による編年研究史がある土器である。

今回報告を行うにあたり、先に述べたように河口編年に基づき、次のように従来の枠組みにある塚ノ神式土器を5群に分類した。

第1群：微隆帶土器

ラッパ状に聞く口縁部を中程で屈曲させる、いわゆる「二重口縁」の器形を呈する土器である。特に屈曲部より上位の部分を肥厚させる一群の土器が注目できる。口縁部には沈線文と刺突連点文とで文様を構成し、胴部には平格式土器の指標の1つである結節繩文の結節部のみを施文した土器である。

第2群：塚ノ神A a式土器

ラッパ状に聞く口縁部は直線的になる。口縁部は沈線文のみで文様を構成し、胴部には網目撫系文を施文した土器である。

第3群：塚ノ神A b式土器

籠描きの区画内に撫文系の文様を施文した土器である。

第4群：塚ノ神B c式土器

貝殻により、口唇部や口縁部そして頭部に刻みや刺突連点文を施し、胴部には籠描きの区画内に貝殻条痕を施文した土器である。

第5群：塚ノ神B d式土器

口縁部器形はラッパ状に外反するが、内弯する土器もある。口縁部文様は貝殻または籠による格子状文や平行沈線文、胴部には刺突連点文を施文した土器である。

以上、塚ノ神式土器群を第1群から第5群まで分類した、その概略を示した。この分類に基づき作成した図が出土状況全体図および出土状況図そして土器実測図(第3図～第85図)である。次節以降、これらの分類に基づいて各群を詳述していくこととする。

② 土器の大きさ

第1群から第5群まで共通して、塚ノ神式土器に属する深鉢形土器の大きさには、いくつかのまとまりがあることが観察できた。そこで、深鉢形土器の胸部最大径および口径の大きさで分類した結果、大きくく。

1) 大型土器、2) 中型土器、3) 小型土器という3種類に、さらに2) 中型土器が3種類に、分けることができた。分類基準は次のとおりである。

1) 大型土器とは胸部最大径が40cm前後、口径45cm前後に達する土器を指す。

2) 中型土器とは胸部最大径が18cm前後の土器から、30cm前後の土器までを指す。さらに、中型1類土器は胸部最大径が30cm前後の土器を、中型2類土器は胸部最大径が20cm以上の土器を、中型3類土器は胸部最大径が20cm未満の土器を指す。なお、中型2類土器は胸部最大径が22～23cmに個体数のピークが、中型3類土器は胸部最大径が17～18cmに個体数のピークがくるようである。

3) 小型土器とは胸部最大径が15cm未満の土器を指す。個体数のピークは胸部最大径が12～13cmにくるようである。

さて、この分類基準にしたがって、各群各類ごとに出土が認められた状況を記載した。これは、深鉢形土器の大きさ、つまり土器容量から見た土器型式ごとの組み合わせを示したものである。

項目の中には、出土が認められなかった状況を併記した群や類もある。それらの項目については、その群や類に属する土器の中に、「出土が認められなかつた」とした大きさの土器が「存在しなかつた」ことを意味するものではない。また、資料化しなかつた多くの土器の中に「出土が認められなかつた」とした大きさの土器が存在する可能性を全く比定するものもない。

この分類の結果については、再度小結で論じることとする。

① 第1群 塚ノ神・微隆帶文土器

(第3図～第22図)

i) 概要

第1群に属する土器は、399点の土器片が出土し、その内の189点、68個体を資料化した。

第1群は、寺跡見國氏以来今日まで、塚ノ神式土器の範疇として把握されてきた土器である。近年では、河口編年においても独立した位置付けはなされず、新東編年において「椿ノ原式土器」の1類型として捉えられている土器群である。上野原遺跡第10地点では本群に属すると把握した土器がまとまって出土したことから、群を分けることにした。

第1群は、器形的特徴について「頭部でラッパ状に屈曲する。口縁部は内窓状に外反しながら中程でさらに屈曲する、いわゆる「二重口縁」を呈している。口縁部は波状口縁を呈する土器とした。一方、施文的特徴については「口唇平坦面上端に羽状の刻線を施し、口縁部外器面の文様は口縁部縁と内窓屈曲部付近に1条から2条の刻目微隆帯文が巡る。」という定義ができる土器群である。

ではまず最初に、上野原遺跡第10地点において、第1群に属する土器がどの地点から主に出土しているか、その状況を検討してみよう（第3図～第9図参照）。なお、図中のドットは実測図が未掲載である土器も1ドット1点で図示している。

出土状況全体図を検討して指摘できることは、集中して出土している区域として、①R・S-10区からQ・R-11区およびQ-12区にかけての区域と、②R-13・14区の区域とを挙げることができる。

ところで①区域と②区域とは共に、平底式土器様式期の集中区域（第5分冊参照）とも、第2群（塚ノ神Aa式土器）に属する土器の集中区域（第23図参照）とも重なる区域である。そのうえ、S-11区からR・S-12区にかけての区域には、遺物があまり出土しない状況も平底式土器様式期や第2群土器期と共通する同様の状況である。

さらに、土器集中区域の中に土器が特に集中して出土している地点が認められることや、①区域中の土器集中地点どうしに接合関係が認められることや、①区域に属する土器と②区域に属する土器とが密接

な接合関係にあることなどが注目できる。

これらの状況から、土器が地形の傾斜などの自然的要因によって集中拡散した結果ではなく、当時の状況を概ね反映した結果であると考えられる。

また、①区域に属する土器と②区域に属する土器とが密接な接合関係にあることから、①区域と②区域とがほぼ同時に形成されたと考えられる。

さて、上野原遺跡第10地点で出土した第1群に属する土器を分析していくことにする。

第1群は、深鉢形土器と壺形土器とで構成されていた。そのうち、本報告では深鉢形土器を器形的特徴および施文的特徴から1類土器から5類土器まで5分類した。その特徴を以下に記す。

①-1 第1群1類土器（第10図1～第12図17）

i) 概要

第1群1類土器を、土器の大きさによって分類すると、胴部最大径が40cm前後の大型に属する土器（2）と、胴部最大径が30cm以上の中型1類に属する土器（3・8・17）と、胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する土器（7）という3種類の大きさが異なる深鉢形土器と、小型深鉢形土器に属する土器（4）とが出土した。

第1群1類に属する土器の器形的特徴としては、土器の大きさの違いに係わらず、口縁形態がゆるやかな波状口縁を呈する土器（2・3・4・7・8）と、ほぼ平口縁を呈する土器（17）とが出土している。但し、本類に属する波状口縁の度合いは、大変緩やかであるため、破片では区別が付きにくい状況である。

さて、口縁部はわずかに内窓しながら口縁中央部でいくぶんか屈曲する。胴部はわずかに丸みを帯びた円筒形を呈する。明瞭に本類に属するとわかる底部は出土しなかった。

一方、施文的特徴として、代表的な（2）を例に記述する。ヘラ状工具を使って、口唇部外側と内側とに刻みを施す特徴がある。なかには上面観が羽状に刻みを施す土器も観察できた。

さて、口縁上端部に2条、口縁中央部に3条、横位方向に刻目を施した微隆帯を巡らしている。微隆

帶間には横位方向に波状になる沈線文と刺突連点文とを施している。口縁中央部より下位には、横位方向に刻目を施した。5条の微隆帯を波状に施している。そして、胴部には6条の結節文を縦位方向に施している。この土器は、口縁部に微粒帶文を施す土器と、胴部に「結節文」を施す土器とが同一個体であることを示す、指標となる土器である。

さて、第1群1類に属する土器の胎土中鉱物は、主に石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器は少なかったことは注目できる。また、土器の調整方法は、外器面はナデ調整、もしくは木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。内器面はハケ目調整の後にナデ調整もしくは丁寧なナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は、外器面では茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が、内器面では暗黄褐色・暗褐色が主流であった。

①-2 第1群2類土器 (第13図18~第14図24)

i) 概要

第1群2類土器を、土器の大きさによって分類すると、胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する土器(22)と、胴部最大径が20cm未満の中型3類に属する土器(18・19・24)という2種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で、胴部最大径が40cm前後の大型に属する土器や胴部最大径が30cm前後の中型1類に属する土器の出土は認められなかった。

ところで器形的特徴としては、土器の大きさの違いに係わらず、口縁形態がほぼ平口縁を呈し、口唇上端部は内傾する平坦面を作出する。口縁部が内窪しながら、口縁中央部で屈曲して立ち上がる。しかし口縁部外器面の後線は非常に不明瞭であり、口縁部内器面では後線は観察できない。胴部は直線的な円筒形である。

一方、施文的特徴として代表的な(18)を記述する。さて、口唇上端部の内傾面には刻みを施す。口縁上端部に2条、口縁下半部に5条、横位方向には数条の沈線文を施す点とを挙げることができる。そして胴部には2条もしくは3条の結節文を縦位方向に刻目を施した微隆帯を巡らしている。微隆帯間の施文

では、土器に向かって右側と左側とでは文様構成が異なる土器である。すなわち、右側では横位方向に波状になる沈線文と刺突連点文とを施している。一方、左側では横位方向に波状になる刻目を施した微隆帯が施される土器である。

さて、第1群2類に属する土器の胎土中鉱物は、石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器がなかったことは注目できる。また、土器の調整方法は、外器面はナデ調整を、内器面は木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を、あるいは丁寧なナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は、外器面では暗茶褐色から暗黄褐色が、内器面では暗黄褐色から暗褐色が主流であった。

①-3 第1群3類土器 (第15図25~第16図36)

i) 概要

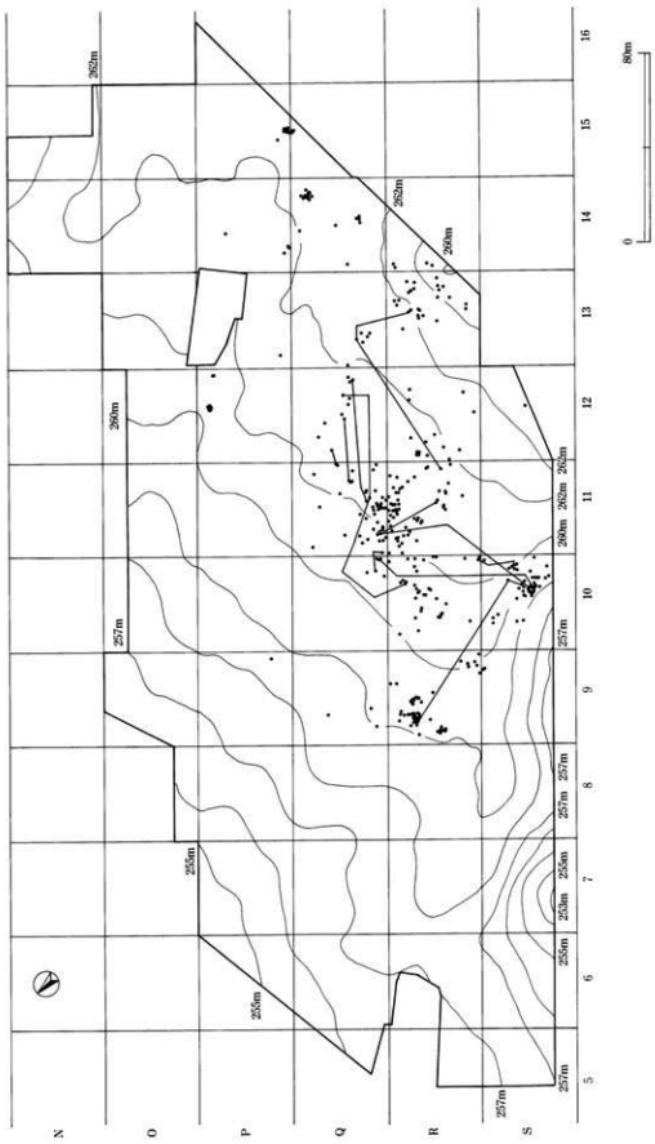
第1群3類土器を、土器の大きさによって分類すると、胴部最大径が30cm前後の大型に属する土器(33)と、胴部最大径が30cm前後の中型1類に属する土器(34・35)と、胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する土器(31)という3種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で、胴部最大径が20cm未満の中型3類に属する土器の出土は認められなかつた。

ところで器形的特徴としては、土器の大きさの違いに係わらず、口縁形態がほぼ平口縁を呈し、口縁部が外反しながら、口縁中央部で強く屈曲して立ち上がる。2類土器では不明瞭であった、口縁部外側中央部が屈曲する部分の稜線が、3類土器では明瞭であるのが、3類土器の指標である。しかし口縁部内側中央部が屈曲する部分の後線は、不明瞭であるのは、注目できる。本類に属する土器で口縁部と胴部とが接合した例が少なく、胴部形態の詳細は不明である。しかし、(31)から胴部は張りを持った円筒形を呈すと考えられる。

一方、施文的特徴としては、(27)や(32)のように口唇上端部には刻みを内面と外面とに2列施し、屈曲部より上位では波状あるいは山形状に沈線文や刺突連点文を施すのが特徴である。また、屈曲部より

(p.25へ続く)

第3図 塚ノ神・微隆帶文土器出土状況全図



P



53



40



14

Q



60



21

R

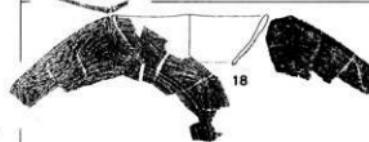


52

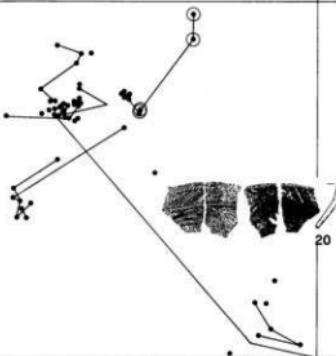


16

S



18

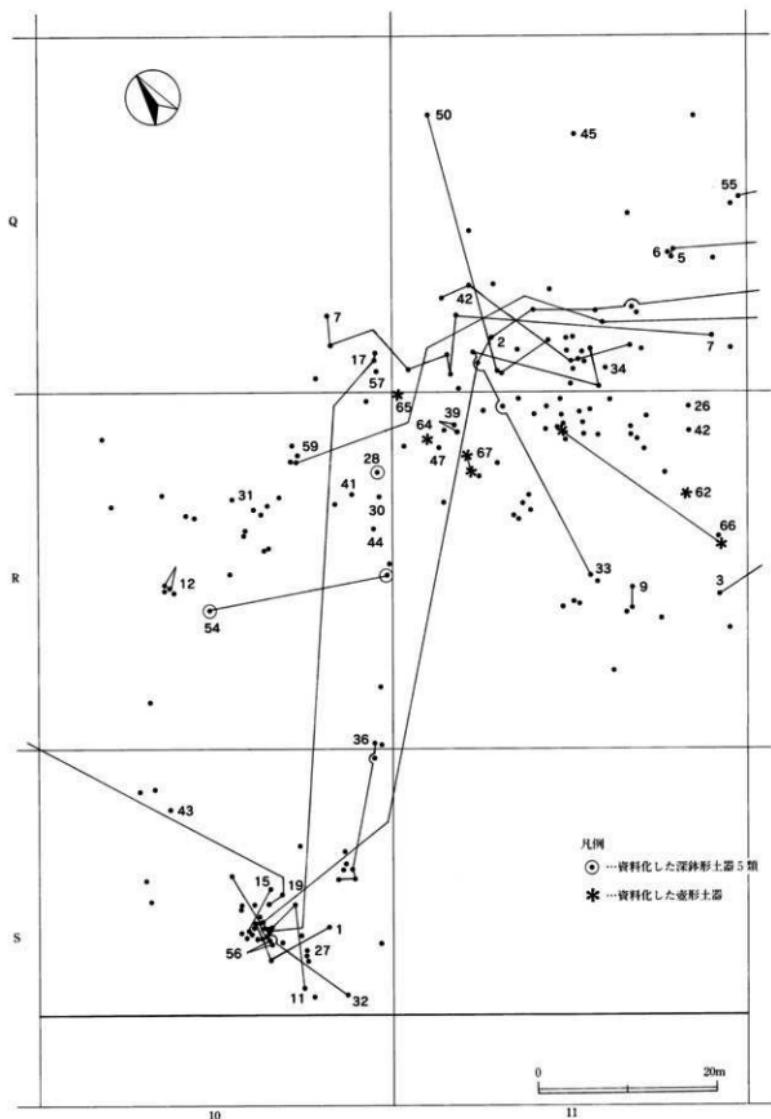


8

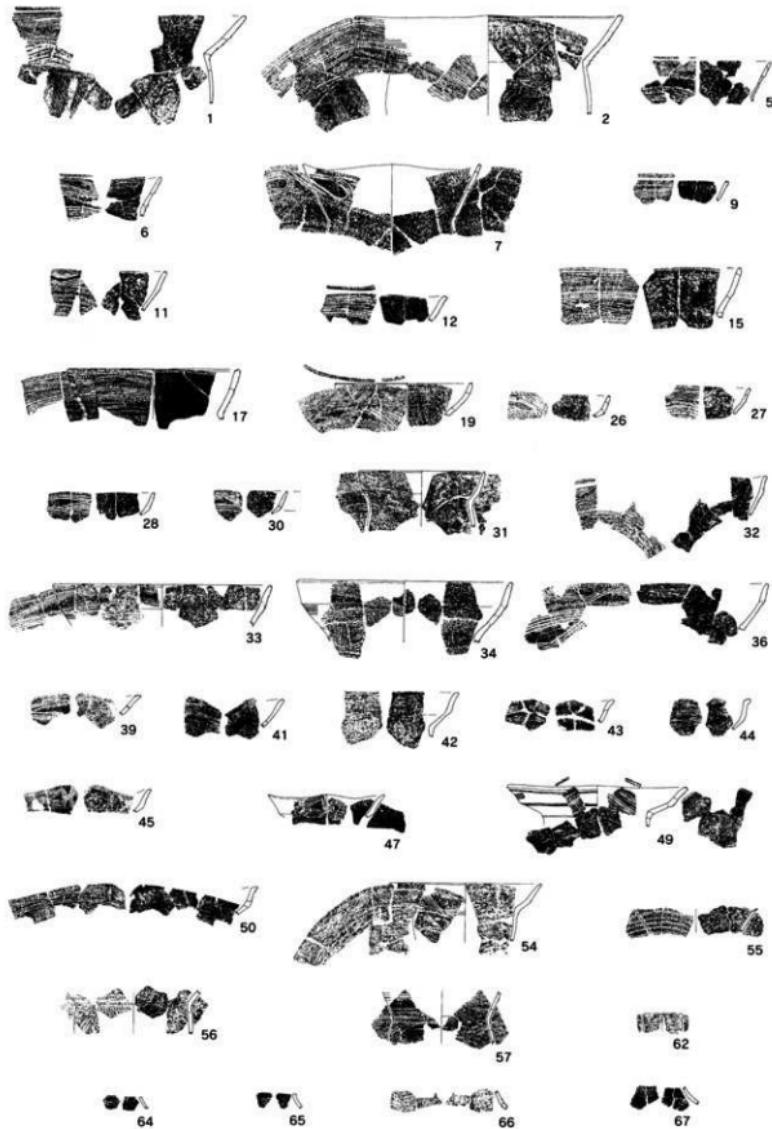
0 20m

9

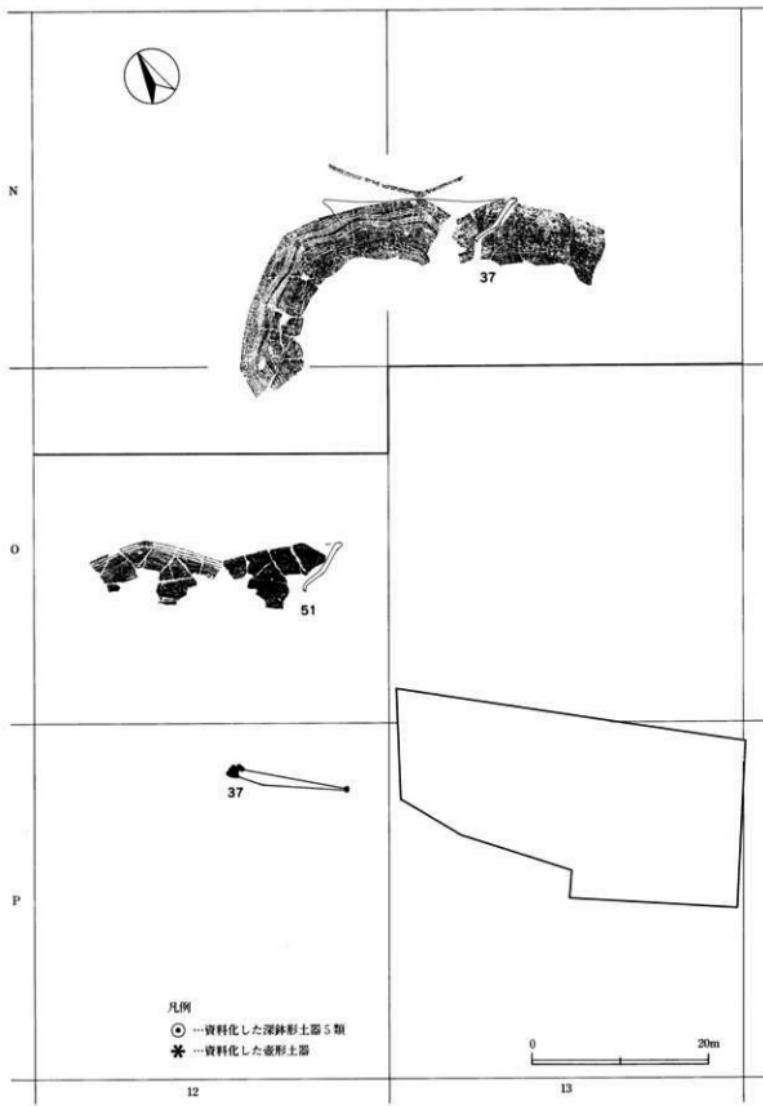
第4図 塞ノ神・微隆帯文土器出土状況図1(P・Q・R・S・8・9区)



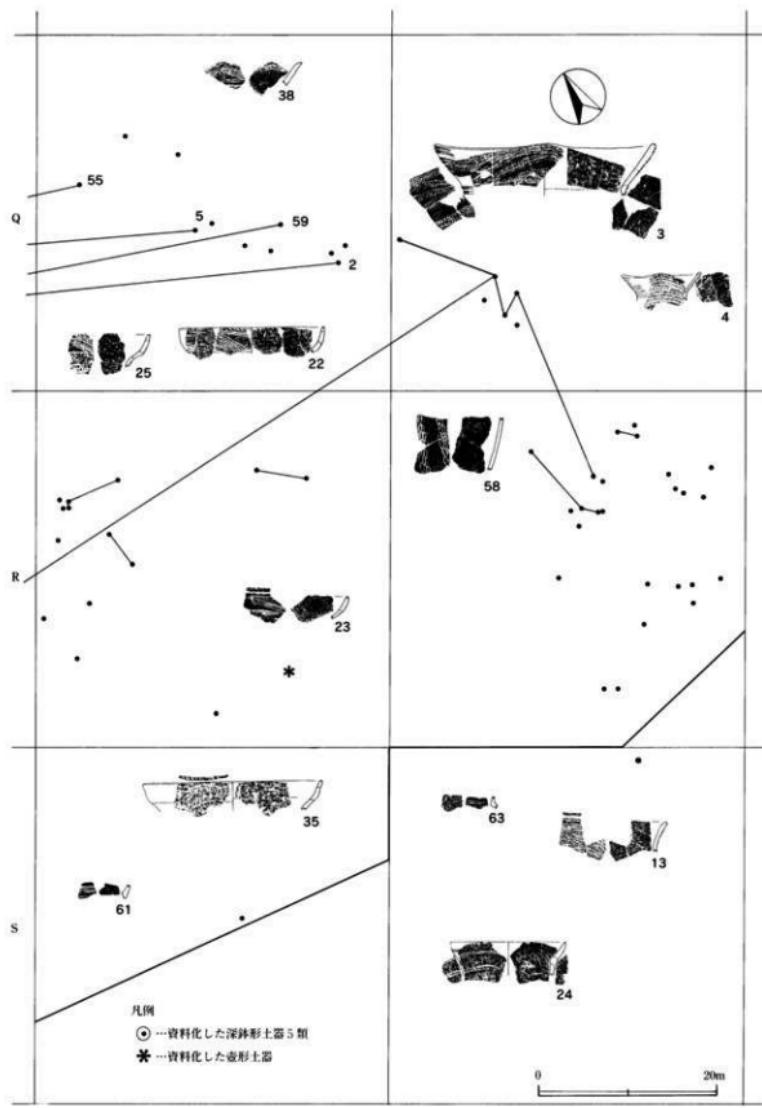
第5図 塞ノ神・微隆蒂文土器出土状況図2(Q・R・S-10・11区)



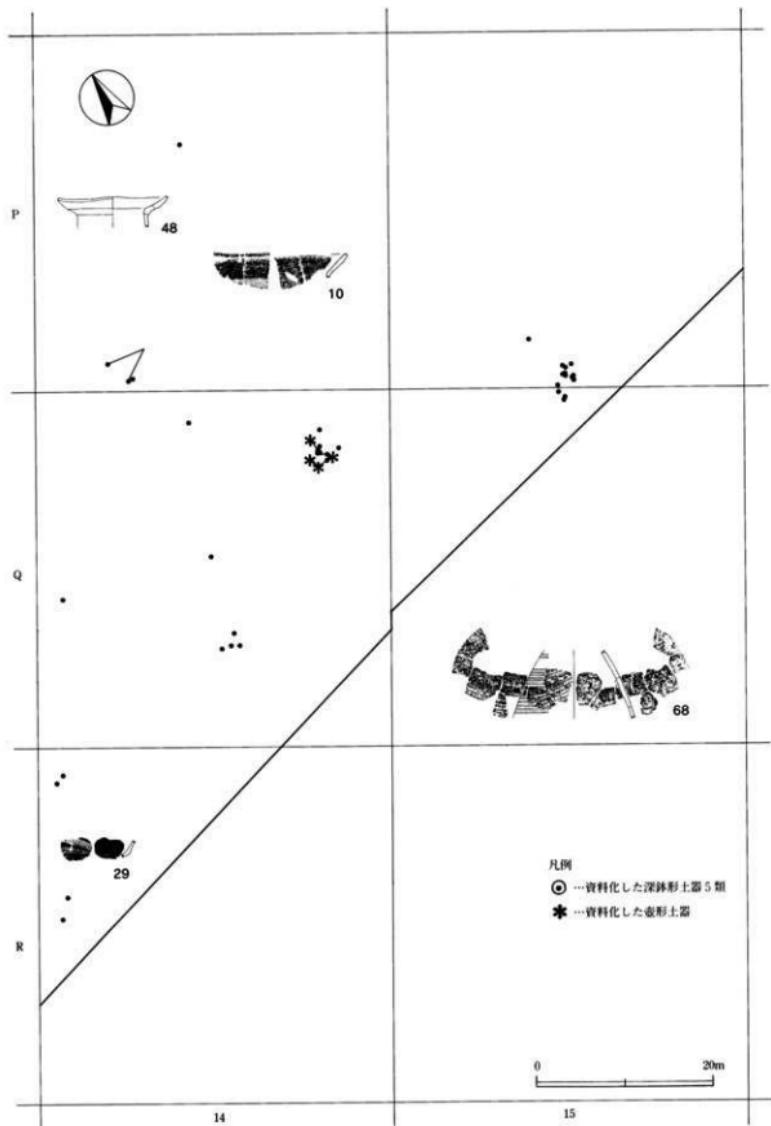
第6図 Q・R・S-10・11区出土 塞ノ神・微隆帯文土器実測図



第7図 塞ノ神・微隆蒂文土器出土状況図3(N・O・P-12・13区)

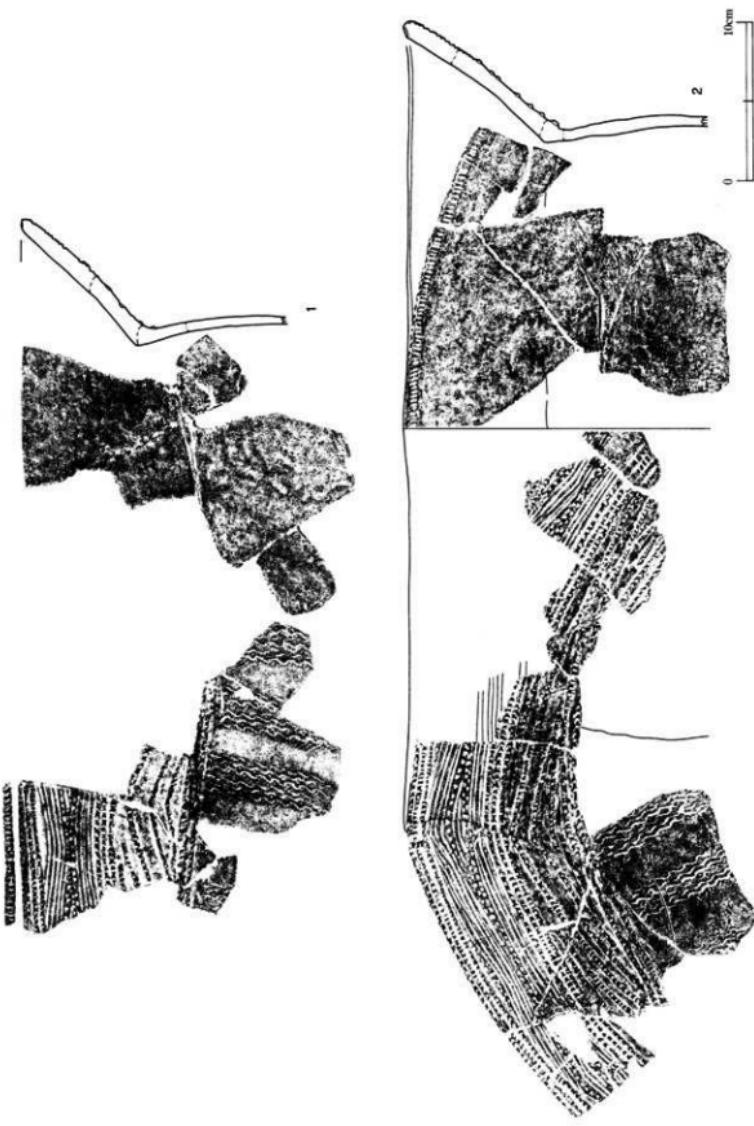


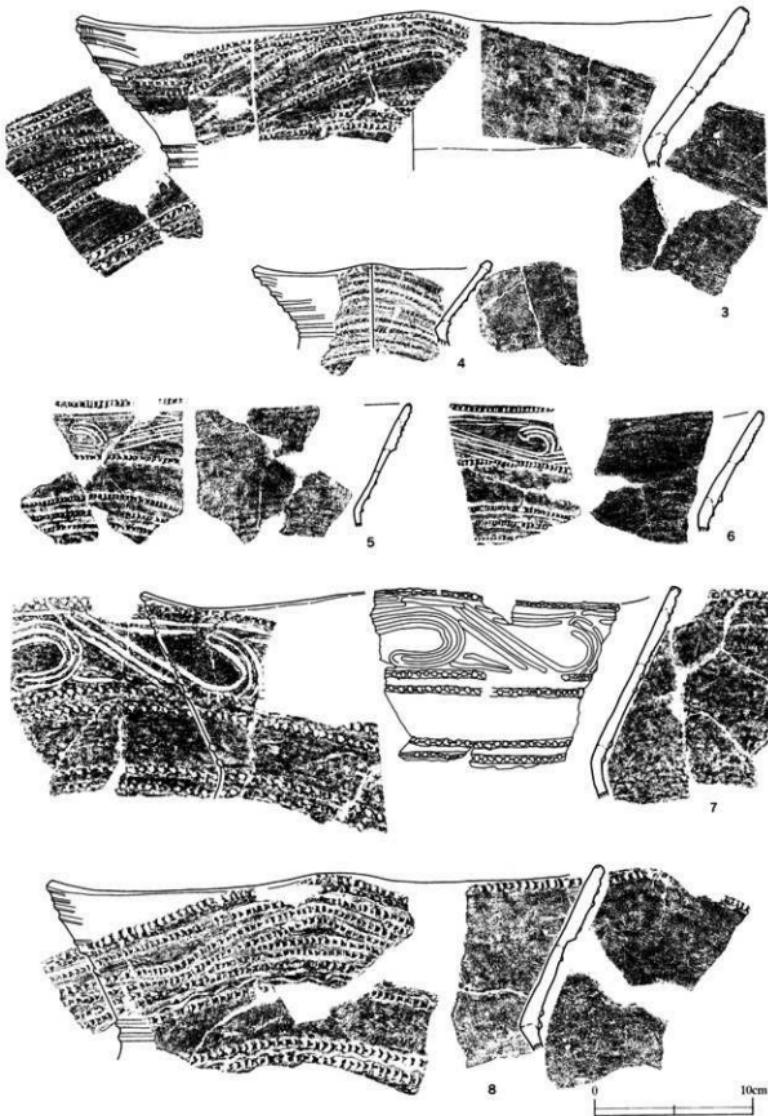
第8図 塞ノ神・微隆蒂文土器出土状況図4 (Q・R・S - 12・13|K)



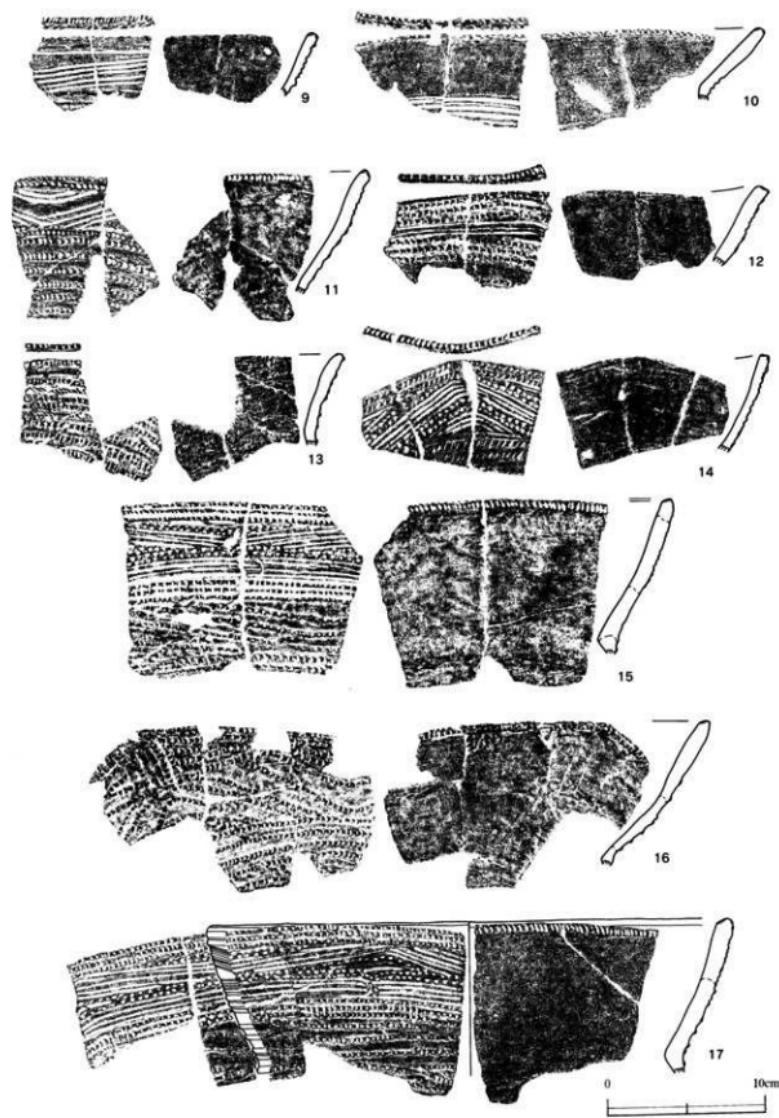
第9図 塞ノ神・微隆蒂文土器出土状況図 5 (P・Q・R-14・15区)

第10図 磐ノ神・微隆帶文土器実測図(1類-1)



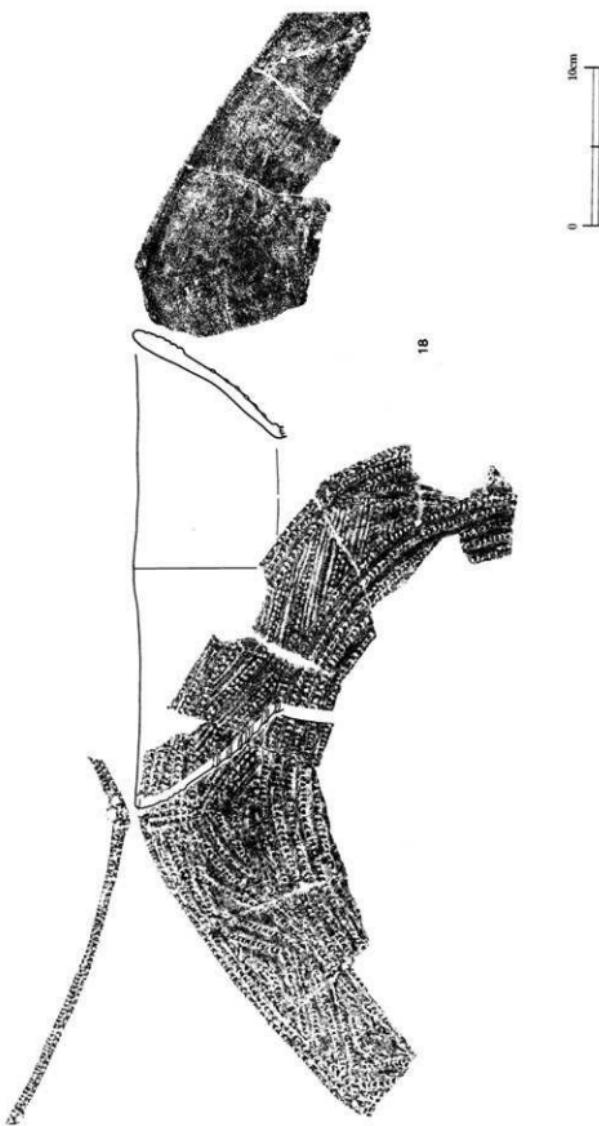


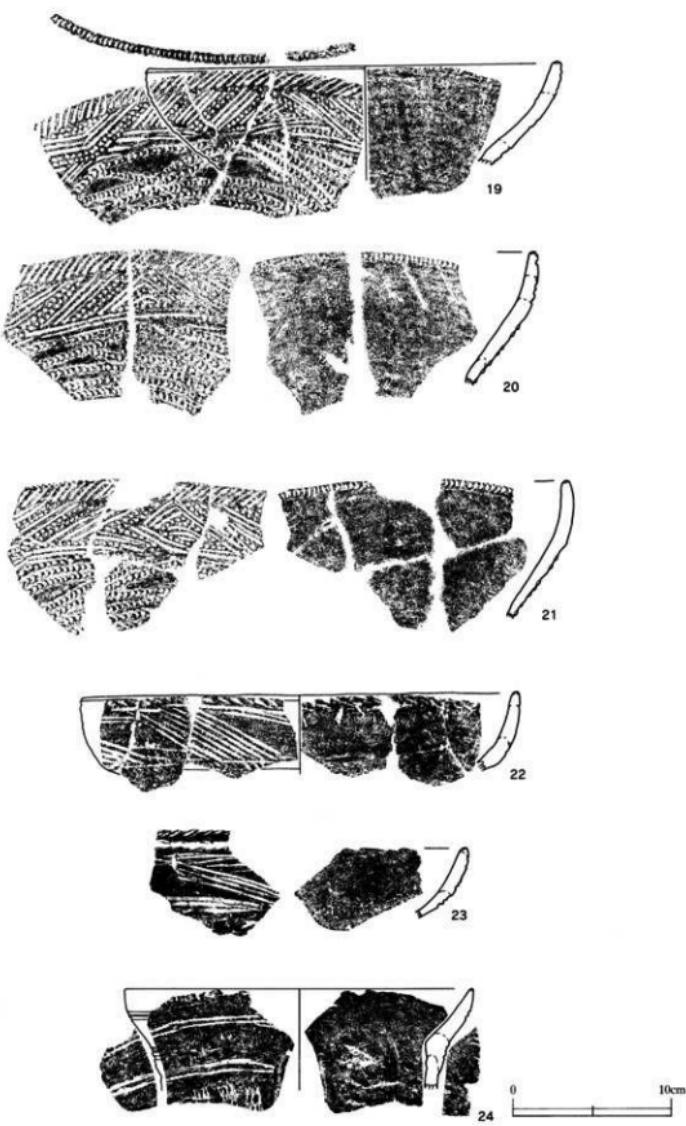
第11図 塞ノ神・微隆帯文土器実測図2(1類-2)



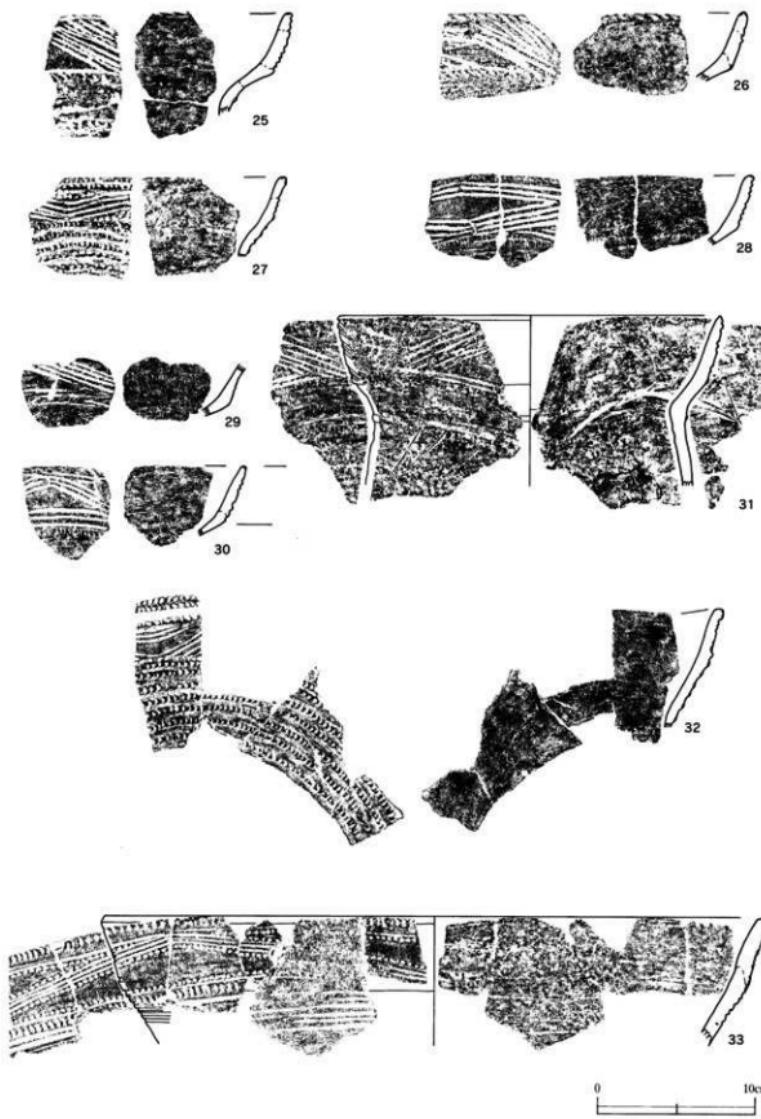
第12図 塚ノ神・微隆蒂文土器実測図3(1類-3)

第13図 塚ノ神・微隆帶文土器実測図4(2類-1)

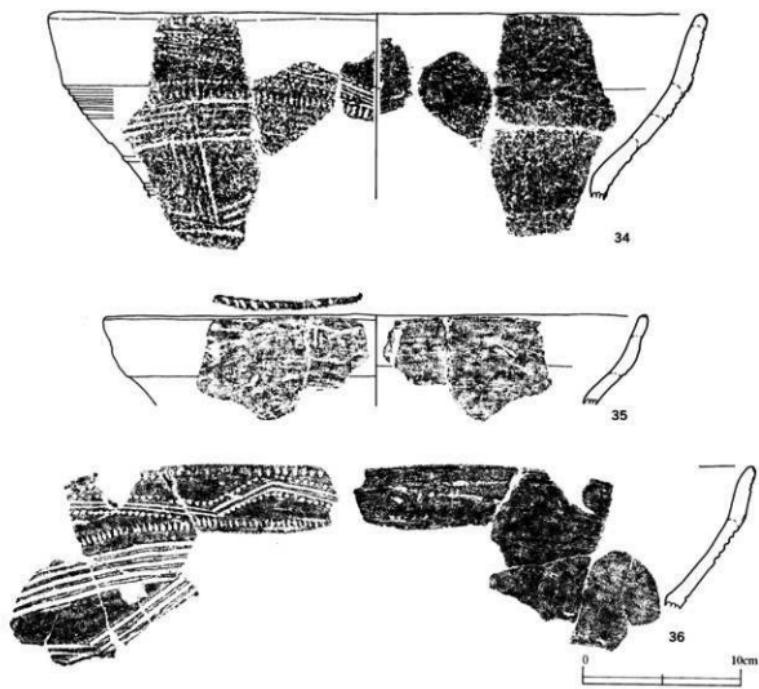




第14図 塞ノ神・微隆帯文土器実測図5(2類-2)



第15図 塞ノ神・微隆帯文土器実測図6(3類-1)



第16図 塞ノ神・微隆帯文土器実測図7(3類-2)

(p.11から続く)

下位の部分では横位方向に刻目を施した、5条以上の微隆帯を波状に施している。のが本類の指標である。しかし中には(34)のように口縁屈曲部より下位の部分にも横位方向や鋸歯状に沈線文を施す土器がある。ところで(34)では口縁中央部の屈曲部と、胴部と口縁部との境の屈曲部には、貼付突帯を巡らし、その上に刻みを施す土器もある。

さて、第1群3類に属する土器の胎土中鉱物は、主に石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器は1点だけであった。また、土器の調整方法は、外器面はナデ調整、もしくは木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。内器面はハケ目調整の後にナデ調整を

行う土器もあったが、丁寧なナデ調整を行うことが主流であり、ミガキ調整を行う土器もあった。土器の色調は、外器面では暗茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が、内器面では暗黄褐色・暗褐色が主流であった。

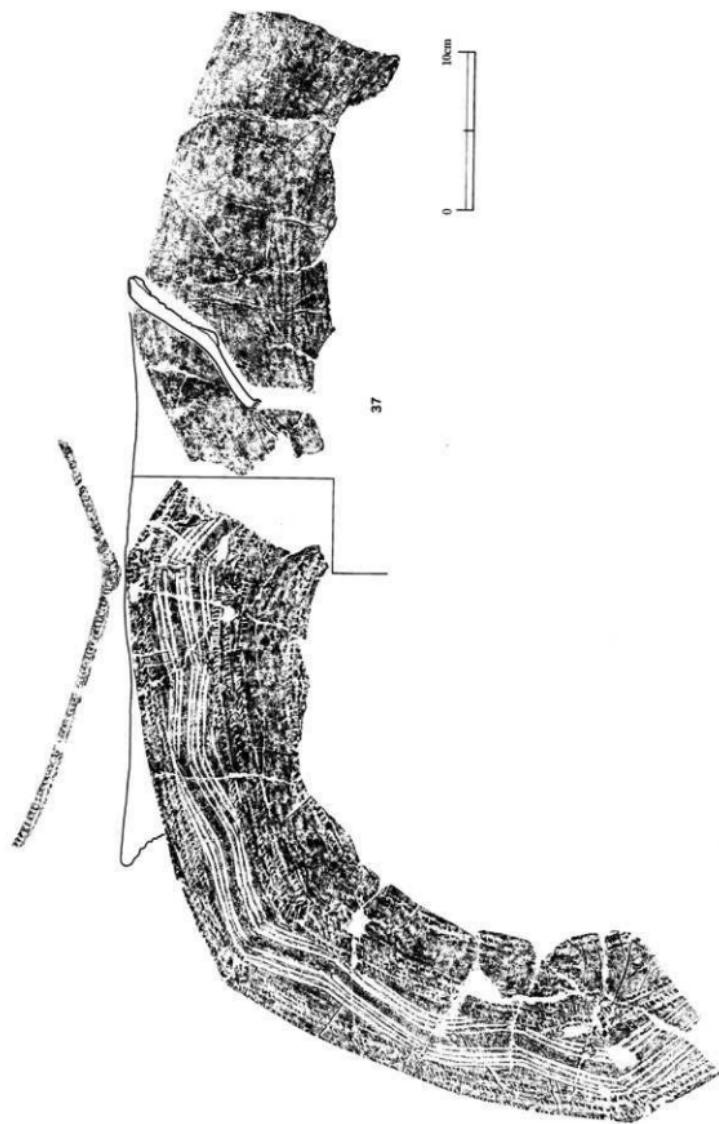
①-4 第1群4類土器(第17図37~第19図52)

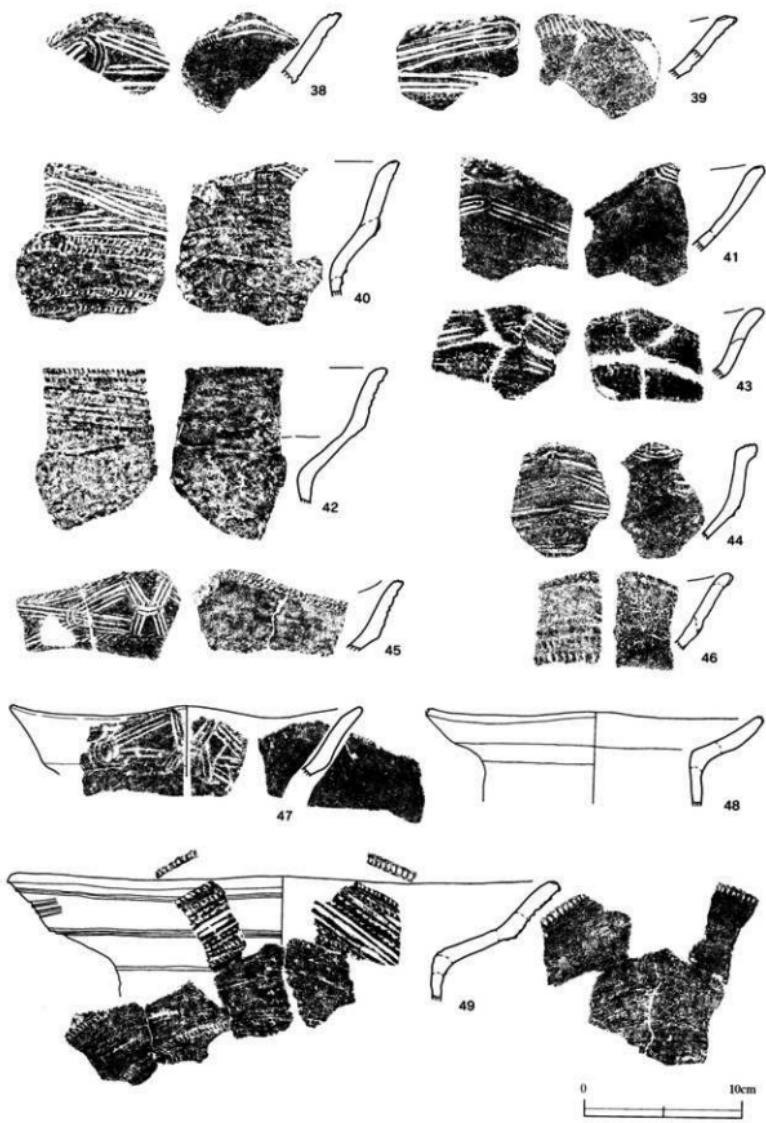
i) 概要

第1群4類土器を、土器の大きさによって分類すると、胴部最大径が30cm前後の中型1類に属する土器(52)と、胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する土器(49)と、胴部最大径が20cm未満の中型3類に属する土器(48)という3種類の深鉢形土器が出土した。その一方で、胴部最大径が40cm前後の大型

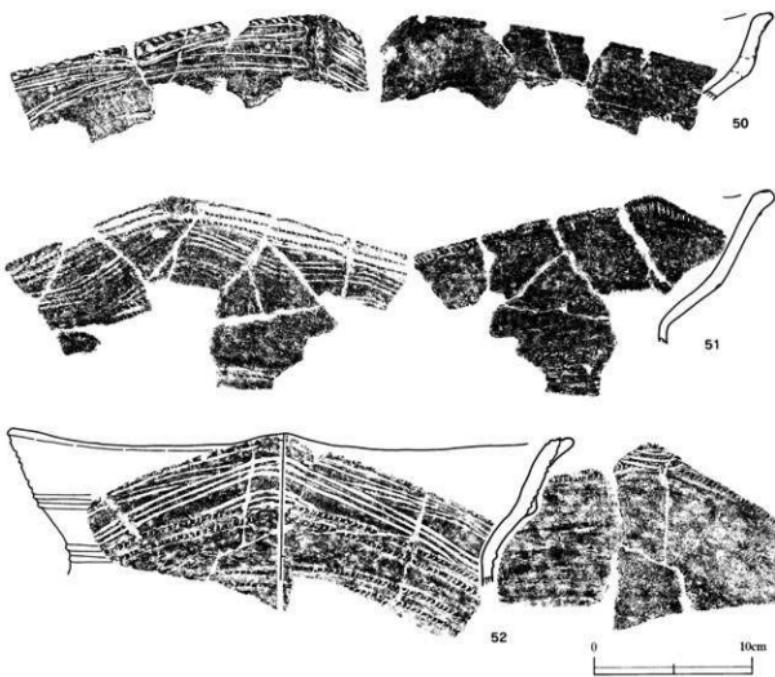
(p.28へ続く)

第17図 墓ノ神・微隆帶文土器実測図8(4類-1)





第18図 塞ノ神・微隆蒂文土器実測図 9(4類-2)



第19図 塞ノ神・微隆帯文土器実測図10(4類-3)

(p.25から続く)

に属する土器出土は認められなかった。

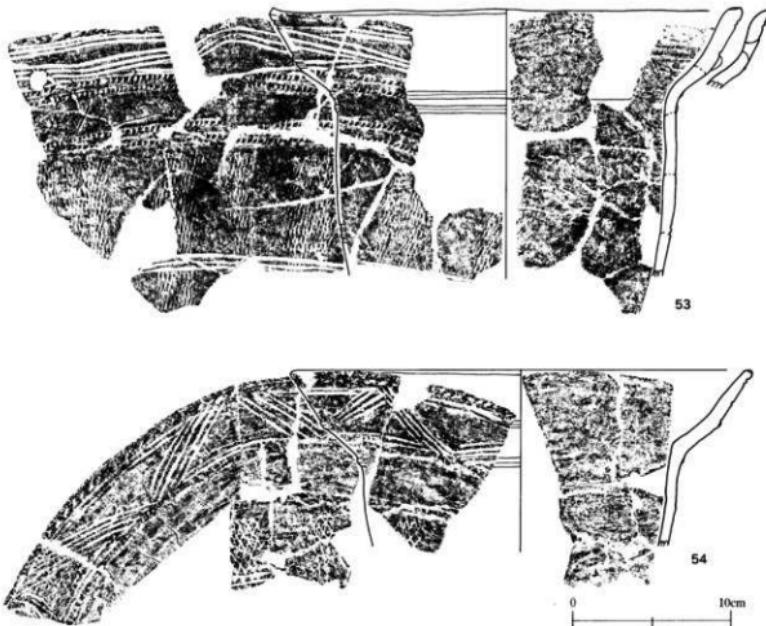
ところで器形的特徴としては、次のことがいえる。

- ①口縁形態はほぼ波状口縁を呈する。
- ②口縁部が外反しながら、口縁中央部で強く屈曲し立ち上がる。
- ③3類土器では不明瞭であった口縁部内面中央部が屈曲する部分の接線が、4類土器では明瞭になる。
- ④口唇上端部は平坦面を形成する。
- ⑤波頂部の口唇端部を外側に張り出させる。つまり出す土器や折り曲げる土器や三角状の突起を張り付ける土器などがある。

以上、5点を指摘できる。

さて、第1群4類に属する土器の胎土中鉱物は、

主に石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器は1点であった。また、土器の調整方法は、外器面がナデ調整、もしくは木製工具によるヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。内器面はハケ目調整の後にナデ調整もしくは丁寧なナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は、外器面では暗茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が、内器面では暗茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が主流であった。



第20図 塞ノ神・微隆蒂文土器実測図11(5類-1)

①-5 第1群5類土器 (第20図53~54)

i) 概要

第1群5類土器は、資料化できた個体数が2個体であったため、類型化には若干困難な面があるが、重要な要素を含んでいるので、あえて類型化した。

まず、大きさによる分類では、両個体とも胴部最大径が20cm以上の大型2類に属する土器であった。

器形的特徴としては、口縁形態がほぼ平口縁を呈すこと、口縁部が外反しながら口縁中央部で強く屈曲し立ち上がること、口唇上端部にはやや内傾する平坦面を作出することなどの特徴がある。

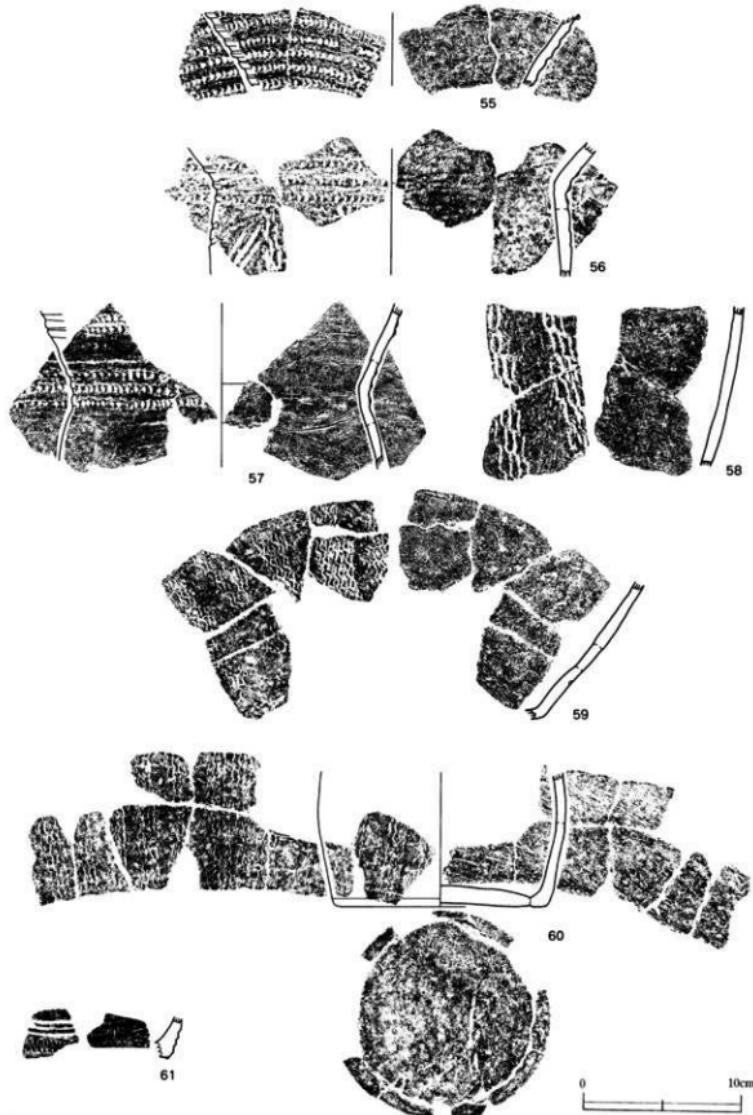
また施文的特徴としては、(53)のようにヘラ状工具を使って、口唇平坦面には縱位方向に刻みを施す。また、口縁屈曲部より上位には、横位方向に2条から3条の山形文や波状文を施している。一方、口縁部と胴部との境と、口縁屈曲部とに、刻目を施した

微隆帯を横位方向に2条ずつ巡らしている。

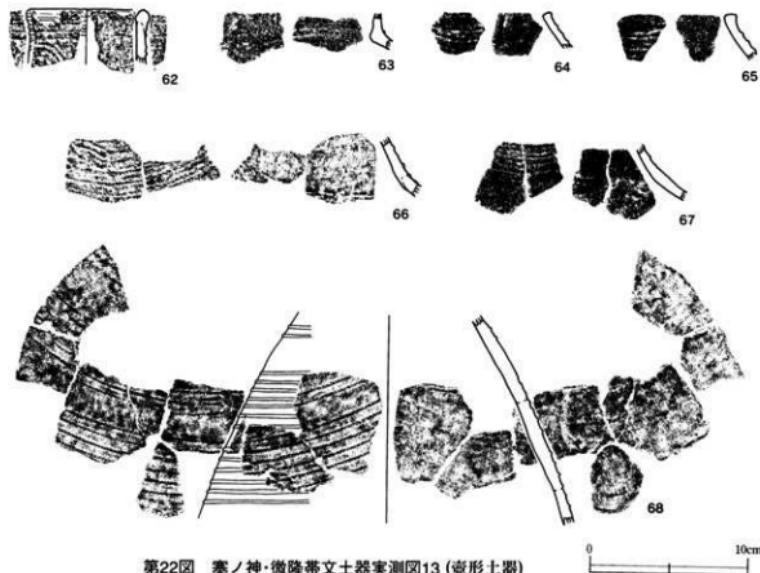
ところで、胴部には縱位方向に網目撚糸文を施す。

撚りは1段左撚(R)の撚、棒状工具に「左巻き後右巻き」で巻いた施文具を使用している。原体幅は現状で約2cmであった。さらに胴部下半には、棒状工具を使用して横位方向に2条の沈文線を巡らす。

さて、第1群5類に属する土器の胎土中鉱物は、主に石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器は(57)と(58)であった。また、土器の調整方法は、外器面はナデ調整、もしくはハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。内器面はヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を、もしくは丁寧なナデ調整を、あるいはミガキ調整を行なうことが主流である。土器の色調は、外器面では暗茶褐色・暗黃褐色・暗褐色が、内器面では暗黃褐色・暗褐色が主流であった。



第21図 塞ノ神・微隆帯文土器実測図12



第22図 塞ノ神・微隆蒂文土器実測図13(壺形土器)

①-6 第1群・壺形土器(第22図62~68)

i) 概要

第1群に属する壺形土器は、径が復元できた土器は(68)の1点のみであった。したがって土器の大きさによる分類は今後の課題となる。

第1群に属する壺形土器は、器形的特徴および施文的特徴から2つに分かれる。

a) 瓢箪形土器:

a) 瓢箪形土器(62・63)は長頸壺である。口縁形態はほぼ平口縁を呈し、口唇部が直行し、口唇部を肥厚させ、長めの頭部が立ち上がり、肩部が強く張るタイプの土器である。このタイプの土器は、62のように口縁部の上面観は円形である。口唇上端部は内傾した平坦面を作出している。

また施文的特徴は、細かい刻みを施した微隆蒂を、口唇肥厚部直下には横位方向に3条巡らし、その下位には弧状に3重に施している。さらに頭部と肩部の境の屈曲部にも横位方向に1条巡らす土器である。以上がa) 瓢箪形土器の特徴である。

b) 瓢箪形土器:

b) 瓢箪形土器(64・68)は無頸壺である。口縁形態はほぼ平口縁を呈する。口唇部は舌状に肥厚させる。口唇部直下から胴部はゆるやかに湾曲しながら張るようになり、胴部最大径は胴部下半に位置する。

また施文的特徴は、細かい刻みを施した微隆蒂を、口唇肥厚部直下から、少なくとも出土している胴部上半までは横位方向に巡らす土器である。なお(68)では、6条を単位として微隆蒂を施している。以上がb) 瓢箪形土器の特徴である。

さて、第1群に属する壺形土器の胎土中鉱物は、石英・長石で構成されていた。角閃石やクロウムモリブデンが含有する土器は少なかったことは注目できる。また、土器の調整方法は、外器面はナデ調整を行なうことが主流である。内器面はハケ目調整の後にナデ調整もしくは丁寧なナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は、外器面では黄褐色・茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が、内器面では黄褐色・茶褐色・暗褐色が主流であった。

塞ノ神・微隆蒂文土器 1類観察表

測定 番号	標示 番号	出土 位置 番号	実測図 番号	層	基準	断面	土				外表面 調査	内部面 調査	色調		備考
							石英	長石	角閃石	クロウナイト			外壁面 調査	内蔵面 調査	
I	S-1.0	3211	1	見											
	S-1.0	4723	見												
	S-1.0	7543	895	見	深鉢	口縁～腹部	○	○	○		縫合・微細	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色～明黄褐色	茶褐色～暗黄褐色
	S-1.0	9014	見												
	S-1.0	9399	見												
II	Q-1.1	413	見												
	Q-1.1	4164	見												
	Q-1.1	5664	見												
	Q-1.1	6991	1040	見	深鉢	口縁	○	○	○		縫合・微細	ナデ	ヨコハケ・ナデ	暗赤褐色～暗茶褐色	暗褐色～暗黄褐色
	Q-1.2	8672	見												
	S-1.0	3216	見												
	S-1.0	3226	見												
	Q-1.3	1241	見												
	Q-1.3	8303	見												
	Q-1.3	9376	900	見	深鉢	口縁	○	○	○		縫合・微細	ナデ	ハケ・丁寧なナデ	暗褐色～暗黄褐色	暗赤褐色～淡褐色
III	Q-1.3	9596	見												
	E-1.1	2452	見												
	E-1.3	996	見												
	R-1.3	129	見												
	R-1.3	142	見		深鉢	口縁	○	○			縫合・微細	ナデ	丁寧なナデ	黄白色～暗褐色	黄白色～暗褐色
	Q-1.1	1751	見												
	Q-1.1	2839	882	見	深鉢	口縁	○	○	○		縫合・微細	ナデ	丁寧なナデ	暗褐色～暗茶褐色	暗褐色～暗褐色
	Q-1.2	7588	見												
	Q-1.1	7307	887	見	深鉢	口縁	○	○			縫合・微細	ヨコハケ・ナデ	ヨコハケ・ナデ	暗褐色	暗褐色
	Q-1.0	729	見												
IV	Q-1.0	3142	見												
	Q-1.1	3179	見												
	Q-1.1	5200	906	見	深鉢	口縁～腹部	○	○			砂粒を含む	ナデ	ナデ	高褐色～暗褐色	高白色
	Q-1.1	10659	見												
	Q-1.1	10675	見												
V	R-0.9	5330	見												
	R-0.9	5664	見												
	R-0.9	5859	897	見	深鉢	口縁～腹部上端	○	○			縫合・微細	ナデ	ハケ・ナデ	暗赤褐色～暗褐色	暗赤褐色～暗褐色
	R-0.9	5974	見												
	R-1.1	2338	見												
	R-1.1	2349	見		深鉢	口縁	○	○	○		縫合・微細	ナデ	丁寧なナデ	暗褐色～暗茶褐色	暗褐色～暗褐色
	Q-1.4	1794	900	見	深鉢	口縁	○	○	○		縫合・微細	ナデ	ハケ・ナデ	暗褐色～暗褐色	暗褐色～暗褐色
	S-1.0	173	見												
	S-1.0	230	見												
	S-1.0	9321	見												
VI	R-1.0	3981	878	見	深鉢	口縁	○	○	○		縫合・微細	ナデ	ヨコハケ・ナデ	暗褐色	暗褐色
	R-1.0	7703	見												
	R-1.3	978	見												
	R-1.3	1036	884	見	深鉢	口縁	○	○	○		縫合・微細	ヨコハケ・ナデ	ヨコハケ・ナデ	黄褐色～茶褐色	暗褐色～茶褐色
	R-1.3	1091	見												
	R-0.9	1065	877	見	深鉢	口縁	○	○			縫合・微細	ナデ	ヨコハケ・ナデ	暗褐色～茶褐色	暗褐色～茶褐色
	R-0.9	1065	877	見	深鉢	口縁	○	○			縫合・微細	ナデ	ヨコハケ・ナデ	暗褐色～茶褐色	暗褐色～茶褐色
	S-1.0	4557	見												
	S-1.0	9399	885	見	深鉢	口縁	○	○	○		縫合・微細	ナデ	ナデ	茶褐色～暗茶褐色	茶褐色～暗茶褐色
	R-0.9	1276	見												
VII	R-0.9	1280	見												
	R-0.9	1285	見												
	R-0.9	1287	見												
	R-0.9	1415	見												
	Q-1.0	3719	見												
VIII	Q-1.0	6650	894	見	深鉢	口縁～腹部上端	○	○	○		縫合・微細	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色	暗茶褐色
	S-1.0	9216	見												

塞ノ神・微隆蒂文土器 2類観察表

件番	報告	出土	記述	測定	基準	器種	部位	粘 土				外部面 調査	内部面 調査	色 調		備考	
								石英	長石	角閃石	クロランゴ	砂粒		外部面	内部面		
13	R-0-9	597	V1														
	R-0-9	1267	V1														
	R-0-9	1278	1047	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						細紗・微紗	ナダ	丁寧なナダ	暗青褐色～暗赤褐色	
	R-0-9	1285	V1														
	R-0-9	1289	V1														
14	R-0-9	1690	V1														
	R-0-9	1826	V1														
	R-0-9	2537	893	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						細紗・微紗	ナダ	ハケ・ナダ	明黄色～暗赤褐色	暗褐色～暗黃褐色
	S-1-0	126	V1														
	S-1-0	3201	V1														
15	R-0-9	1780	1056	V1													
	R-0-9	2066	V1														
	R-0-9	1689	V1														
	R-0-9	2528	1055	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						細紗・微紗	ナダ	丁寧なナダ	暗青褐色～暗赤褐色	暗褐色～暗褐色
	R-1-2	348	V1														
16	R-1-2	296	872	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						細紗・微紗	ナダ	丁寧なナダ	暗青褐色～暗赤褐色	暗褐色～暗褐色
	R-1-2	510	V1														
	R-1-2	1100	986	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						細紗・微紗	ナダ	ハケ・ナダ	暗褐色～明黄色	暗褐色～暗褐色
	R-1-2	160	919	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						砂粒を含む	ナダ	ナダ	暗青褐色～暗赤褐色	暗褐色～暗褐色
	S-1-2	160	V1														

塞ノ神・微隆蒂文土器 3類観察表

件番	報告	出土	記述	測定	基準	器種	部位	粘 土				外部面 調査	内部面 調査	色 調		備考	
								石英	長石	角閃石	クロランゴ	砂粒		外部面	内部面		
17	R-1-2	1880	884	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						砂粒を含む	ナダ	ハケ・ナダ	暗褐色	暗青褐色～暗褐色
	R-1-1	2241	874	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						細紗・微紗	ナダ	丁寧なナダ	暗青褐色～暗褐色	暗褐色～暗褐色
	S-1-0	1212	883	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						細紗・微紗	ナダ	丁寧なナダ	暗青褐色～暗褐色	暗褐色～暗褐色
	R-1-0	6829	918	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						細紗・微紗	ナダ	ハケ・ナダ	暗褐色～暗褐色	暗褐色～暗褐色
	R-1-4	1441	987	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						砂粒を含む	ナダ	ヨコハナナダ	暗褐色	暗褐色～暗褐色
18	R-1-0	6805	983	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						細紗・微紗	ナダ	ヨコハナナダ	暗褐色～一条柄	暗褐色～暗褐色
	R-1-0	7277	916	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						砂粒を含む	ナダ	ハケ・ナダ	暗系褐色	暗褐色～暗褐色
	S-1-0	431	V1														
	S-1-0	942	887	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						砂粒を含む	ナダ	ハガキ	暗褐色～暗系褐色	暗褐色～暗系褐色
	S-1-0	2944	V1														
19	Q-1-1	11891	V1														
	Q-1-1	12282	982	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						砂粒を含む	ナダ	丁寧なナダ	暗各褐色～各褐色	暗褐色～暗褐色
	Q-1-1	12487	982	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						砂粒を含む	ナダ	ヨコハナナダ	右下がき・ヨコハナナダ	暗褐色～暗褐色
	R-1-1	2526	V1														
20	Q-1-1	12272	886	V1	深鉢	口縁～無底上層	○ ○ ○						砂粒を含む	ナダ	丁寧なナダ	暗褐色～黃褐色	暗褐色～黃褐色
	R-1-2	553	873	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						細紗・微紗	ナダ	ハケ・ナダ	暗青褐色～暗褐色	暗褐色～暗褐色
	R-1-2	568	873	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						細紗・微紗	穢いナダ	ハケ・ナダ	暗青褐色～暗褐色	暗褐色～暗褐色
21	R-1-0	5802	V1														
	S-1-0	2470	889	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						砂粒を含む	ナダ	丁寧なナダ	暗各褐色～各褐色	暗褐色～暗褐色
	S-1-0	5985	889	V1	深鉢	口縁	○ ○ ○						砂粒を含む	ナダ	ヨコハナナダ	右下がき・ヨコハナナダ	暗褐色～暗褐色
	S-1-0	5989	V1														

塞ノ特・微隆帶文土器 4 類觀察表

序号	場所	出土	目記	実測圖	縦	横	部位	物 土				外表面 調査	内部面 調査	色 質		備考	
								石英	長石	角閃石	クロウモ	赤鐵	外表面		内部面		
													表面	底面	表面	底面	
37	37	P-1-2	2115	V													
		P-1-2	2116	V													
		P-1-2	2118	V													
		P-1-2	2120	V													
		P-1-2	2121	V													
		P-1-2	2122	V													
38	38	P-1-2	2123	1943	V	底跡	口縫-側縫上端	○	○	○		縫合-側部	ナテ	丁寧なナテ	基褐色-深褐色	基褐色-深褐色	内:スズ付着
		P-1-2	2125	V													
		P-1-2	2448	V													
		P-1-2	2449	V													
		P-1-2	2113	V													
39	39	P-1-2	2186	V													
		38	Q-1-2	2245	981	V	底跡	口縫	○	○	○	縫合を含む	ナテ	ハテ→ナテ	暗茶褐色-暗褐色	暗茶褐色-暗褐色	
		39	R-1-1	1583	991	V	底跡	口縫	○	○	○	縫合を含む	丁寧なナテ	丁寧なナテ	暗茶褐色-暗褐色	暗茶褐色-暗褐色	スズ付着
		40	R-1-1	1584	992	V	底跡	口縫	○	○	○	縫合を含む	ナテ	ハテ→ナテ	基褐色-暗茶褐色	暗茶褐色-暗褐色	スズ付着
		41	Q-0-9	2027	680	V	底跡	口縫	○	○	○	縫合-側部	ナテ	ヨコハタ→ナテ	暗褐色	暗茶褐色-暗褐色	
		42	R-1-0	6882	875	V	底跡	口縫	○	○	○	縫合を含む	ヨコハタ→ナテ	暗褐色	暗茶褐色-暗褐色	暗茶褐色-暗褐色	
43	43	R-1-1	2236	987	V	底跡	口縫	○	○	○	縫合を含む	ヨコハタ→ナテ	暗褐色	暗茶褐色-暗褐色	暗茶褐色-暗褐色		
		43	S-1-0	5836	982	V	底跡	口縫	○	○	○	縫合-側部	ナテ	ヨコハタ→ナテ	基褐色	暗茶褐色-暗褐色	
		44	R-1-0	7901	879	V	底跡	口縫	○	○	○	縫合-側部	ヨコハタ→ナテ	ヨコハタ→ナテ	基褐色-暗褐色	暗茶褐色-暗褐色	
		45	Q-1-1	4320	978	V	底跡	口縫	○	○	○	縫合-側部	ナテ	ハテ→ナテ	基褐色-暗茶褐色	暗茶褐色-暗褐色	スズ付着
		47	R-1-1	2853	879	V	底跡	口縫	○	○	○	縫合-側部	ヨコハタ→ナテ	ヨコハタ→ナテ	基褐色	暗茶褐色-暗褐色	口:壁2.2cm
		48	P-1-4	945	V	底跡	口縫-側縫上端	○	○	○	縫合-側部	ヨコハタ→ナテ	ヨコハタ→ナテ	基褐色	暗茶褐色-暗褐色	野文	
50	50	P-1-4	2224	915	V	底跡	口縫-側縫上端	○	○	○	縫合-側部	ヨコハタ→ナテ	ヨコハタ→ナテ	基褐色-暗褐色	暗茶褐色-暗褐色		
		49	Q-2-1	4790	V												
		50	Q-1-1	7963	V												
		51	Q-1-1	11062	829	V	底跡	口縫-側縫上端	○	○	○	縫合を含む	ヨコハタ→ナテ	ヨコハタ→ナテ	暗茶褐色-暗褐色	暗茶褐色-暗褐色	
		52	Q-1-1	12205	V												
		53	Q-1-1	12241	V												
54	54	Q-1-1	5194	V													
		54	Q-1-1	10640	V												
		55	Q-1-1	10641	917	V	底跡	口縫	○	○		縫合-側部	ナテ	丁寧なナテ	暗褐色-暗茶褐色	暗茶褐色-黒褐色	
		56	Q-1-1	11271	V												
		57	P-1-2	2115	V												
		58	P-1-2	2124	V												
59	59	P-1-2	2126	964	V	底跡	口縫	○	○	○	縫合-側部	ナテ	ナテ	東白色-深褐色	基褐色-深褐色	スズ付着	
		P-1-2	3113	V													
60	60	P-1-2	3187	V													
		61	E-0-9	1365	962	V	底跡	口縫	○	○	○	縫合-側部	ナテ	ハテ・ナテ	基褐色-深褐色	暗茶褐色-深褐色	スズ付着

塞ノ神・微隆蒂文土器 5類観察表

件名	報告番号	出土区	社記	実測図番号	縁	形種	部位	地 土				外表面調査	内部面調査	色 調		備考
								石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂糖		外表面	内部面	
第20 国	53	R-0-9	1150	V1	深鉢	口縁～腹部	○ ○ ○	細砂・微砂	ナダ	ナダ	茶褐色～黒褐色	暗茶褐色～茶褐色	口徑29.8cm スヌ付着 網目柄文			
		R-0-9	1265	V1												
		R-0-9	1166	V1												
		R-0-9	1947	913												
		R-0-9	1948	V1												
		R-0-9	1950	V1												
	54	R-0-9	4111	V1												
	R-1-0	1040	914	V1	深鉢	口縁～腹部	○ ○ ○	細砂・微砂	ナダ	ハケ～ナダ	暗茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～茶褐色	口徑28.4cm			
	R-1-0	5668														

塞ノ神・微隆蒂文土器観察表

件名	報告番号	出土区	社記	実測図番号	縁	形種	部位	地 土				外表面調査	内部面調査	色 調		備考
								石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂糖		外表面	内部面	
第58 国	55	Q-1-1	2337	V1	無縁	深鉢	○ ○ ○	細砂・微砂	ミガキ	青白色～暗黃褐色	暗茶褐色～暗黃褐色	口徑22.0cm				
		Q-1-2	442	801												
		S-1-0	9200	V1												
		S-1-0	9204	V1												
		S-1-0	2358	800	V1	深鉢	○ ○ ○ ○	細砂・微砂	ミガキ	青白色～暗黃褐色	暗茶褐色～暗黃褐色	口徑20.3cm、スヌ付				
		R-1-2	71	V1												
		R-1-2	97	854	V1	深鉢	○ ○ ○ ○ ○	細砂・微砂	ナダ	ハケ～ナダ	暗茶褐色～暗褐色	暗茶褐色～暗褐色	口徑19.6cm、スヌ付			
	59	Q-1-1	4121	V1	無縁	深鉢	○ ○ ○ ○ ○	細砂・微砂	ナダ	ミガキ	青白色～暗黃褐色	暗茶褐色～暗褐色	口徑21.0cm、スヌ付			
	Q-1-2	4632	802													
	R-1-0	8279	V1													
	R-1-0	13213	V1													
	60	R-0-9	990	V1												
	R-0-9	997	V1	無縁	深鉢	底部下手～底部	○ ○ ○ ○ ○	細砂・微砂	ナダ	ミガキ	青白色～暗黃褐色	暗茶褐色～暗褐色	口徑21.0cm、スヌ付			
	R-0-9	1065	V1													
	R-0-9	1518	V1													
	R-0-9	1891	V1													
	R-0-9	1770	V1													
	R-0-9	2971	801													
	R-0-9	2987	V1													
	R-0-9	2518	V1													
	R-0-9	2933	V1													
	R-0-9	2946	V1													
	61	R-1-2	999	900	V1	深鉢	底部下手～底部	○ ○ ○ ○ ○	細砂・微砂	ナダ	ハケ～ナダ	暗茶褐色	暗茶褐色	口徑21.4cm		

塞ノ神・微隆蒂文土器(壺形土器)観察表

件名	報告番号	出土区	社記	実測図番号	縁	形種	部位	地 土				外表面調査	内部面調査	色 調		備考	
								石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂糖		外表面	内部面		
第68 国	62	R-1-1	2230	908	切	有縫口 口縁～腹部	○ ○ ○ ○ ○	細砂・微砂	ナダ	ミガキ	青白色～暗黃褐色	暗茶褐色～暗褐色	口徑23.0cm				
		R-1-2	666	910													
		R-1-3	64	306													
		R-1-1	34	907													
		R-1-1	2428	912													
		R-1-1	2972	912													
		R-1-1	1393	911													
	67	Q-1-4	27	V1	切	有縫口	口縁～腹部	○ ○ ○ ○ ○	細砂・微砂	ナダ	ミガキ	青白色～暗黃褐色	暗茶褐色～暗褐色	口徑23.4cm			
	Q-1-4	3621	V1														
	Q-1-4	3622	V1														
	Q-1-4	3265	905	V1													
	Q-1-4	2434	V1														
	Q-1-4	3636	V1														
	Q-1-4	3650	V1														
	68	Q-1-4	3664	V1													

② 第2群 塚ノ神A a式土器(第23図～第44図)

i) 概要

第2群に属する土器は、1422点の土器片が出土し、その内の239点、81個体を資料化した。

第2群は、器形的特徴について「円筒形の胴部に、ラッパ状に開いた口縁部が付くもので、平柄式の要素を残して、波状口縁を呈するもの、口縁部が僅かに屈曲するものが若干見られる。底部はやや上げ底氣味の平底である。内面の口縁部と胴部の壇に明瞭な棱線を形成する」土器とした。一方、施文的特徴については「口縁部には幾何学文・連点文を配し、胴部には撫糸文系の網文を施文する」。また、「胴部にも幾何学文・連点文が施文されていることで、網目文や、まれに撫糸文が縦に施文された後で、その上にさらに籠描きの円線を重ねて施文している」と定義されている。河口貞徳氏により設定された土器型式である。

ではまず最初に、上野原遺跡第10地点において、第2群に属する土器がどの地点から主に出土しているか、その状況を検討してみよう（第23図～第31図参照）。なお、図中のドットは実測図が未掲載である上層も1ドット1点で示している。

出土状況全体図を検討して指摘できることは、集中して出土している区域として、①R・S-10区からQ・R-11区およびQ-12区にかけての区域と、②P・Q・R-14区からP・Q-15区にかけての区域とを挙げることができる。

ところで①区域は、平柄式土器様式期の集中区域（第5分冊参照）とも、第1群（塚ノ神・微隆帶土器）に属する土器の集中区域（第3図参照）とも重なる区域である。そのうえ、S-11区からR・S-12区にかけての区域には、遺物があまり出土しない状況も平柄式土器様式期や第1群土器期に引き続いで同様の状況である。

ところが②区域は、平柄式土器様式期や第1群土器期では遺物があまり出土していない区域である。つまり網文早期後葉の時期において、この区域が土器の集中出土区域になるのは、第2群の時期が初めてである。

次に注目できることは、①区域中にも②区域中に

も、さらに土器が特に集中して出土している地点が何カ所も認められることである。

これらのことから、第23図から第31図に示した出土状況は、土器が地形の傾斜などの自然的要因によって集中拡散した結果ではなく、当時の状況を概ね反映した結果であると考えられる。

そのうえで、①区域に属する土器と②区域に属する土器とが密接な接合関係にあることは、①区域と②区域とがほぼ同時に形成されたと考えられる。

このことは当時の「場の機能」を考える上で重要なが、その性格付けについては今後の検討課題である。

さて、上野原遺跡第10地点で出土した第2群に属する土器を分析していくことにする。

第2群は、深鉢形土器と小型深鉢形土器とで構成されていた。そのうち、本報告では深鉢形土器を器形的特徴および施文的特徴から1類土器から4類土器まで4分類した。その特徴を以下に記す。

②-1 第2群1類土器(第32図1～9)

i) 概要

第2群1類土器を、土器の大きさによって分類すると、胴部最大径が40cm前後を超える大型に属する土器（7）と、胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する土器（4）と、胴部最大径が20cm未満の中型3類に属する土器（6）という3種類の大きさが異なる深鉢形土器が出土した。

第2群1類に属する土器の器形的特徴としては、土器の大きさの違いに係わらず、口縁形態がほぼ平口縁を呈し、口縁部が僅かに内湾しながら屈曲し、胴部が僅かに丸みを帯びた円筒形を呈する。底部は底径が約15cmを測る、平底である。

また施文的特徴としては、ヘラ状工具を使って、口唇部には上面觀が羽状になる刻みを施す点と、口縁部には数条の沈線文を施す点とを挙げができる。そして胴部には2条もしくは3条の結節文を縱位方向に施す土器（4、7）と、網目文にならない撫糸文を縱位方向に施す土器（8）と、網目文にならない撫糸文を縱位方向に施す土器（6）がある。

さて、第2群1類に属する土器の胎土中鉱物は、

石英・長石・角閃石で構成されていた。特にクロウンモが含有していないことは注目できる。また、土器の調整方法は、外器面・内器面ともにナデ調整、もしくは木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は、外器面では茶褐色から暗茶褐色が、内器面では黒褐色から茶褐色が主流であった。

ii) 小結

さて、第1群を分類する際に用いた土器の指標の1つが、「結節文」を施すことであった。このとき同じ「結節文」を施す第2群1類と、類を分けることになったのは以下のとおりである。

すなわち、第1群に属する土器は、口縁部外器面の屈曲の度合いが強く、稜線が明瞭な土器とした。これに対して第2群1類に属する土器は、口縁部外器面の屈曲の度合いが僅かに角度の変化が見られる程度の屈曲にとどまり、稜線が不明瞭な土器とした。

この器形の特徴の違いは程度の差である。しかし、「平底式土器様式から塞ノ神式土器様式へ」という土器型式列を考へたとき、「口縁部肥厚帯（という文様帶）を意識する土器から意識がなくなる土器へ」という器形の特徴の変遷と、「沈線文+刺突点点文施文から沈線文施文へ」あるいは「繩文から撚糸文へ」という施文的特徴の変遷とが、わずかな差が現れつつ変化を生じたものとして考え、器形的変遷を重視して分類を行った。その結果「結節文」を施す土器は、第1群と第2群1類とに分かれたが、過渡期の様相として捉えることが可能であろう。

②-2 第2群2類土器（第33図10～第38図43）

i) 概要

第2群2類に属する土器は、土器の大きさで分類すると、胴部最大径が30cm前後の中型1類に属する土器（10・12・15～17・23）と、胴部最大径が20cm以上の大型2類に属する土器（11・13・14・18・21・22・35・37）と、胴部最大径が20cm未満の中型3類に属する土器（24・25）と、胴部最大径が15cm前後の小型に属する土器（26・27）という、3種類の大きさが異なる中型の深鉢形土器と小

型深鉢形土器とが出土していることが認められた。

さて、器形的特徴としては、口縁形態がほぼ平口縁を呈する土器（10～12、21、23～25、27）と、緩やかな波状口縁を呈す土器（13～18、22、26）とが本類でも認められた。

ところで大きさや口縁形態の違いに係わらず、口縁部はラッパ状に聞く土器である。胴部形態は直線的に口縁部と底部をつなぐ円筒形を呈する土器が大部分であるが、胴部が湾曲する土器（10）もある。さらに底部は器形的特徴の違いから、

a：やや上げ底気味の底部に対して、胸部が直立して立ち上がる土器（39・40）。

b：やや上げ底気味の底部に対して、胸部がやや外反しながら立ち上がる土器（38）。

c：やや上げ底気味の底部に対して、胸部がやや済曲しながら立ち上がる土器（43）。

という3種類に分けられるようである。共に底径は13cm～15cmが主流である。

一方、第2群2類土器の施文的特徴としては、まずヘラ状工具を使って、口唇部には上面観が羽状に刻みを施す点を挙げることができる。

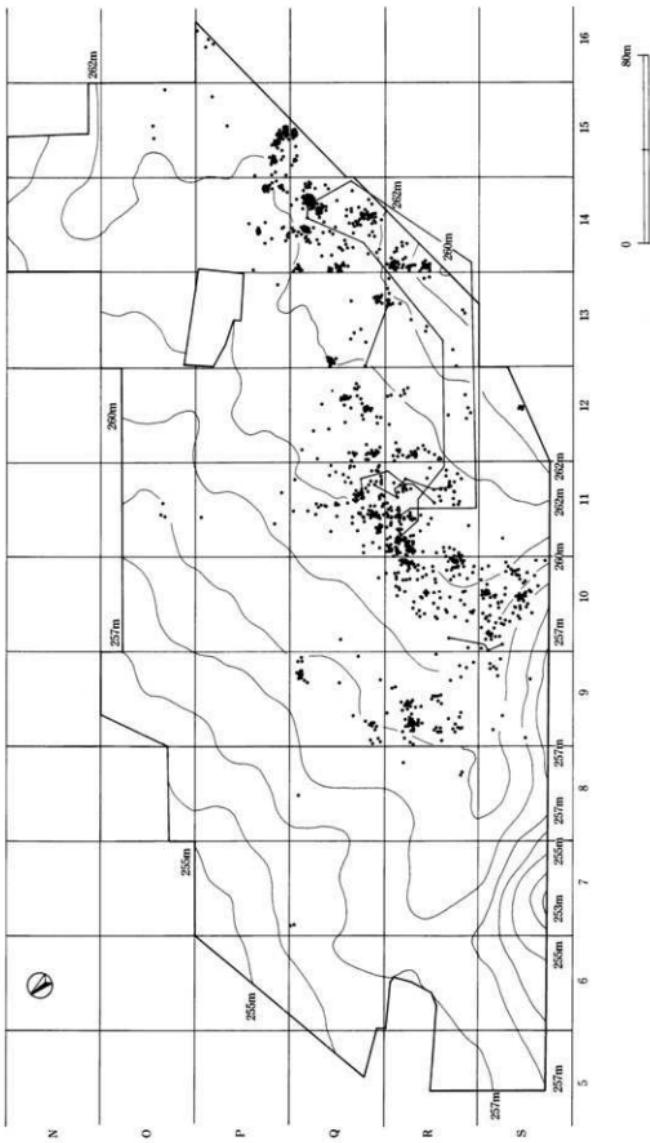
次に先端が尖った又状工具あるいは棒状工具を使って横位方向に、口縁部には2条ないし3条の沈線文を2ヶ所ないし3ヶ所に巡らしている。特に緩やかな波状口縁を呈する土器では、多くの土器が波頂部の直下で、沈線と沈線とを丸くなぎ終結させている。

胸部には、まず縱位方向に3条から5条を単位とした、網目撚糸文を施す（28～36）。多くは、1段左撚（R）の糸を棒に巻き付けたものを原体とする。現状で原体の幅を測ると約2cmであった。

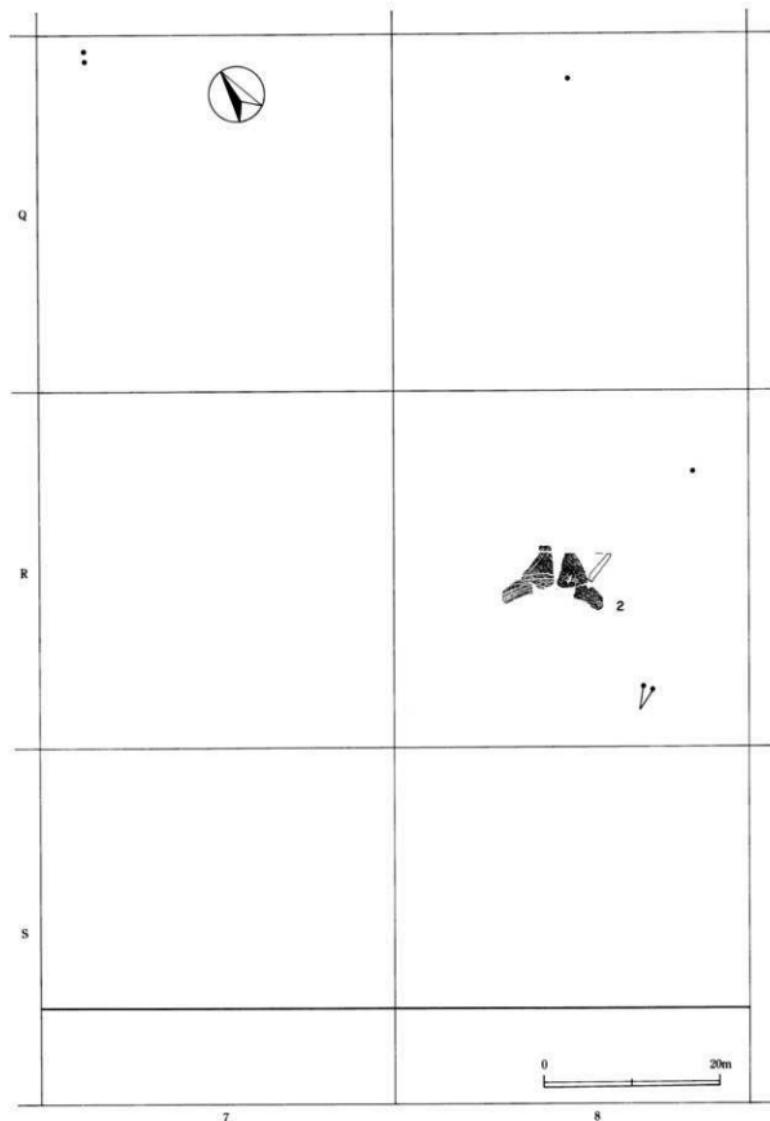
この網目撚糸文を施した後に、又状工具あるいは棒状工具を使って、2条から3条の沈線文を1単位として、胴部中の数か所で横位方向に巡らしている。

さて、第2群2類に属する土器の胎土中鉱物は、主に石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有していた土器は13・18・19の3個体であった。また土器の調整方法では、外器面がナデ調整を、内器面が木製工具によるヨコ方向のハケ目調整

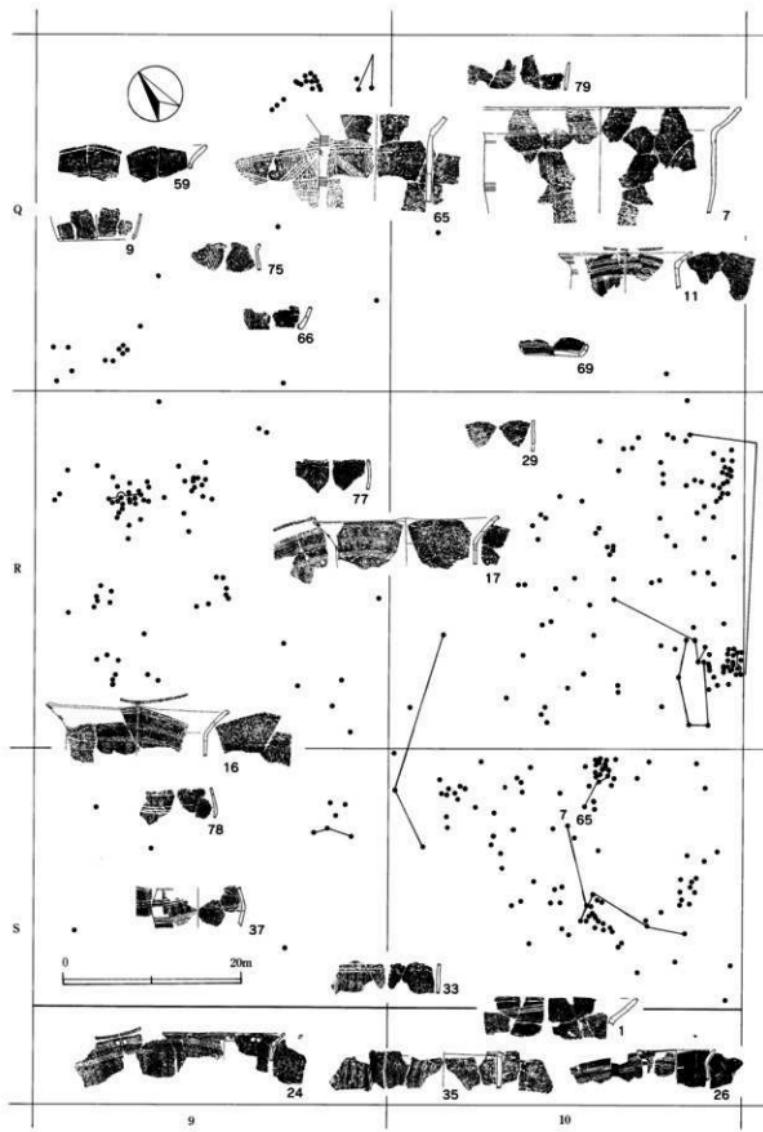
(p.53へ続く)



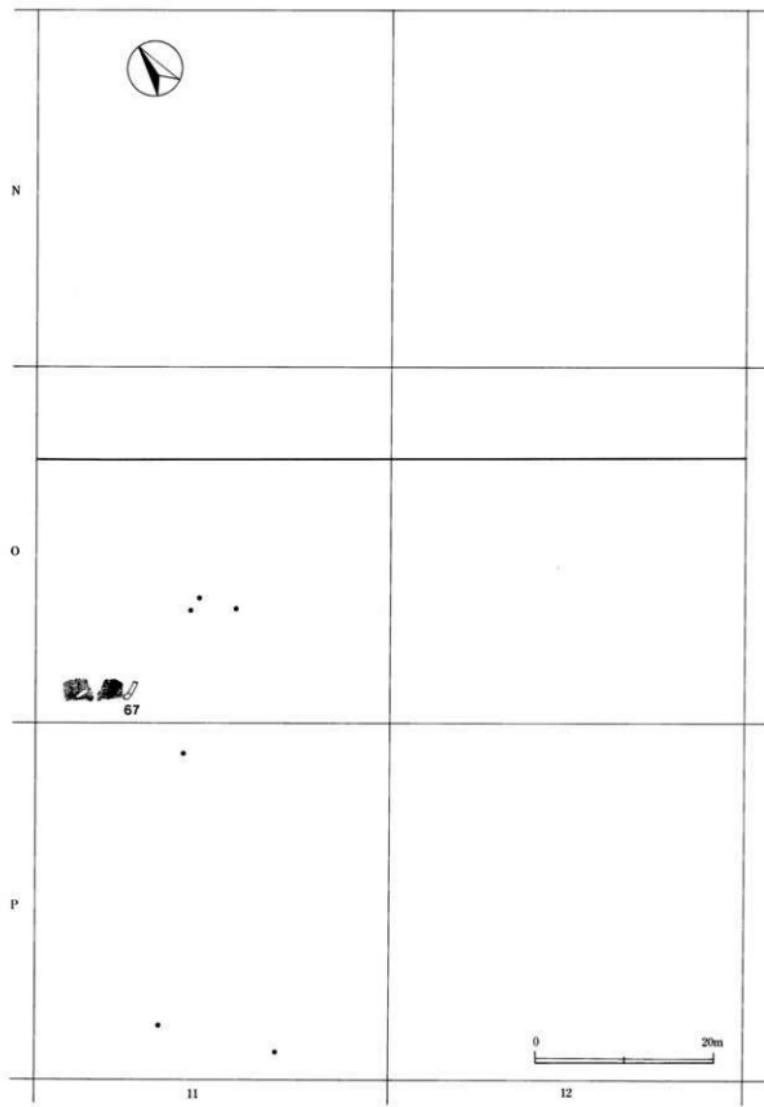
第23図 墓ノ神A式土器出土状況全図



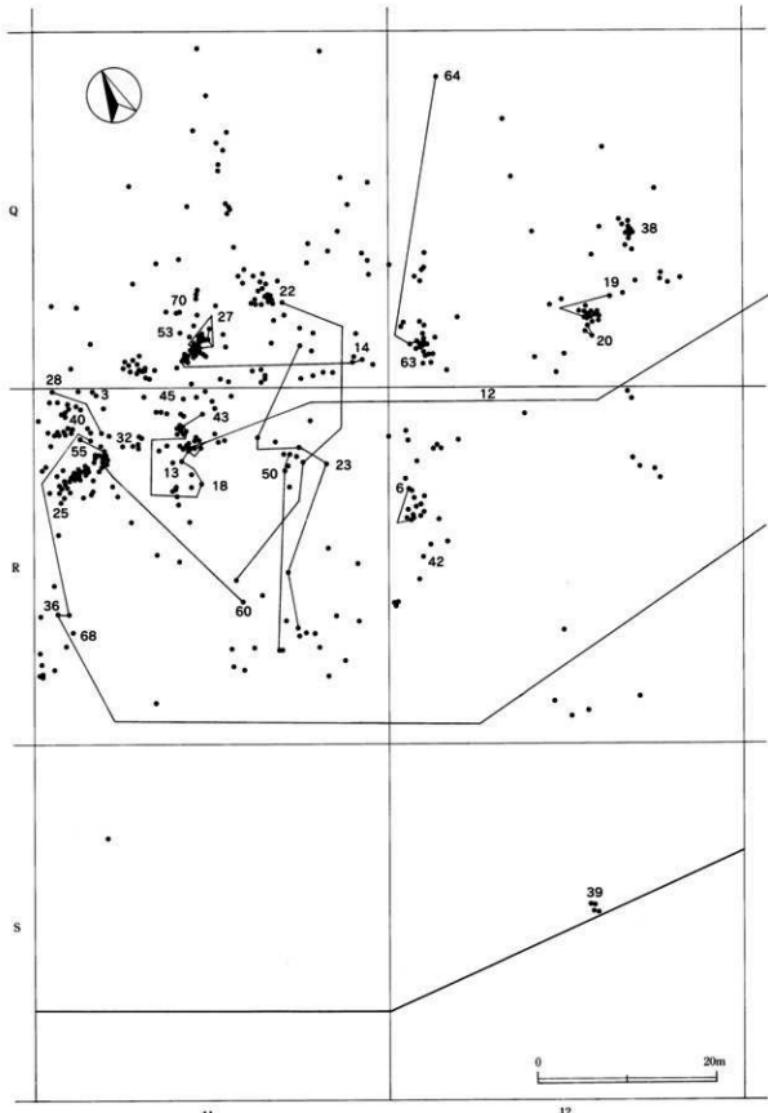
第24図 塞ノ神A a式土器出土状況図1 (Q・R・S - 7・8区)



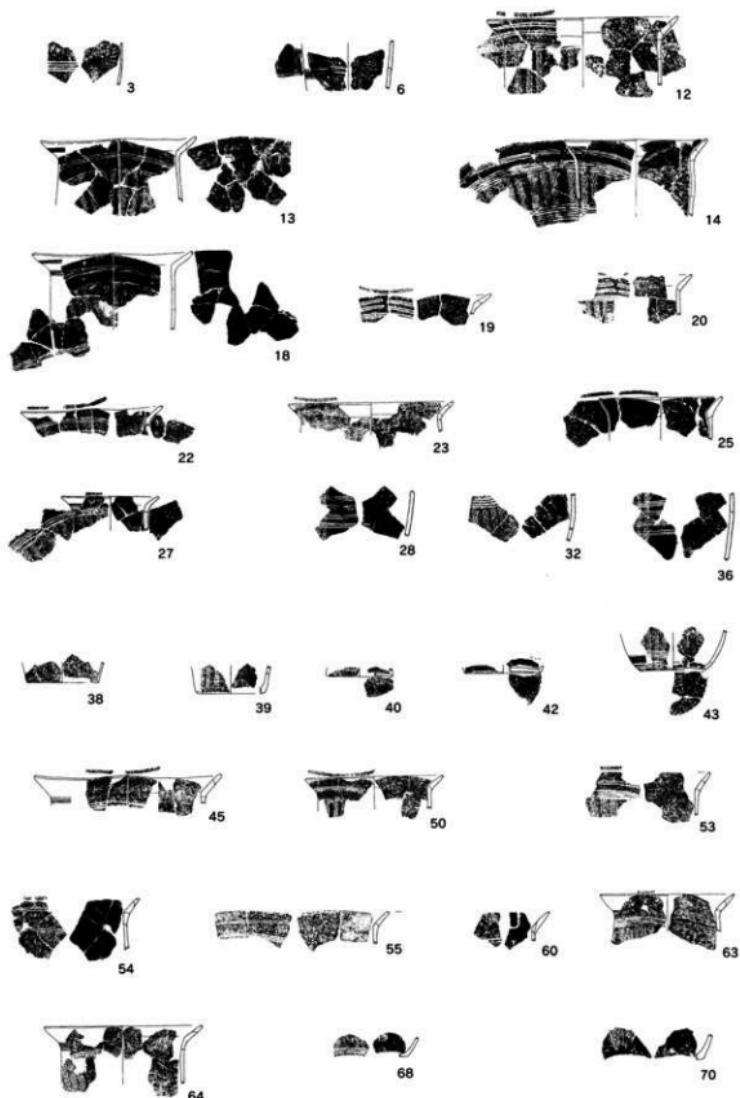
第25図 塞ノ神A a式土器出土状況図2 (Q・R・S・9・10区)



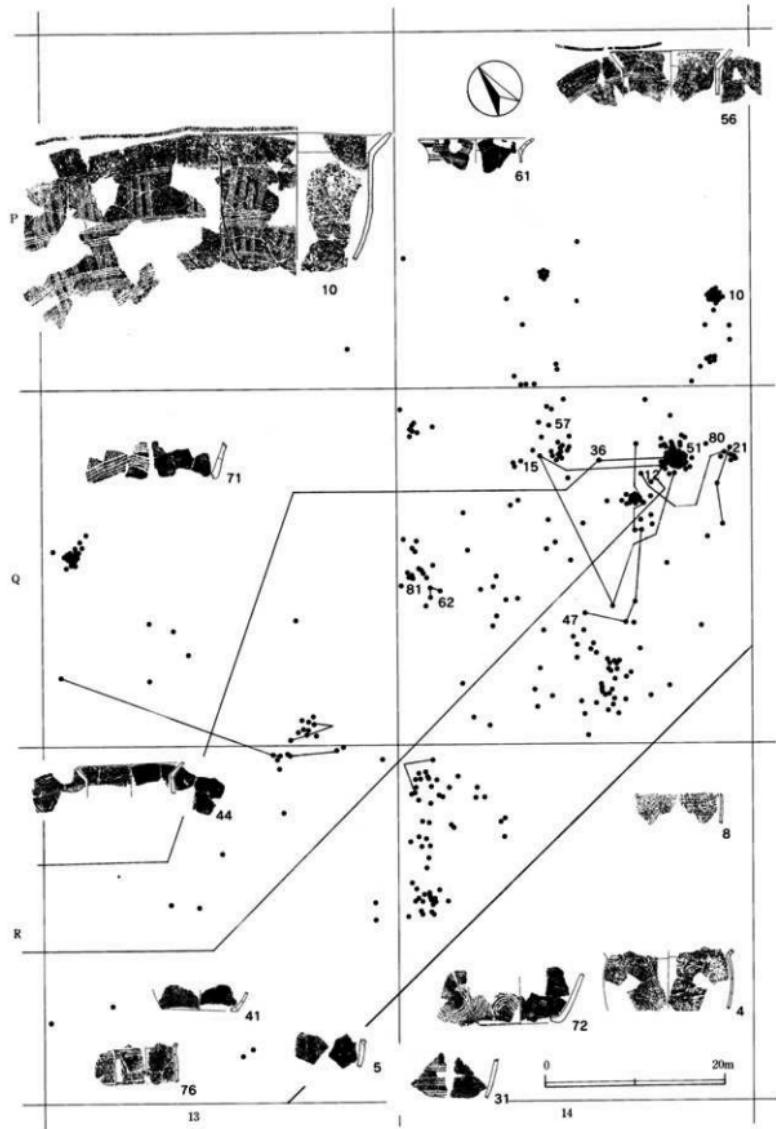
第26図 塞ノ神Aa式土器出土状況図3(N・O・P-11・12区)



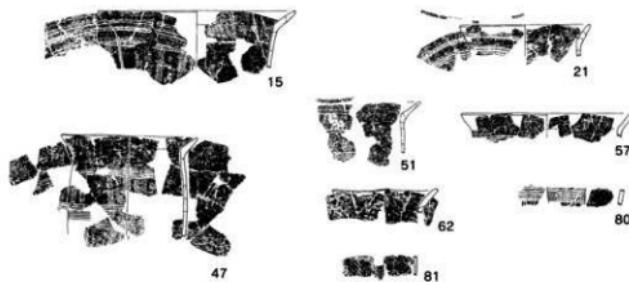
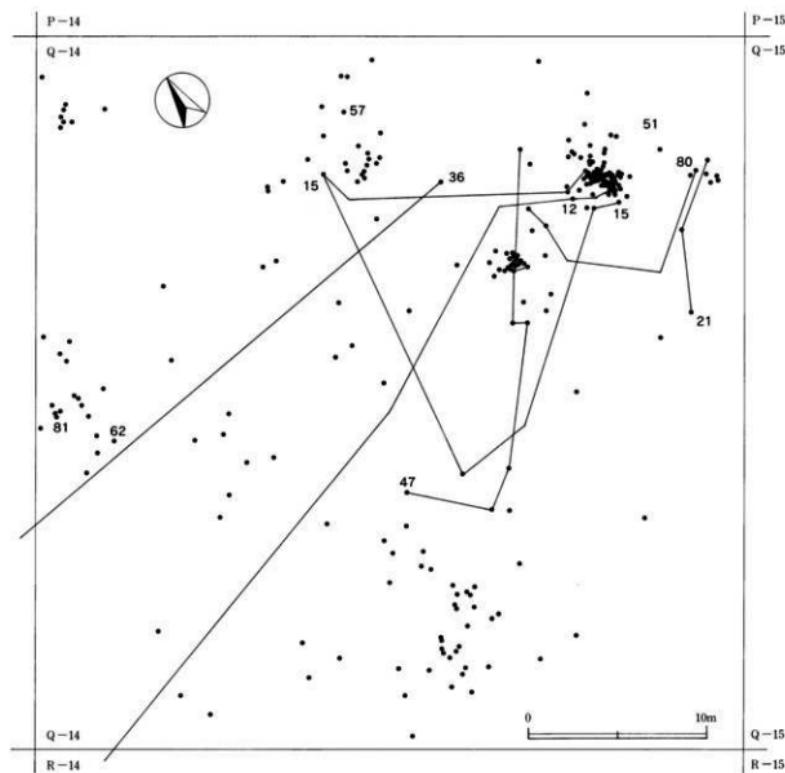
第27図 塞ノ神A a式土器出土状況図4 (Q・R・S-11・12区)



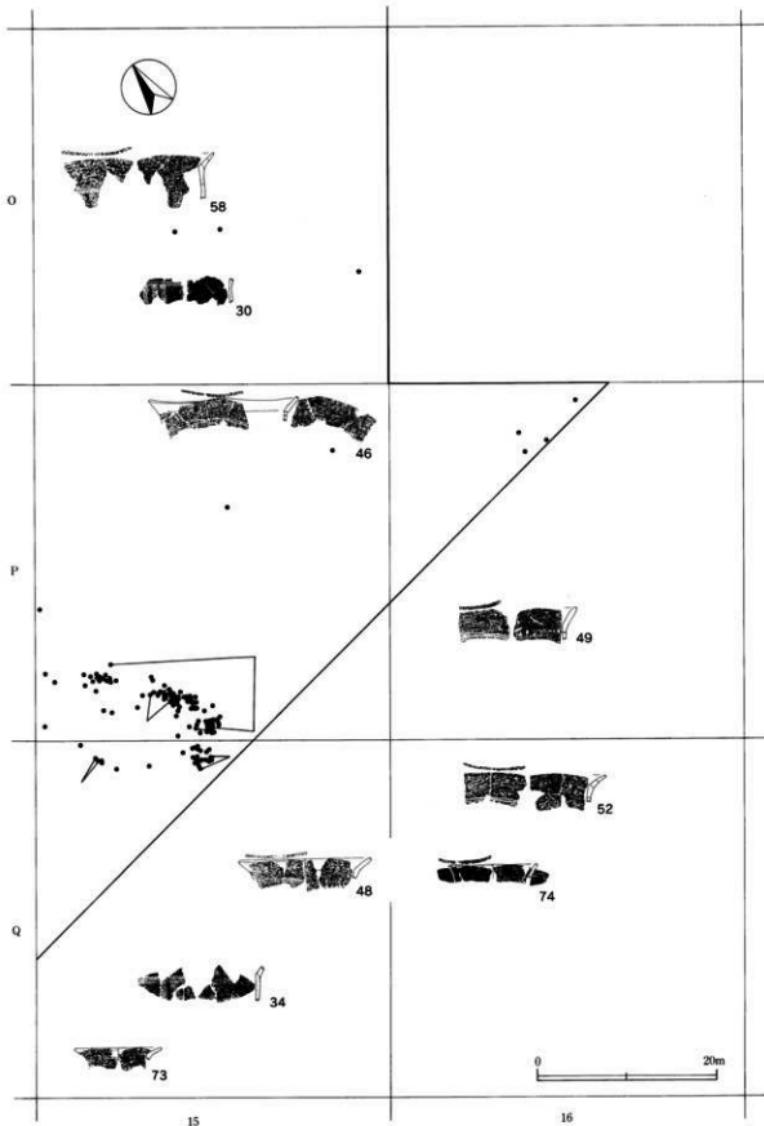
第28図 Q・R・S-11・12区出土 塞ノ神A式土器実測図



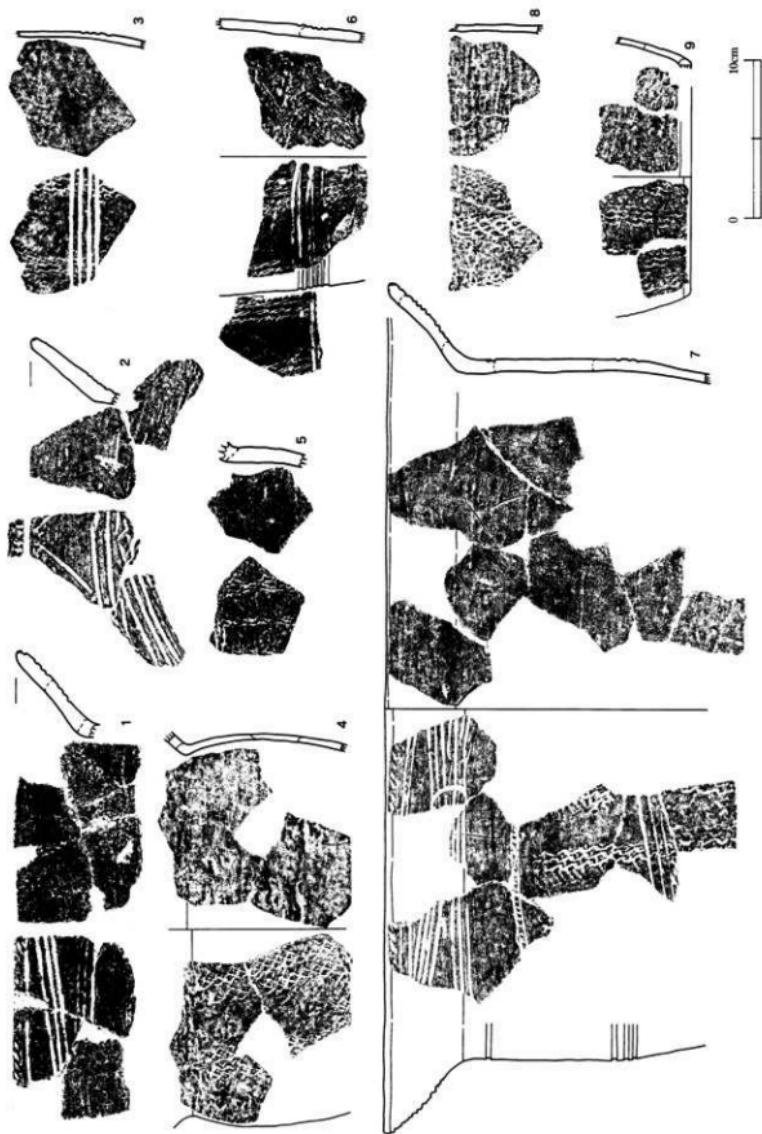
第29図 塞ノ神A式土器出土状況図5(P・Q・R-13・14区)



第30図 塞ノ神A-a式土器出土状況図6 (Q-14区)

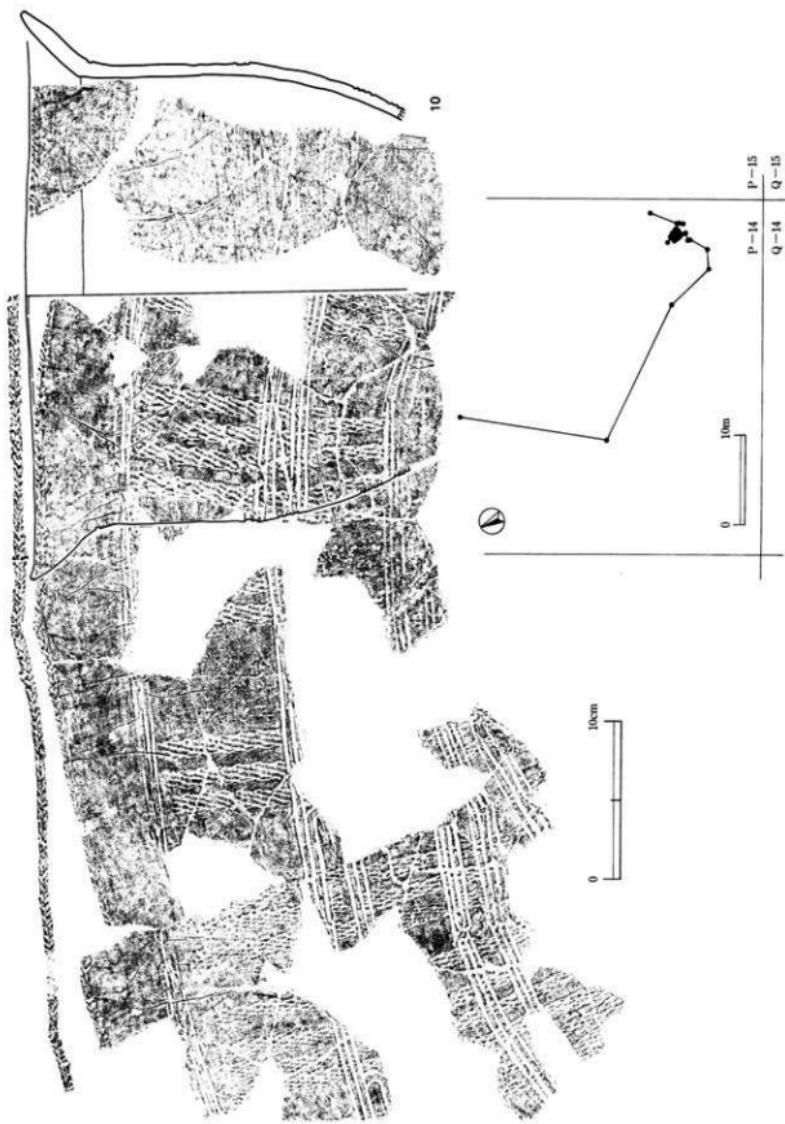


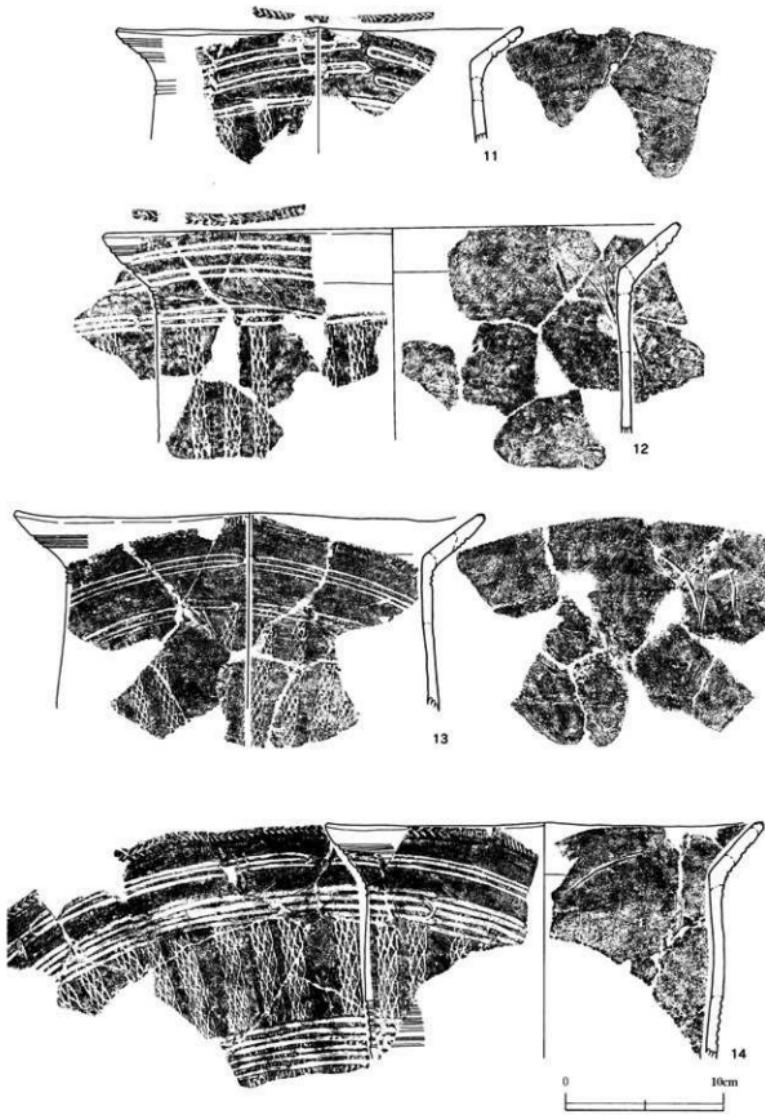
第31図 塞ノ神A式土器出土状況図7(O・P・Q-15・16区)



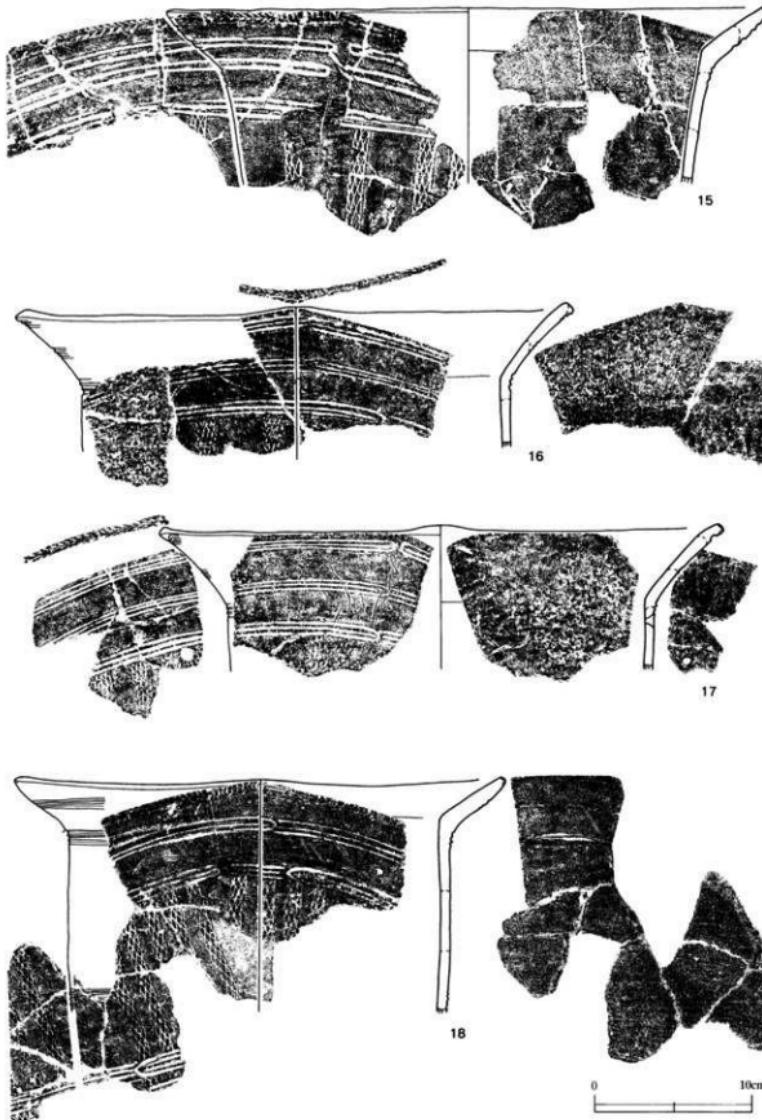
第32図 篠ノ神A-a式土器実測図1(1類-1)

第33図 窯ノ神A-a式土器実測図2(2類-1)

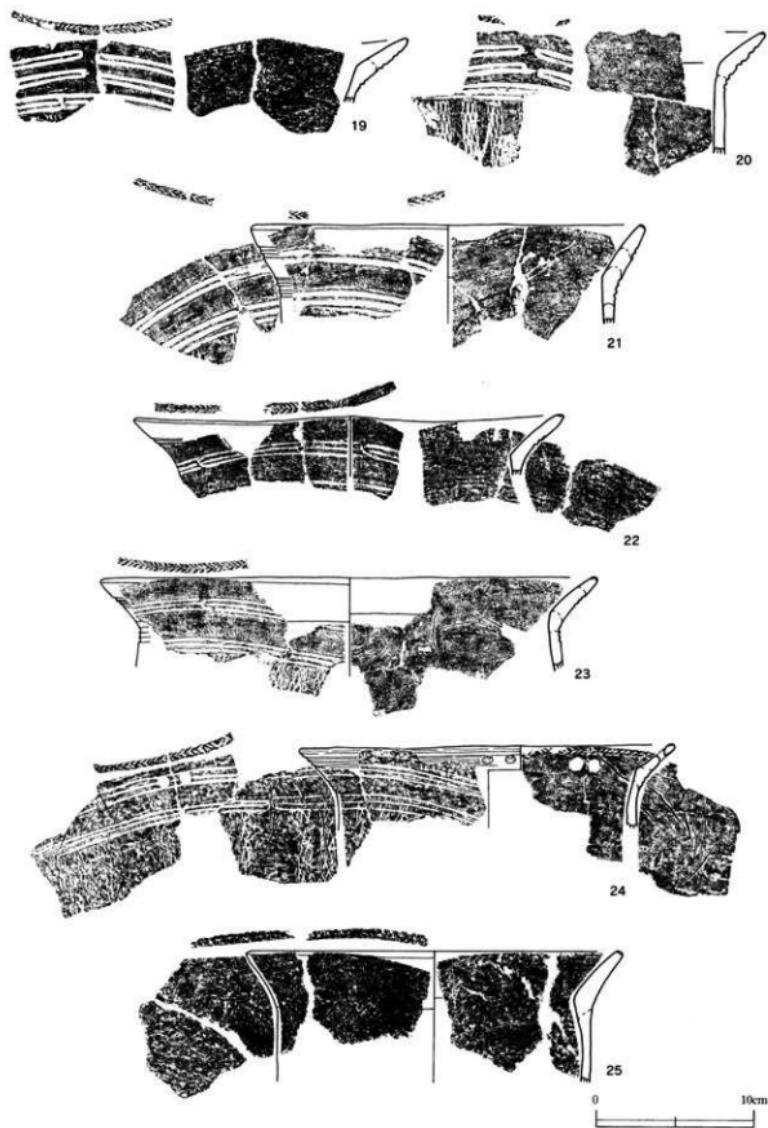




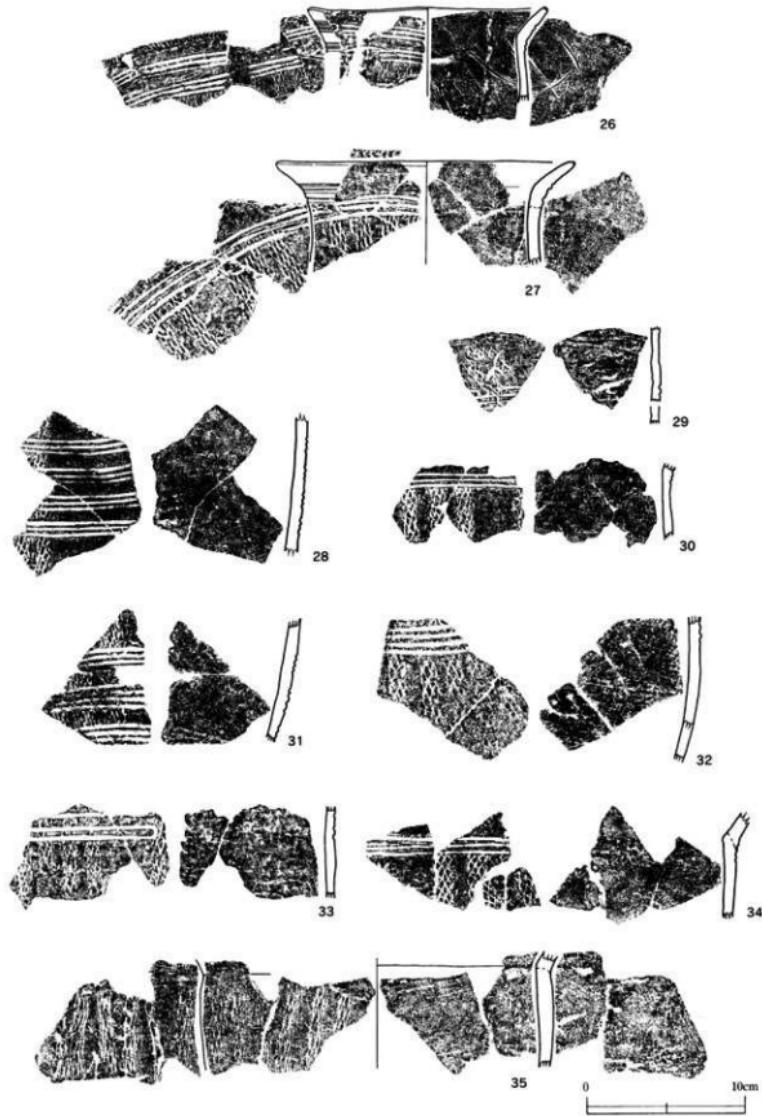
第34図 塞ノ神A a式土器実測図3(2類-2)



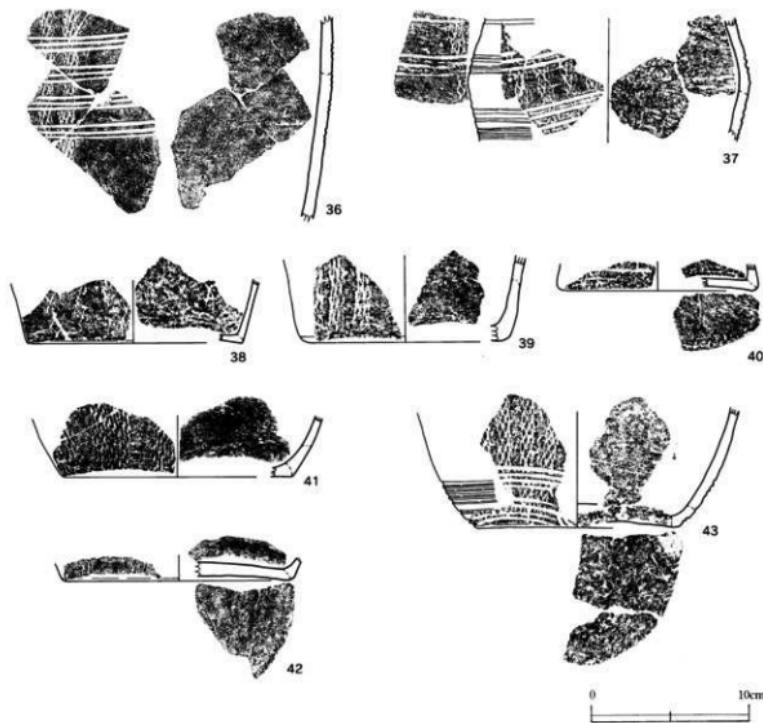
第35図 塞ノ神A a式土器実測図4(2類-3)



第36図 塞ノ神A式土器実測図5(2類-4)



第37図 塞ノ神A式土器実測図6(2類-5)



第38図 塞ノ神Aa式土器実測図7(2類-6)

(p.37から続く)

の後にナデ調整、あるいは丁寧なナデ調整を行うことが主流である。上器の色調は、外器面では茶褐色から暗茶褐色・暗褐色・黒褐色が、内器面では暗黄褐色から茶褐色が主流であった。

ii) 小結

本類が、河口直徳氏が設定された塞ノ神Aa式土器に該当する。特に、

- ①ラッパ状に開いた口縁部を形成する上器。
 - ②胴部には燃系文系の網目文を施文する上器。
- という2つの特徴を、第2群2類の指標とした。

②-3 第2群3類土器(第39図44~第41図58)

i) 概要

第2群3類に属する土器は、上器の大きさにより分類すると、胴部最大径が30cm前後の中型1類に属する土器(45・57)と、胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する土器(46・47・49)と、胴部最大径が20cm未満の中型3類に属する土器(44・48・56)という、3種類の大きさが異なる中型の深鉢形土器が出土している。

さて、器形的特徴としては、口縁形態がほぼ平口縁を呈する土器(44, 47~58)と、緩やかな波状口縁を呈する土器(45, 46)とが本類でも認められた。また、口縁部はラッパ状に強く開き、胴部は直線的

で円筒形を呈する。明瞭に本類に属する底部は出土していない。

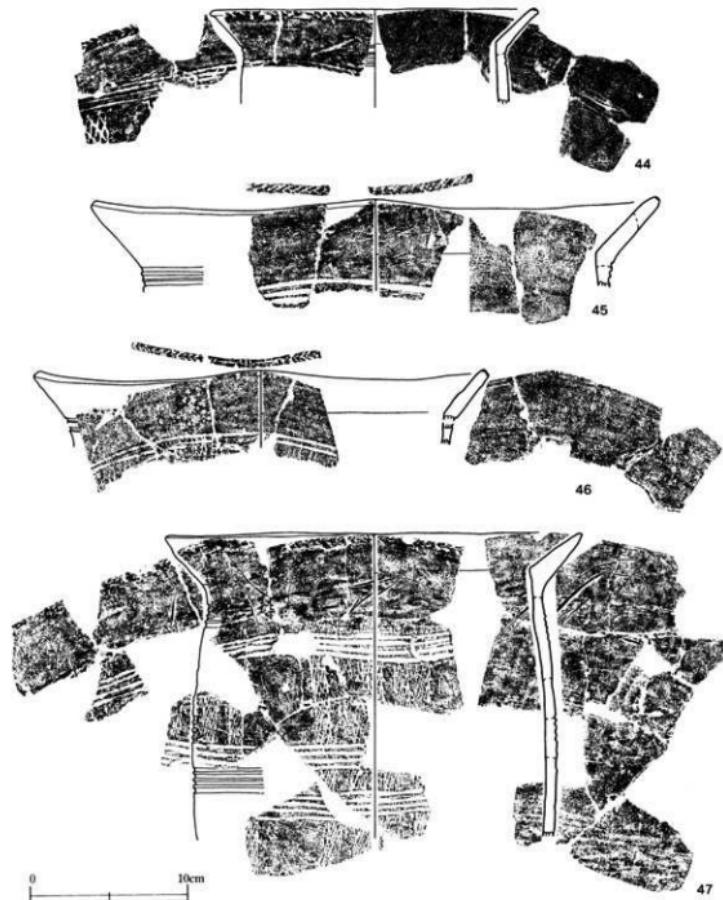
一方、施文的特徴としてはまずヘラ状工具を使い、口唇部に上面觀が羽状になる刻みを施す点を挙げることができる。口縁部には施文を行わない。

胸部には第2群2類土器と同様に、まず縱位方向

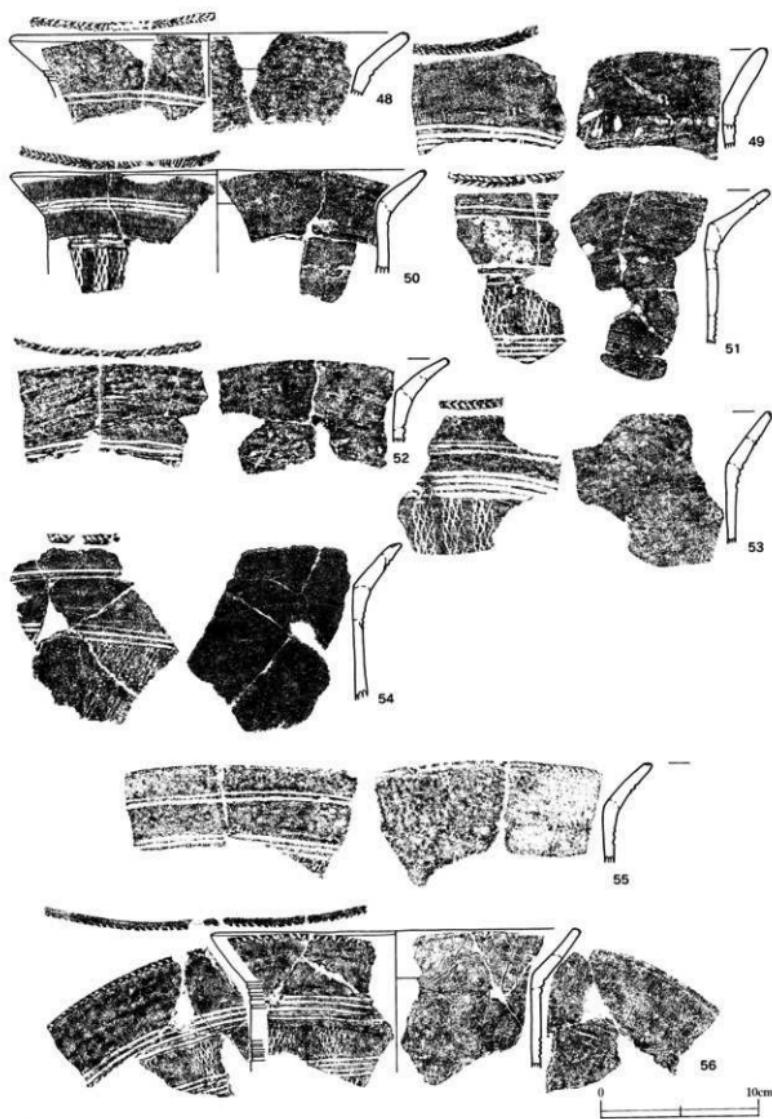
に主に3条を単位とした、網目捺糸文を施す。その後に、叉状工具あるいは棒状工具を使って、3条から5条の沈線文を1単位として、胸部中の数か所で横位方向に巡らしている。

さて、第2群3類に属する上器の脂土中鉱物は、

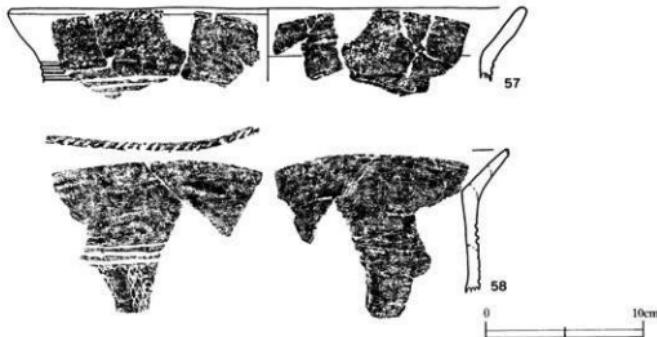
(p.56へ続く)



第39図 塞ノ神Aa式土器実測図8(3類-1)



第40図 塞ノ神A式土器実測図9(3類-2)



第41図 塞ノ神A a式土器実測図10(3類-3)

(p.54から続く)

石英・長石・角閃石で構成されていた。特にクロウンモの含有は認められなかつたのが注目できる。また上器の調整方法では、外器面がナデ調整を、内器面が丁寧なナデ調整あるいは木製工具によるヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は、外器面では茶褐色から暗茶褐色・暗褐色が、内器面では暗黄褐色から暗茶褐色が主流であった。

ii) 小結

第2群3類土器の型式的内容は、器形的特徴でも施文的特徴でも、第2群2類に属する土器と概ね同様である。

その中で2類と3類とに類を分けた指標として、

①内器面において、口縁部と胸部とを分ける稜線が2類土器より明瞭に形成される。

②口縁部外器面が無文になる。

という2点を挙げることができる。

①の指標は、塞ノ神式Aa土器の指標の1つである。2類土器では丸みをもち、明瞭であるとは言いつれなかった口縁部と胸部とを分ける稜線が、3類土器では明瞭な稜線が形成されるのである。

②-4 第2群4類土器(第42図59~第43図72)

i) 概要

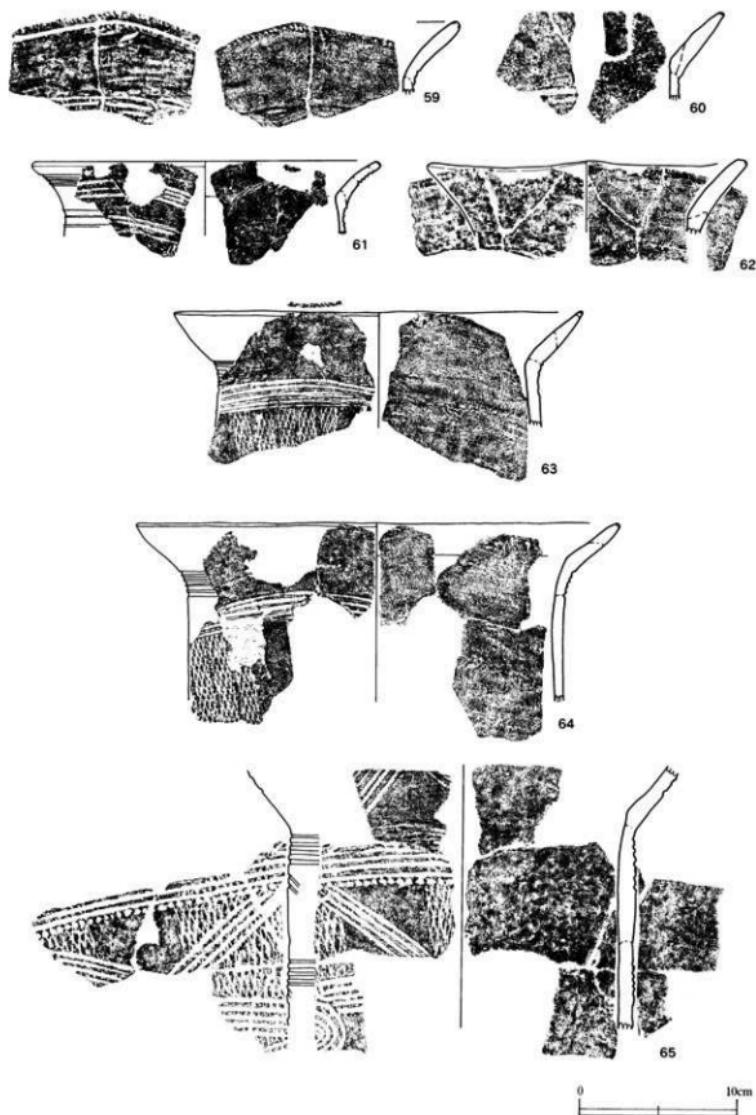
第2群4類に属する土器は、土器の大きさでは胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する土器(63・64・65)と、胴部最大径が20cm未満の中型3類に属する土器(61・62)という、2種類の中型深鉢形土器が出土していることが認められた。その一方で、胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器や胴部最大径が30cm前後の中型1類に属する土器は出土しなかつた。

器形的特徴としては、口縁形態がほぼ平口縁を呈する土器(59・61・63・64)と、緩やかな波状口縁を呈す土器(62)とが本類でも認められた。

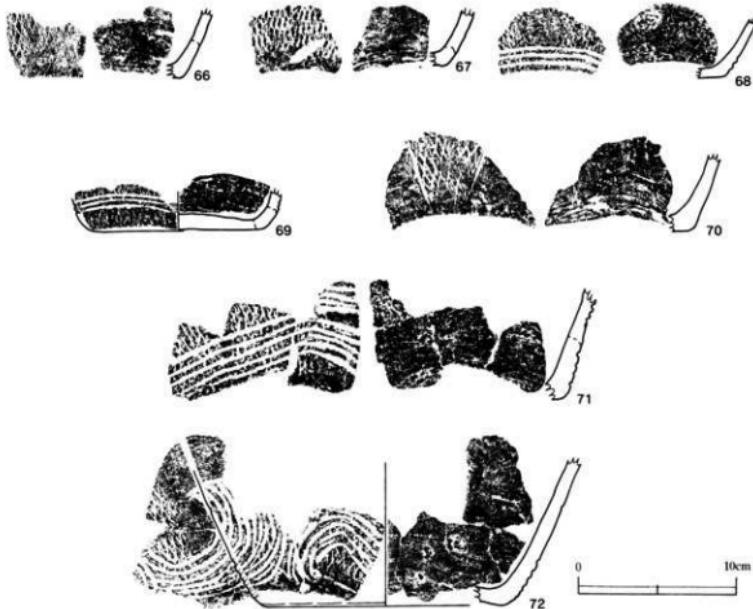
ところで大きさや口縁形態の違いに係わらず、第2群3類土器と同様に、口縁部は特に大きく聞く土器である。胸部形態は直線的に口縁部と底部とをつなぐ円筒形を呈する。底部はやや上げ底気味の底部に対して、胸部がやや外に開きながら立ち上がる土器である(第43図66~72)。

一方、第2群4類土器の施文的特徴は、次のとおりである。まず、口唇部にはヘラ状工具を使って上面観が羽状(64)もしくは斜位(63)の刻みを施す土器と、口唇部を無文にする土器(59~62)とがある。さらに口縁部外器面では、横位方向に数条の沈線文を

(p.58へ続く)



第42図 塞ノ神A式土器実測図11(4類-1)



第43図 塞ノ神Aa式土器実測図12(4類-2)

(p.56から続く)

巡らす土器(61)の他の土器は、無文の土器(59・60・62~64)であった。口縁部と胴部との境には、横位方向に5~6条の沈線文を巡らす。

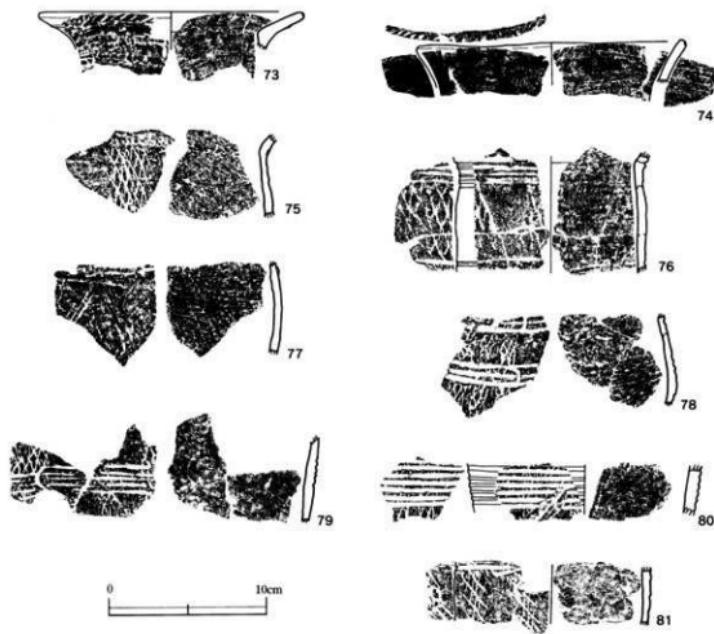
次に胴部文様であるが、第2群4類土器には2タイプの土器を範疇に入れた。

第1のタイプの土器は、網目撚糸文を縱位方向に施文するのは、2類土器や3類土器の特徴と同じであるが、2類土器や3類土器と比較して1条ごとの間隔が極端に狭くなり、さらに単位となる条数も3~5条に増え、単位となる施文幅が広いタイプの土器(63・64)である。現在の原体幅は、約2cmである。

第2のタイプの土器は、網目撚糸文を縱位方向に施文するが、1条ごとの間隔がなくなり、施文単位幅が極端に広くなるタイプの土器(65~72)である。

この施文方法で胴部下端まで施文をしている。撚糸文を施文後に、横位方向もしくは斜位方向に4条から5条の沈線文を施す。65のように沈線文を弧状に結んだり、72のように重弧文を施したりしているのも特徴の1つである。

さて、第2群4類に属する土器の胎土中埴物は、主に石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモが含有する土器は63・64の2点であった。また、土器の調整方法は、外器面はナデ調整、もしくはヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。内器面はヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整もしくはナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は、外器面では茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が主流であった。



第44図 塚ノ神Aa式土器実測図13(小型深鉢)

②-5 第2群小型深鉢形土器(第44図73~81)

i) 概要

第2群に属する小型深鉢形土器は、胴部最大径が15cm以下で、多くが12cm前後になる土器をいう。

第2群小型深鉢形土器の器形的特徴としては、口縁形態がほぼ平口縁を呈し、口縁部がラッパ状に開く(73・74)。胴部形態には僅かに丸みを帯びた円筒形を呈する(75~77)土器と、直線的に口縁部と底部とをつなぐ(79~81)土器がある。本群に属する底部は、上野原遺跡第10地点では出土が確認できていない。

一方、施文的特徴としては、ヘラ状工具を使って口唇部に刻みを施すことと、口縁部には文様を施さないことを挙げることができる。

そして胴部には、「網目撚糸文」を縱位方向に施す。撚りは1段左撚(R)の糸を、棒状工具に「左巻き

右巻き」で巻いた施文具を使用している。原体幅は現状で約2.5cmある。この原体幅は、中型深鉢形土器に施文する際に使用している、施文原体の長さとあまり変化がないことを示しており、注目できる。

撚糸文を施文後、横位方向に4条から5条の沈線文を、口縁部と胴部との境と、胴部中央部とにそれぞれ施す。

さて、第2群に属する小型深鉢形土器の胎土中鉱物は、石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウムモガ含有する土器が認められなかったことは注目できる。また、土器の調整方法は、外器面はナデ調整、もしくはハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。内器面はヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。土器の色調は、外器面では茶褐色・暗茶褐色・暗褐色が、内器面では暗茶褐色・暗黄褐色・暗褐色が主流であった。

塞ノ神A a式土器1類観察表

測定番号	標高	直寸	直徑	底	底幅	底径	地 率			外表面 調査	内部面 調査	色 満		備 考		
							石英	長石	角閃石	カロウモセ	白雲母	砂粒を含む	ナダ	外表面	内面面	
3	5 - 1.0	18990	818	M	深鉢	1周	○	○	○					赤褐色~暗赤褐色	暗赤褐色~深褐色	A式付着
	R - 0.8	2435	1000	M	深鉢	丁縫・腹縫	○	○	○	砂粒を含む	ミコハケ~ナダ			赤褐色~暗褐色	赤褐色	
	R - 0.8	2362	1000	M	深鉢	丁縫	○	○	○					赤褐色~暗褐色	赤褐色	
	R - 1.1	1350	1022	M	深鉢	丁縫	○	○	○	砂粒~細砂	ナダ			赤褐色~暗褐色	赤褐色~暗褐色	
	R - 1.4	1763	1018	M	深鉢	上縫丁縫~腹縫	○	○	○	砂粒~細砂	ミコハケ~ナダ			赤褐色~暗褐色	赤褐色~暗褐色	断面径2.1cm、A式付着
	R - 1.2	262	1040	M	深鉢	腹縫丁縫	○	○	○	砂粒を含む	ミコハケ~ナダ			赤褐色~暗褐色	赤褐色~暗褐色	
4	R - 1.2	327	1022	M	深鉢	腹縫丁縫	○	○	○	砂粒を含む	ミコハケ~ナダ			赤褐色~暗褐色	赤褐色~暗褐色	
	R - 1.2	1116	1022	M	深鉢	腹縫	○	○	○	砂粒を含む	ミコハケ~ナダ			赤褐色~暗褐色	赤褐色~暗褐色	
	S - 1.0	765	M													
	S - 1.0	996	M													
	S - 1.0	2982	820	M	深鉢	1周~腹縫	○	○	○							
	S - 1.0	4380	M													
5	S - 1.0	7082	M													
	S - 1.0	7402	M													
	T - 1.4	665	1021	M	深鉢	腹縫丁縫	○	○	○	砂粒~細砂	ナダ	ミコハケ~ナダ	赤褐色~暗褐色	赤褐色~暗褐色	1.15±0.2cm A式付着	
	T - 1.4	678	M													
	T - 0.9	254	848	M	深鉢	腹縫丁縫~孔縫	○	○	○	砂粒~細砂				赤褐色		
	T - 0.9	1676	M													

塞ノ神A a式土器2類観察表

測定番号	直寸	底寸	底形	底幅	底径	地 率			外表面 調査	内部面 調査	色 満		備 考		
						石英	長石	角閃石	カロウモセ	白雲母	砂粒を含む	ナダ	外表面	内面面	
7	P - 1.4	8	1052	M											
	P - 1.4	26	1052	M											
	P - 1.4	380	1052	M											
	P - 1.4	1080	1052	M											
	P - 1.4	1052	1052	M											
	P - 1.4	1129	1052	M											
8	P - 1.4	1122	1052	M											
	P - 1.4	1081	1052	M											
	P - 1.4	5882	1052	M											
	P - 1.4	5880	1052	M											
	P - 1.4	1612	1052	M											
	P - 1.4	1617	1052	M											
9	P - 1.4	1618	1052	M											
	P - 1.4	1620	1052	M											
	P - 1.4	1621	1052	M											
	P - 1.4	1622	1052	M											
	P - 1.4	1624	1052	M											
	P - 1.4	1625	1052	M											
10	P - 1.4	1626	1052	M											
	P - 1.4	1627	1052	M											
	P - 1.4	1628	1052	M											
	P - 1.4	1629	1052	M											
	P - 1.4	1631	1052	M											
	P - 1.4	1632	1052	M											
11	P - 1.4	1644	1052	M											
	P - 1.4	1646	1052	M											
	P - 1.4	1650	1052	M											
	P - 1.4	1651	1052	M											
	P - 1.4	1657	1052	M											
	P - 1.4	1658	1052	M											
12	P - 1.4	1677	1052	M											
	P - 1.4	1726	1052	M											
	P - 1.4	1741	1052	M											
	R - 1.0	12534	M												
	R - 1.0	12622	M												
	R - 1.0	12634	856	底鉢	1周~腹縫	○	○	○		砂粒を含む	ナダ	丁寧なナダ	暗褐色~暗黄褐色	暗褐色~黒褐色	薄やかな底状1層 1.15±0.6cm、A式付着
13	Q - 1.4	26	M												
	Q - 1.4	1696	M												
	Q - 1.4	1697	845-1	底鉢	1周~腹縫	○	○	○	○	砂粒を含む	ナダ	ミコハケ~ナダ	暗褐色~暗黄褐色	暗褐色~暗褐色	1.15±0.2cm
	R - 1.1	572	M												
	R - 1.1	1414	M												
	R - 1.1	1789	845-2	底鉢	1周~腹縫	○	○	○	○	砂粒~細砂	ナダ	丁寧なナダ	暗褐色~暗褐色	暗褐色~暗褐色	薄やかな底状1層 1.15±0.6cm
14	Q - 1.1	10609	M												
	Q - 1.1	10610	M												
	Q - 1.1	10614	842	底鉢	1周~腹縫	○	○	○		砂粒~細砂	ナダ	右下がりナダ~ナダ	暗褐色~暗黄褐色	暗褐色~暗褐色	薄やかな底状1層 1.15±0.6cm
	Q - 1.1	10651	M												
	Q - 1.1	10662	M												
	Q - 1.1	10667	M												

塞ノ神 A 式土器 2 類観察表

器種 番号	種別 区分	器形 番号	大きさ 単位	形状	底紋	部 分	外表面 調査	内部面 調査	色調		備考	
							外色	内色	地質石	クロウン	砂粒	
Ⅰ	Q	Q-1-4	68	842	W							
		Q-1-4	72	W								
		Q-1-4	683	W								
		Q-1-4	958	W								
		Q-1-4	969	W								
		Q-1-4	1364	W								
		Q-1-4	1662	W								
		Q-1-4	1673	W								
Ⅱ	S	S-1-0	1253	K22	W	深鉢	口縁～側面	○ ○ ○	褐色～黒	褐色～黒	褐色～黒	縫やかな底状(1段)、 スヌ付有り 11月24.4cm
		S-1-0	5659	W								
		S-1-0	5720	K17	W	深鉢	口縁～側面	○ ○ ○	褐色～黒	褐色～黒	褐色～黒	縫やかな底状(1段) スヌ付有り 11月24.4cm
Ⅲ	R	R-1-1	243	V								
		R-1-1	580	V								
Ⅳ	R	R-1-1	723	K26	V	深鉢	口縁～側面	○ ○ ○	褐色～黒	褐色～黒	褐色～黒	縫やかな底状(1段) スヌ付有り 11月21.0cm
		R-1-1	742	V								
Ⅴ	R	R-1-1	1125	V								
		R-1-1	1131	V								
Ⅵ	Q	Q-1-2	6496	M	深鉢	口縁～側面上端	○ ○ ○	○	褐色～黒	褐色～黒	褐色～黒	縫やかな底状(1段)
		Q-1-2	6657	M								
		Q-1-2	6760	M								
Ⅶ	Q	Q-1-2	6356	K27	W	深鉢	口縁～側面	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	丁寧なナダ	褐色～黒
		Q-1-2	6689	M								
Ⅷ	Q	Q-1-4	367	W								
		Q-1-4	1892	K21	W	深鉢	口縁～側面	○ ○ ○	褐色～黒	褐色～黒	褐色～黒	11月21.4cm スヌ付有り
Ⅸ	Q	Q-1-1	1689	V								
		Q-1-1	2271	K29	V	深鉢	口縁～側面上端	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	丁寧なナダ	褐色～黒
Ⅹ	Q	Q-1-1	2483	V								
		Q-1-1	2487	V								
Ⅺ	Q	Q-1-1	2495	V								
		Q-1-1	2524	V								
Ⅻ	Q	Q-1-1	2525	V								
		Q-1-1	2526	V								
Ⅼ	Q	Q-1-1	2548	V								
		Q-1-1	2568	V								
Ⅽ	R	R-1-1	823	V								
		R-1-1	1121	V								
Ⅾ	R	R-1-1	1624	V								
		R-1-1	1625	V								
Ⅿ	S	S-0-9	348	V								
		S-0-9	2386	K44	V	深鉢	口縁～側面	○ ○ ○	褐色～黒	褐色～黒	褐色～黒	縫物花あり
ⅰ	S	S-0-9	2426	V								
		S-0-9	2428	V								
ⅱ	S	S-0-9	2525	V								
		S-0-9	2526	V								
ⅲ	R	R-1-1	893	K22	V	深鉢	口縁～側面	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ナダ	褐色～黒
		R-1-1	904	V								
ⅳ	R	R-1-0	4955	V								
		R-1-0	5613	K29	V	小形深鉢	口縁～側面	○ ○ ○	褐色～黒	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
ⅴ	R	R-1-0	5649	V								
		R-1-0	5650	V								
ⅵ	R	R-1-0	5651	V								
		R-1-0	5652	V								
ⅶ	Q	Q-1-1	826	V								
		Q-1-1	8336	V								
ⅷ	Q	Q-1-1	841	V								
		Q-1-1	1065	V								
ⅸ	Q	Q-1-1	1471	V								
		Q-1-1	1540	V								
ⅹ	Q	Q-1-0	993	V								
		Q-1-0	999	V								
Ⅺ	P	P-1-5	589	V								
		P-1-5	590	V								
Ⅻ	Q	Q-1-2	943	V								
		Q-1-2	1086	V								
Ⅼ	Q	Q-1-0	5748	V								
		Q-1-0	5749	V								
Ⅽ	Q	Q-1-5	144	V								
		Q-1-5	185	V								
Ⅾ	Q	Q-1-5	186	V								
		Q-1-5	187	V								
Ⅿ	Q	Q-1-4	1680	V								
		Q-1-4	1771	V								
ⅰ	R	R-1-1	1533	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	お上がりハナ～ナダ	褐色～黒
		R-1-1	1653	V								
ⅱ	R	R-1-1	1669	V								
		R-1-1	1670	V								
ⅲ	R	R-1-0	1723	K19	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1726	V								
ⅳ	R	R-1-0	1748	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1749	V								
ⅴ	R	R-1-0	1751	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1752	V								
ⅵ	R	R-1-0	1753	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1754	V								
ⅶ	R	R-1-0	1755	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1756	V								
ⅷ	R	R-1-0	1757	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1758	V								
ⅸ	R	R-1-0	1759	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1760	V								
ⅹ	R	R-1-0	1761	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1762	V								
Ⅺ	R	R-1-0	1763	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1764	V								
Ⅻ	R	R-1-0	1765	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1766	V								
Ⅼ	R	R-1-0	1767	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1768	V								
ⅷ	R	R-1-0	1769	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1770	V								
ⅸ	R	R-1-0	1771	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1772	V								
ⅹ	R	R-1-0	1773	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1774	V								
Ⅺ	R	R-1-0	1775	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1776	V								
Ⅻ	R	R-1-0	1777	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1778	V								
Ⅼ	R	R-1-0	1779	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1780	V								
ⅷ	R	R-1-0	1781	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1782	V								
ⅸ	R	R-1-0	1783	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1784	V								
ⅹ	R	R-1-0	1785	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1786	V								
Ⅺ	R	R-1-0	1787	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1788	V								
Ⅻ	R	R-1-0	1789	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1790	V								
Ⅼ	R	R-1-0	1791	K17	V	深鉢	制版	○ ○ ○	砂粒を含む	ナダ	ヨコハケ～ナダ	褐色～黒
		R-1-0	1792	V								
ⅷ	R	R-1-0	1793	K17	V	深鉢	制版</					

塞ノ神A a式土器 3類觀察表

樹種 学名 番号	山名 区 番号	高さ m	葉形 葉色	花期 花色	地 土			外観 調査	内観 調査	色 調	備 考
					粒状	粒状	石英 長石 角閃石 カリウムモ	砂粒			
常 緑 樹	Q-1-2	2269	V1								
	Q-1-3	4608	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ヨコハケ+ナデ	ヨコハケ+ナデ
	Q-1-3	4514	V1								
常 緑 樹	R-1-1	267	V1								
	R-1-1	449	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ+ナデ
	R-1-1	551	V1								
被 葉 樹	P-1-5	738	V1								
	P-1-5	1647	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	P-1-5	1660	V1								
	P-1-5	1666	V1								
	P-1-5	1677	V1								
被 葉 樹	Q-1-4	198	V1								
	Q-1-4	210	V1								
	Q-1-4	229	V1								
	Q-1-4	475	V1								
	Q-1-4	679	V1								
	Q-1-4	875	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1064	V1								
	Q-1-4	1248	V1								
	Q-1-4	1583	V1								
	Q-1-4	1584	V1								
	Q-1-4	1598	V1								
	Q-1-4	2285	V1								
被 葉 樹	P-1-5	233	V1								
	P-1-5	227	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	P-1-5	699	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ヨコハケ+ナデ	ヨコハケ+ナデ
	P-1-5	1085	V1								
被 葉 樹	R-1-5	254	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	細胞-微粉	ヨコハケ+ナデ	ヨコハケ+ナデ
	R-1-1	2369	V1								
	R-1-1	2380	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	R-1-1	2480	V1								
被 葉 樹	S2	14-262	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1464	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	丁寧なナデ	赤褐色-真葉褐色
	Q-1-4	1465	V1								
被 葉 樹	S2	14-263	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1468	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1469	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1470	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
被 葉 樹	S2	14-264	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1471	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1472	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1473	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1474	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
被 葉 樹	S2	14-265	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1475	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1476	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1477	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1478	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
被 葉 樹	S2	14-266	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1479	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1480	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1481	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1482	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
被 葉 樹	S2	14-267	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1483	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1484	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1485	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1486	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
被 葉 樹	S2	14-268	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1487	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1488	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1489	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1490	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
被 葉 樹	S2	14-269	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1491	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1492	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1493	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1494	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
被 葉 樹	S2	14-270	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1495	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1496	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1497	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1498	V1	落葉	口輪-側扁	○	○	○	細胞-微粉	ナデ	ナデ
被 葉 樹	S2	14-271	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1499	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1500	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1501	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1502	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
被 葉 樹	S2	14-272	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1503	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1504	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1505	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1506	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
被 葉 樹	S2	14-273	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1507	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1508	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1509	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1510	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
被 葉 樹	S2	14-274	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1511	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1512	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1513	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1514	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
被 葉 樹	S2	14-275	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1515	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1516	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1517	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ
	Q-1-4	1518	V1	落葉	口輪-側扁上端	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ

寒ノ神A-a式土器A類觀察表

塞ノ神 A a 式土器 4 類觀察表

塞ノ神A a式土器・小型深鉢觀察表

規格番号	規格名	外寸	内寸	形状	取扱	種類	壁上		取付部	内側面	外側面	色	寸法	
							高さ	幅						
72	Q-1.5	16	1800	切	小折返	横一列	○	○	横幅・横幅	ヨコヨコハーフナット	ヨコヨコナット	銀色面・青色面	青色面・銀色面	11mm(6.5mm)
	Q-1.5	17	1800	切	小折返	横一列	○	○	横幅・横幅	ヨコヨコハーフナット	ヨコヨコナット	銀色面・青色面	青色面・銀色面	11mm(6.5mm)
	74	P-1.9	4800	切	鉛直	二列	○	○	横幅・横幅	ヨコヨコハーフナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
76	P-1.9	4800	切	鉛直	二列	○	○	横幅・横幅	ヨコヨコハーフナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ	
	P-1.9	4800	切	鉛直	断面	横一列	○	○	横幅・横幅	ヨコヨコハーフナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
	P-1.9	4800	切	鉛直	断面	横一列	○	○	横幅・横幅	ヨコヨコハーフナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
77	R-2.3	1300	2000	切	鉛直	断面	横一列	○	横幅・横幅	ヨコヨコハーフナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
	R-2.3	1300	2000	切	鉛直	断面	横一列	○	横幅・横幅	ヨコヨコハーフナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
	R-2.3	1300	2000	切	鉛直	断面	横一列	○	横幅・横幅	ヨコヨコハーフナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
78	S-9.0	1000	1800	切	鉛直	断面	横一列	○	横幅・横幅	ナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
	S-9.0	1000	1800	切	鉛直	断面	横一列	○	横幅・横幅	ナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
	S-9.0	1000	1800	切	鉛直	断面	横一列	○	横幅・横幅	ナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
79	Q-0.9	4800	1000	切	小折返	横一列	○	○	横幅・横幅	ナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
	Q-0.9	4800	1000	切	小折返	横一列	○	○	横幅・横幅	ナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
	Q-0.9	4800	1000	切	小折返	横一列	○	○	横幅・横幅	ナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
80	Q-1.4	1400	1800	切	小折返	横一列	○	○	横幅・横幅	ナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
	Q-1.4	1400	1800	切	小折返	横一列	○	○	横幅・横幅	ナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
	Q-1.4	1400	1800	切	小折返	横一列	○	○	横幅・横幅	ナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
82	Q-1.4	500	1800	切	小折返	横一列	○	○	横幅・横幅	ナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
	Q-1.4	500	1800	切	小折返	横一列	○	○	横幅・横幅	ナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ
	Q-1.4	500	1800	切	小折返	横一列	○	○	横幅・横幅	ナット	ヨコヨコナット	銀色面	銀色面	11mm(6.5mm) A3仕上げ

③ 第3群 塞ノ神A b式土器

i) 概要

第3群に属する土器は、149点の土器片が出土し、その内の61点、12個体を資料化した。

第3群は、器形的特徴について「やや張りのある円筒形の胴部に、ラッパ状に開いた口縁部がつき、胴部の張りが僅かに勝り、口縁部は平坦である。底部は上げ底氣味の平底を呈する」土器とした。さらに施文的特徴としては、「幾何学的な籠井文を描き、その衿内を網目撚糸文で満たし」た施文をすると定義されている。河口直徳氏により設定された土器型式である。

ではまず最初に、上野原遺跡第10地点において、第3群に属する土器がどの地点から主に出土しているか、その状況を検討してみよう（第45図～第49図参照）。なお、図中のドットは実測図が未掲載である土器も1ドット1点で示している。

出土状況全体図を検討して指摘できることは、特に集中して出土している区域がなく、点々と出土地点が点在していることである。しかも、出土地点間では接合関係もないことから、第3群に属する土器は極めて単発的な出土であったと言える。

さて、上野原遺跡第10地点で出土した第2群に属する土器を分析していくことにする。

第3群に属する土器は、土器の大きさで分類すると、胴部最大径が20cm以上の大型2類に属する土器（3・12）と、胴部最大径が20cm未満の中型3類に属する土器（1・4・5）という、2種類の大きさが異なる中型の深鉢形土器が出土していることが認められた。その一方で、胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器や胴部最大径が30cm前後の中型1類に属する土器は出土しなかった。

器形的特徴としては、口縁形態がほぼ平口縁を呈する土器（1・4・5）と、緩やかな波状口縁を呈す土器（3）とが本類でも認められた。

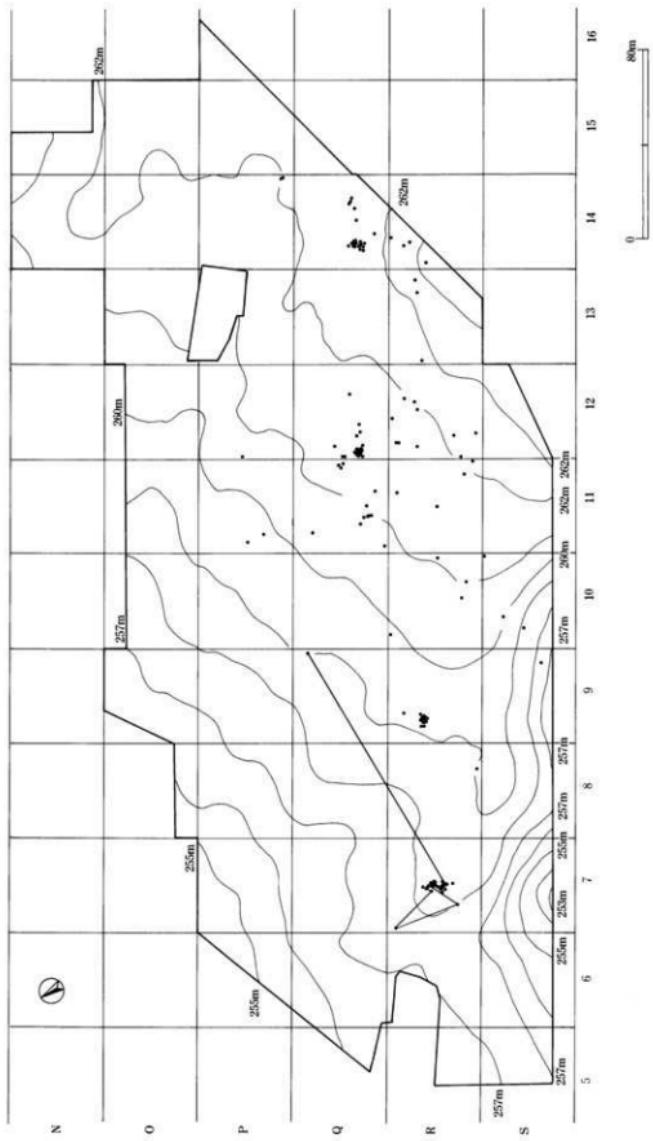
ところで大きさや口縁形態の違いに係わらず、第2群3類土器や4類土器と同様に、口縁部はラッパ状に強く聞く土器である。胴部形態は直線的ないしはわずかな丸みを持って口縁部と底部とをつなぐ円筒形を呈する。底部は未出土であるが、胴部下端が

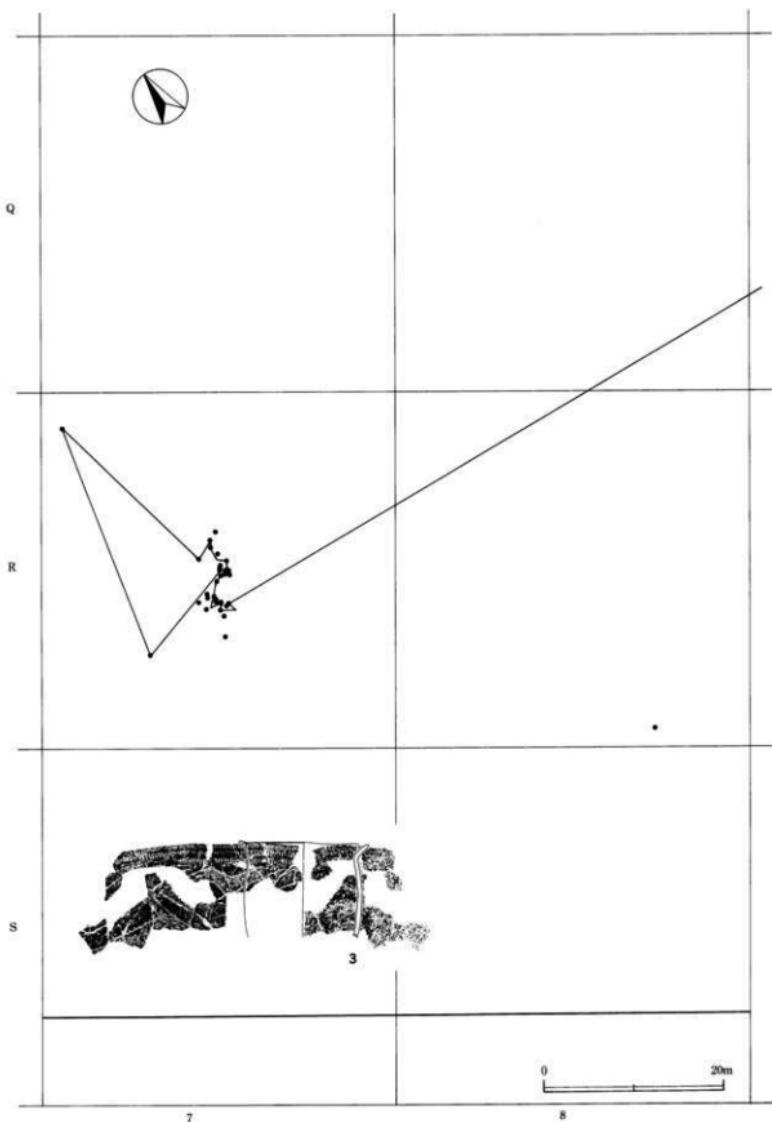
らやや外反し丸味ちながら立ち上がる土器である（第52図6～12）。

一方、第3群の施文的特徴としては、まず口唇部刻みが消失すること、口縁部には棒状工具を使った沈線文と刺突連点文とで文様が構成されること、胴部には棒状工具を使って幾何学的な籠井文を描き、その衿内を網目撚糸文で満たしていることが挙げられる。網目撚糸文の燃りの方向は、1段左燃（R）である。

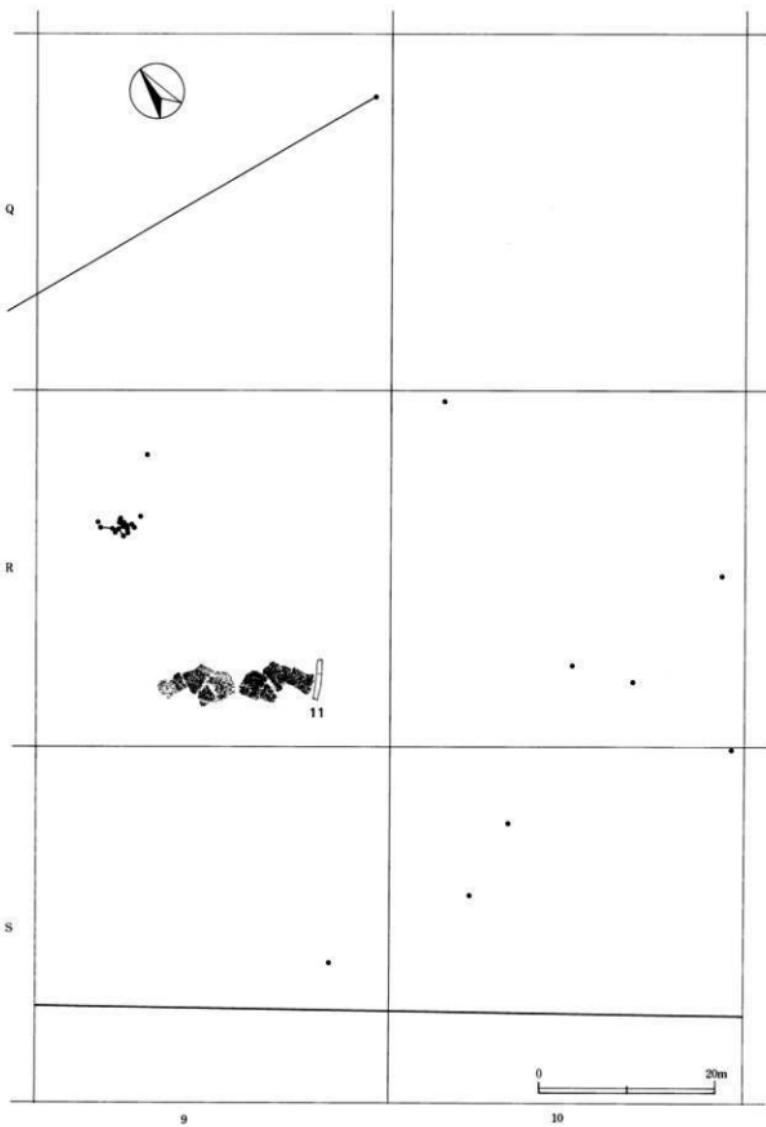
さて、第3群に属する土器の胎土中鉱物は、多くの土器が石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウモの含有は認められたのは、3・5・10の土器であった。また土器の調整方法では、外器面がナテ調整あるいはハケ目調整の後にナテ調整を、内器面が木製工具によるヨコ方向のハケ目調整の後にナテ調整を行うことが主流である。土器の色調は、外器面では茶褐色から暗黄褐色・暗褐色が、内器面では暗茶褐色から暗黄褐色・暗褐色が主流であった。

第45図 塚ノ神A b式土器出土状況全体図

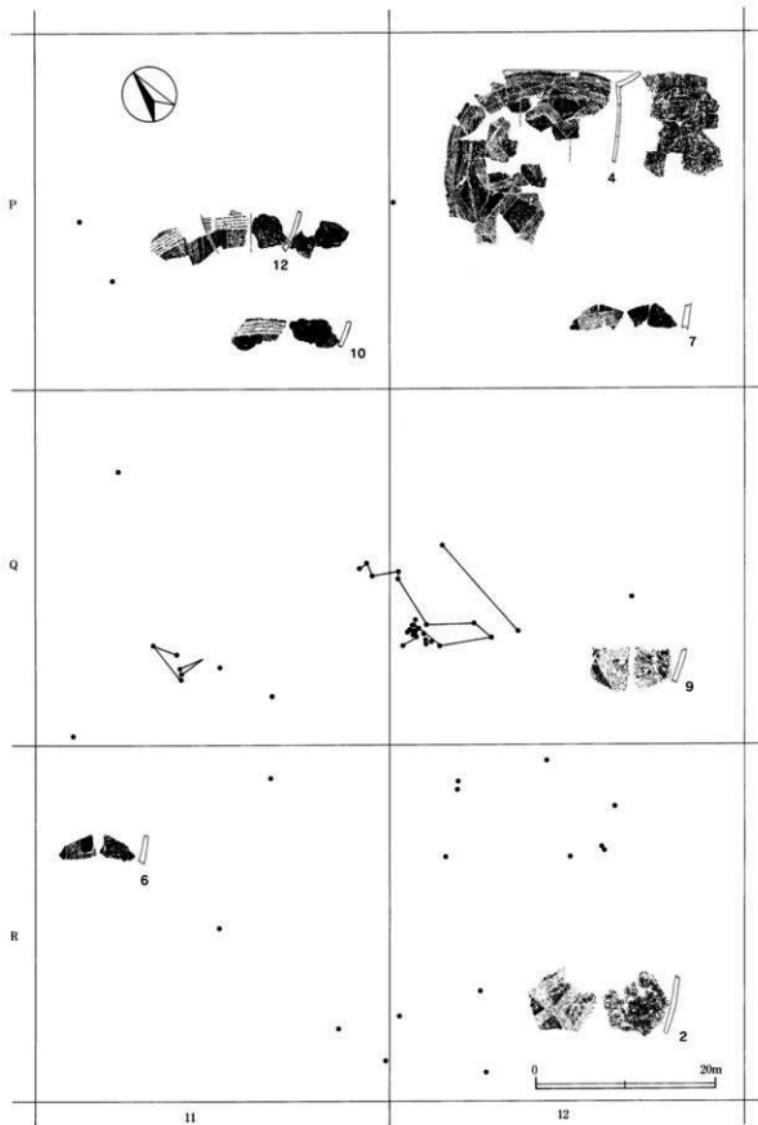




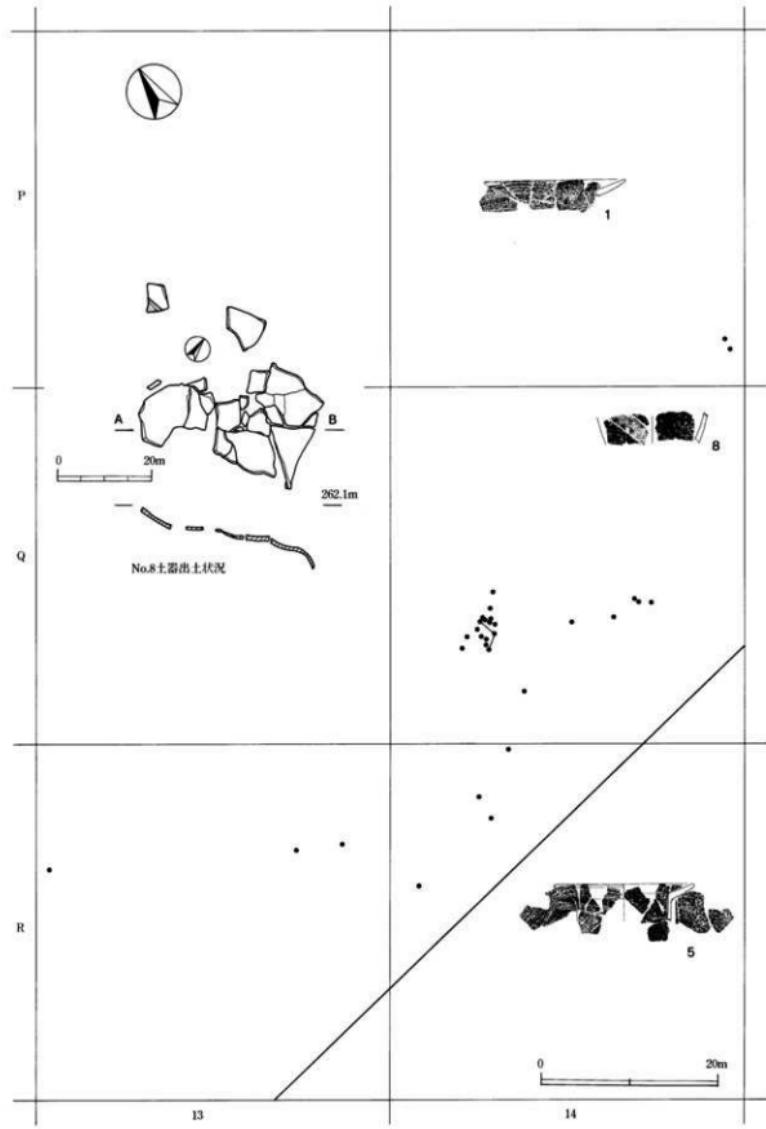
第46図 塞ノ神A b式土器出土状況図1 (Q・R・S - 7・8区)



第47図 塞ノ神A b式土器出土状況図2 (Q・R・S - 9・10[K])

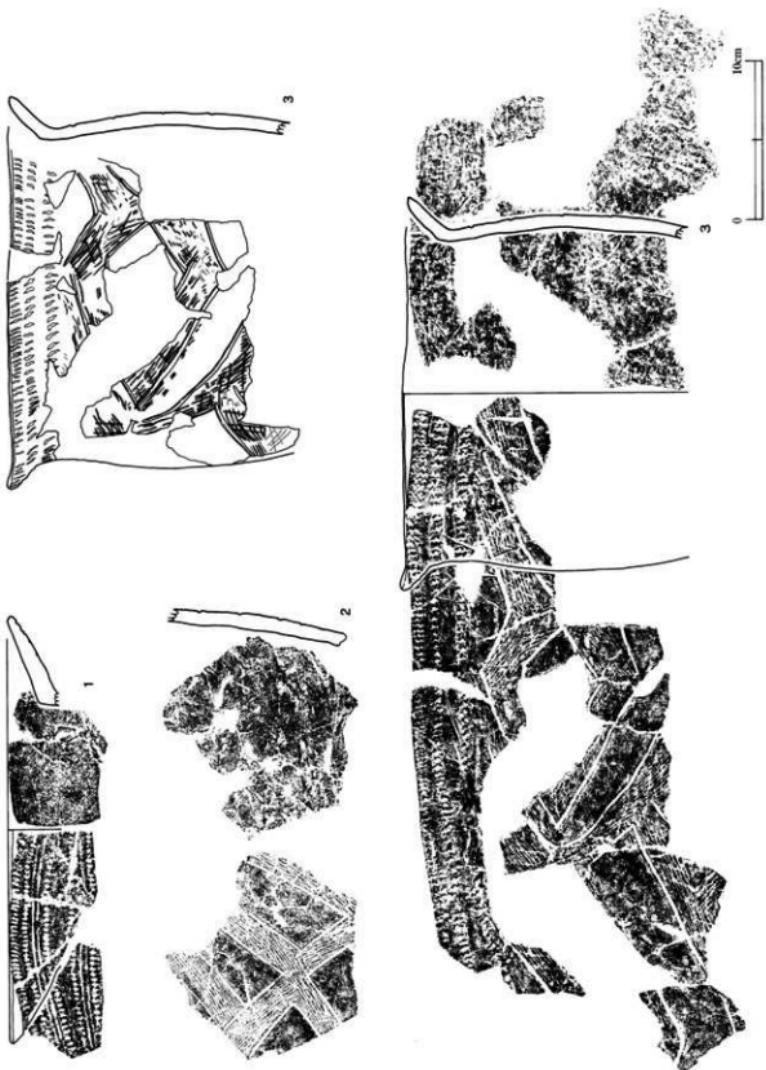


第48図 塞ノ神A b式土器出土状況図3(P・Q・R-11・12区)

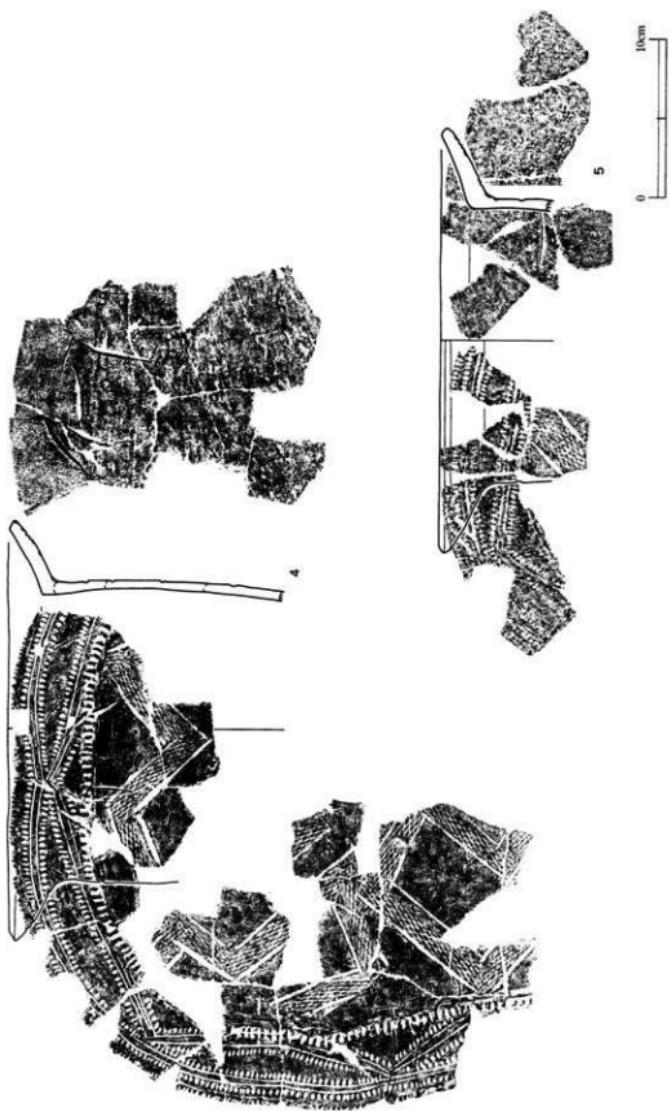


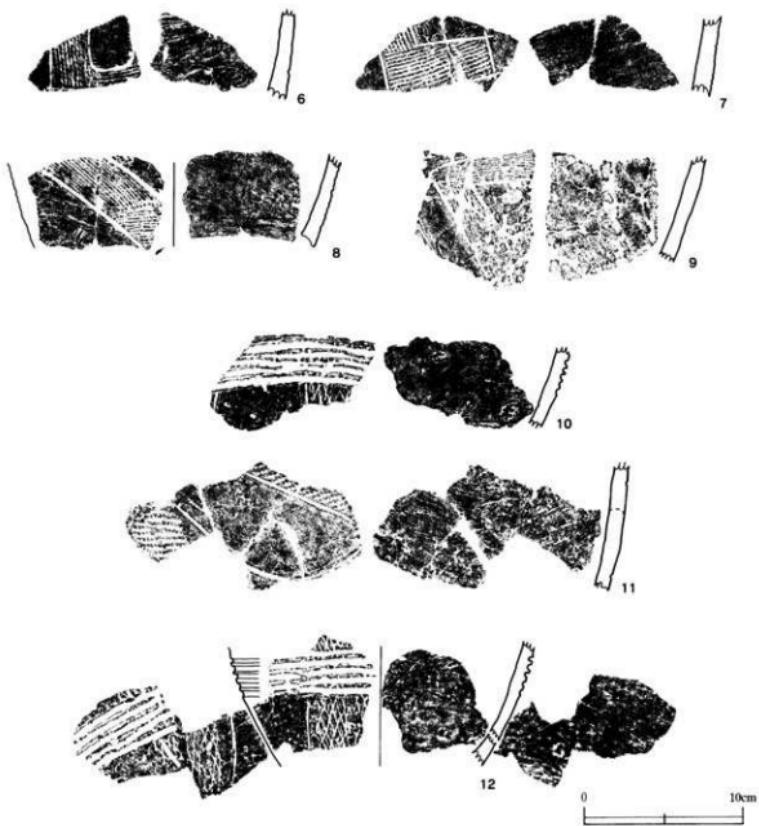
第49図 塞ノ神A b式土器出土状況図4 (P・Q・R - 13・14区)

第50図 磐ノ神A b式土器実測図 1



第51図 磁ノ神A b式土器実測図2





第52図 塞ノ神A b式土器実測図3

塞ノ神A b式土器觀察表

塞ノ神A b式土器觀察表

辨別 番号	報告 番号	出土 区	注記	実測図 番号	層 番号	形種	部位	胎 土				外器面 調整	内器面 調整	色 調		備 考
								右肩	左肩	角閃石	クロウンモ			外器面	内器面	
I	R-0.8	1859		VII												
	R-0.9	846		VII												
	R-0.9	1458		VII	深鉢	口縁-側面	○	○	○							
	R-0.9	1460		VII												
	R-0.9	1479		VII												
	R-0.9	1489		VII												
II	R-0.9	14		VII												
	R-0.9	1300		VII												
	R-0.9	1457		VII												
	R-0.9	1459		VII												
	R-0.9	1471		VII												
	R-0.9	1472		VII												
III	R-0.9	1473	820	VII	深鉢	口縁-側面	○	○	○							
	R-0.9	1490		VII												
	R-0.9	1492		VII												
	R-0.9	1494		VII												
	R-0.9	1721		VII												
	R-0.9	1722		VII												
IV	R-0.9	1723		VII												
	R-0.9	1763		VII												

④ 第4群 塞ノ神B c式土器

i) 概要

第4群に属する土器は、22点の土器片が出土し、その内の全点、2個体を資料化した。

第4群は、器形的特徴について「器形は塞ノ神A b式に類似し、胴部の張りが強く、口縁部はラッパ状に外反する器形で、底部が僅かに上げ底気味」な土器とした。さらに施文的特徴として「貝殻によつて施文するのが特徴で、口唇部に刻み目、口縁部、頸部に刺突連点文を施す。胴部は波状あるいは横位に、箇による区画（枠）を設け、繩文の代わりに貝殻条痕によって区画内を満たした」した文様構成の特徴からと定義されている。河口貞徳氏により設定された土器である。

ではまず最初に、上野原遺跡第10地点において、第3群に属する土器がどの地点から主に出土しているか、その状況を検討してみよう（第53・54図参照）。

なお、図中のドットは実測図が未掲載である土器も1ドット1点で示している。

出土状況全体図を検討して指摘できることは、第3群に属する土器は全出土点数も22点と少ないと、またその全点が2個体に復元できたこと、そして出土した区域もR-8・9区に限定されていること、以上のことから第4群は極めて単発的な出土であったことが言える。

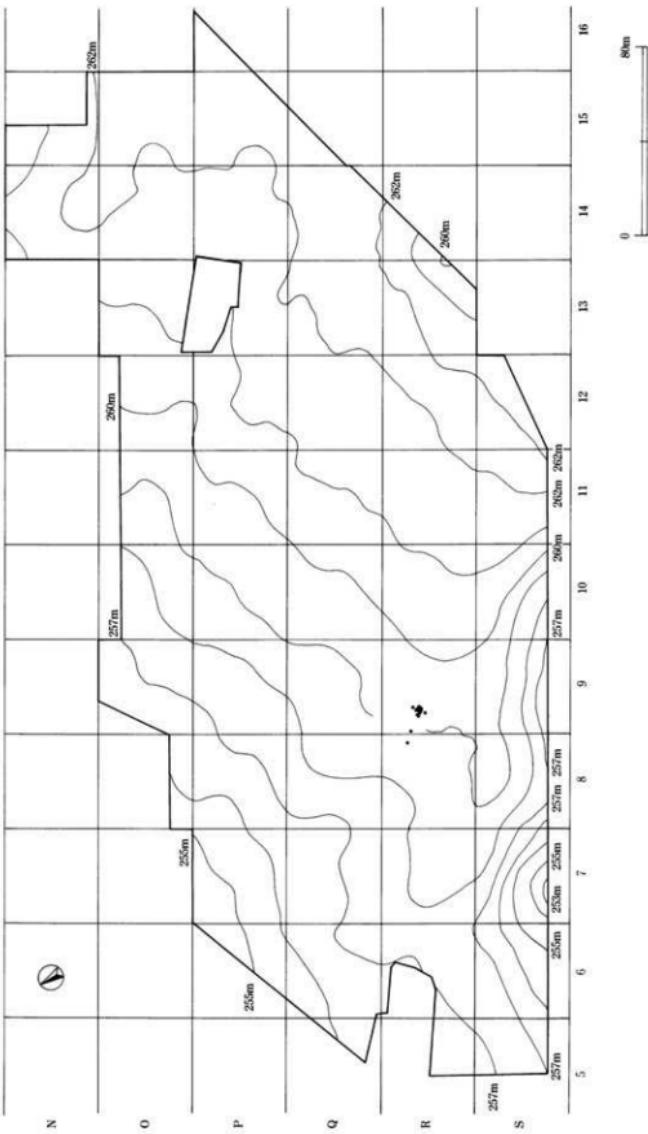
さて、上野原遺跡第10地点で出土した第4群に属する土器を分析していくことにする。

第3群に属する土器は、土器の大きさでは出土した2個体とも、胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する深鉢形土器であった。

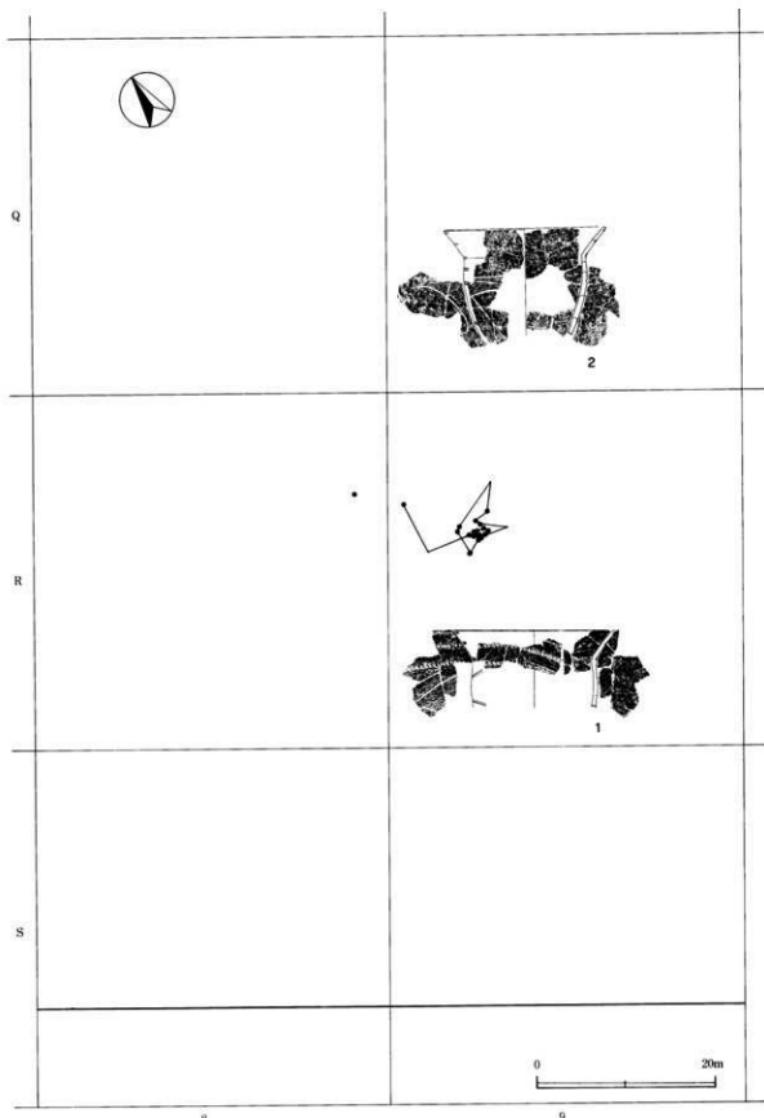
器形的特徴としては、口縁形態がほぼ平口縁を呈する土器で、第2群3類土器や4類土器と同様に、口縁部はラッパ状に聞く土器である。胴部形態は、湾曲しながら口縁部と底部とをつなぐ形を呈する（第55図1・2）。

一方、第4群の施文的特徴としては、まず口唇部刻みが消失すること、口縁部には貝殻腹縁を使用して横位方向に押し引き文を3条巡らすことが挙げられる。また、胴部には2段左撫の単節斜行繩文（LR）を施した後に、棒状工具を使用して区画（枠）を設け、枠外をナデ消している。なお、(1)にはナデ消し損なった繩文が観察できる。

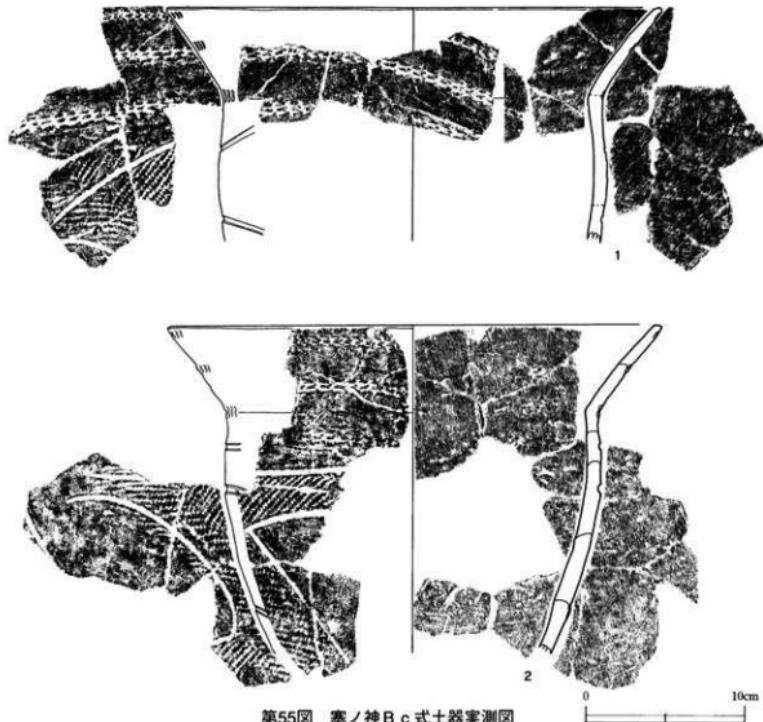
さて、第4群に属する土器の胎土中鉱物は、両個体の土器ともが石英・長石・角閃石で構成され、クロウンモの含有は認められなかった。また土器の調整方法では、外器面がナデ調整を、内器面が木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を行なうことが主流である。土器の色調は、外器面では茶褐色から暗黄褐色が、内器面では暗茶褐色から暗褐色が主流であった。



第53図 墓ノ神Bc式土器出土状況全図



第54図 塞ノ神B c式土器出土状況図 (Q・R・S-8・9区)



第55図 塞ノ神B c式土器実測図

⑤ 第5群 塞ノ神B d式土器

i) 概要

第5群に属する土器は、899点の土器片が出土し、その内の295点、65個体を資料化した。

第5群は、器形的特徴について「胴部の張りがいや剥く、口縁部はラッパ状に外反するが、再び内湾するものもある。底部は上げ底氣味の平底である」とした土器である。一方、施文的特徴について「胴部には貝殻または竈による格子状文などを施文する」が、「口縁部に格子状文または平行沈線文、胴部に刺突連点文を施文し、施文部位が逆になるものもある」施文をするという特徴から、河口貞徳氏により設定された土器である。

ではまず最初に、上野原遺跡第10地点において、第

5群に属する土器がどの地点から主に出土しているか、その状況を検討してみよう（第56図～第66図参照）。なお、図中のドットは実測図が未掲載である土器も1ドット1点で図示している。

出土状況全体図を検討して指摘できることは、集中して出土している区域として、①Q・R-11・12区の区域と、②P・Q・R-14区の区域とを挙げることができる。

ところで①区域の出土状況は、R-11区とR-12区との境にある空白区域を中心として、土器が環状に出土している状況に見える（第61図参照）。しかし、出土した土器を詳細に検討すると、この区域には塞ノ神B d式土器の範疇に属する様々なタイプの土器が出土していることがわかる。

現在、この様々なタイプの土器が、時間差を示すものなのか、種類の豊富さを示すものなのか、検討中である。したがって、この空白区域がある程度の期間を経て形成されたものなのか、一時期に形成されたものなのか、についても検討中である。

ここで注目できるのは、①区域中のR-12区という区域が、平底式土器様式期では遺物の出土があまり見られず、土器埋納遺構が多数検出された区域である、ということである。

一方、②区域の出土状況を検討すると、この区域全体に接合関係が認められる土器が、集中して多数出土していることが注目できる（第61図～第63図）。この状況は、明らかに土器が地形の傾斜などの自然的要因によって集中拡散した結果ではなく、当時の状況を概ね反映した結果であると考えられる。

また、集中区域に①区域と②区域とが認められる状況は、塞ノ神A a式土器の出土状況と同様である。しかし、塞ノ神式B d式土器の出土状況に認められた②区域の集中度の方が高い状況が読みとれる。

そのうえで、①区域に属する土器と②区域に属する土器とが密接な接合関係にあることは、少なくとも①区域のある部分と②区域のある部分とは、ほぼ同時に形成されたことは確実である。

このことは、当時の「場の機能」を考える上で重要な点であるが、その性格付けについては今後の検討課題である。

さて、上野原遺跡第10地点で出土した第5群に属する土器を分析していくことにする。

第5群は、深鉢形土器と小型深鉢形土器とで構成されていた。そのうち、本報告では深鉢形土器を器形的特徴および施文的特徴から1類土器から6類土器まで6分類した。その特徴を以下に記す。

⑤-1 第5群1類土器（第67図1～第68図4）

第5群1類土器を、土器の大きさでは胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する土器（1・2）と、胴部最大径が20cm未満の中型3類に属する土器（4）といふ2種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で、胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器や胴部最大径が30cm前後の中型1類に属する土器は出土しなかった。

器形的特徴としては、土器の大きさの違いに係わらず、口縁形態がほぼ平口縁を呈し、短い口縁部が外反する。胴部は口縁部直下で膨らむため、胴部最大径が胴部上半にある。胴部中央部から下半部にかけてはほぼ直線的に底部にむけてすぼまる。

また施文的特徴として、口縁部には貝殻を使用して、横位方向に数条の刺突連点文を施す。线条は2条から5条と一定ではない。一方、胴部には貝殻腹縁を使って横位方向もしくは斜位方向の条痕文を施すのが特徴である。

⑤-2 第5群2類土器（第69図5～第76図34）

第5群2類土器を、土器の大きさでは胴部最大径が30cm前後の中型1類に属する土器（6）と、胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する土器（5・7・13・14・15・22・27・30）と、胴部最大径が20cm未満の中型3類に属する土器（20・26・33）という3種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で、胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器は出土しなかった。

器形的特徴としては、土器の大きさの違いに係わらず、口縁形態がほぼ平口縁を呈し、長い口縁部が外反する土器である。胴部は1類土器と同様、口縁部直下で膨らむため、胴部最大径が胴部上半にある。胴部中央部から下半部にかけてはほぼ直線的に底部にむけてすぼまる土器である。

一方、2類土器の施文的特徴として、口縁部には貝殻腹縁や棒状工具を使用して、横位方向あるいは斜位方向に刺突連点文もしくは押し引き文の組み合わせで様々な文様が構成される。

一方、胴部には棒状工具あるいは叉状工具を使用して横位方向もしくは斜位方向に条線を施す土器（5・6・7・8・12・13・15・26・27・30・31・33）と、貝殻腹縁あるいは叉状条工具と組み合わせて使用して横位方向もしくは斜位方向に条線を施す土器（14・20・28・29・32）とがある。

⑤-3 第5群3類土器（第77図35～38）

第5群3類土器を、土器の大きさでは胴部最大径が30cm前後の中型1類に属する土器（35）と、胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する土器（36）と、胴部最大

径が20cm未満の中型3類に属する土器(38)という3種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で、胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器は出土しなかった。

器形的特徴としては、土器の大きさの違いに係わらず、口縁形態がほぼ平口縁を呈し、長い口縁部がわずかに外反し、口縁部と胴部の境が不明瞭になる土器である。胴部は中央部でわずかに膨らむため、胴部最大径が胴部中央にある。胴部中央部から下半部にかけてはほぼ直線的に底部にむけてすばまる土器である。

一方、3類土器の施文的特徴として、口縁部には貝殻を使用して、横位方向あるいは斜位方向に刺突連点文で文様が構成される点が挙げられる。一方、胴部には棒状工具あるいは叉状工具を使用して斜位方向に条線を施す土器といえる。

⑤-4 第5群4類土器(第78図39~第79図42)

第5群4類土器を、土器の大きさでは胴部最大径が30cm前後の中型1類に属する土器(39)と、胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する土器(42)という2種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で、胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器と胴部最大径が20cm未満の中型3類に属する土器とは出土しなかった。

器形的特徴としては、土器の大きさの違いに係わらず、口縁形態がほぼ平口縁を呈し、口縁部から胴部まではほぼ直線的になり、口縁部と胴部との境が3類土器よりもさらに不明瞭になる土器である。

一方、4類土器の施文的特徴として、口縁部には貝殻製縫を使用して、横位方向あるいは斜位方向に刺突連点文もしくは押し引き文の組み合わせで様々な文様が構成される。一方、胴部には棒状工具あるいは叉状工具を使用して横位方向もしくは斜位方向に条線を施す土器といえる。

⑤-5 第5群5類土器(第80図43~第81図47)

第5群5類土器を、土器の大きさでは胴部最大径が30cm前後の中型1類に属する土器(47)と、胴部最大径が20cm以上の中型2類に属する土器(44)という2種類の中型深鉢形土器が出土した。その一方で、胴部最大径が45cm前後を測る大型の土器と胴部最大径が20cm未満の中型3類に属する土器とは出土しな

かった。

器形的特徴としては、土器の大きさの違いに係わらず、口縁形態がほぼ平口縁を呈し、口縁部から胴部まではほぼ直線的になり、口縁部と胴部との境が3類土器よりもさらに不明瞭になる、4類土器に近い器形の土器である。

一方、5類土器の施文的特徴として、まず口縁部には、口縁上端部と口縁下端部とに貝殻製縫を使用して、横位方向に押し引き文を巡らす。そしてその間を棒状工具を使用して、縱位方向に十数条の沈線文を単位として、十数か所に施文するのが特徴である。一方、胴部には棒状工具あるいは叉状工具を使用して横位方向もしくは斜位方向に条線を施すのが特徴である。

⑤-6 第5群6類土器(第82図48~第84図58)

第5群6類土器では、明瞭に胴部が復元できる土器がほとんどなかった。

器形的特徴としては、土器の大きさの違いに係わらず、口縁形態がほぼ平口縁を呈し、口縁部から胴部にかけては4類・5類土器と同様にはほぼ直線的にすばまる土器である。

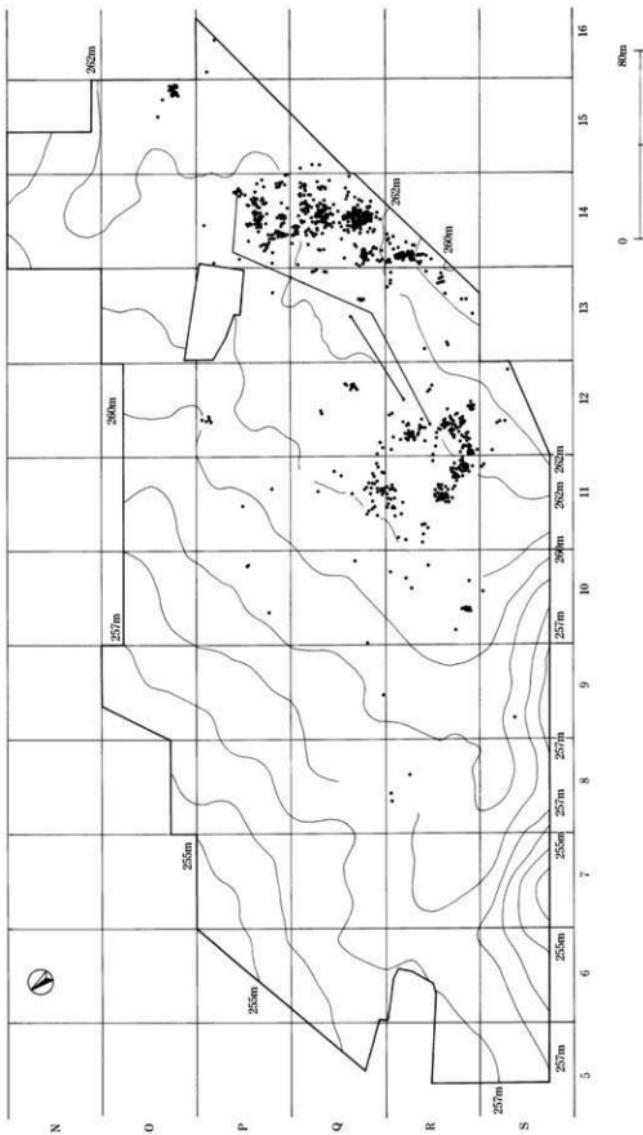
一方、6類土器の施文的特徴として、2タイプの土器が認められた。前者は、口縁部に棒状工具あるいは叉状工具を利用して斜格子沈線文を施文する土器である(48・49)。後者は、口縁部には貝殻製縫を使用して横位方向に刺突連点文もしくは押し引き文を数条巡らし、胴部には棒状工具を使用して斜格子沈線文を施文する土器(50~55)である。

以上、塞ノ神B d式土器を1類土器から6類土器まで分けた、その器形的特徴と施文的特徴とを記した。最後に塞ノ神B d式土器の胎土中鉱物と調整方法と土器色調との特徴を記す。すなわち、

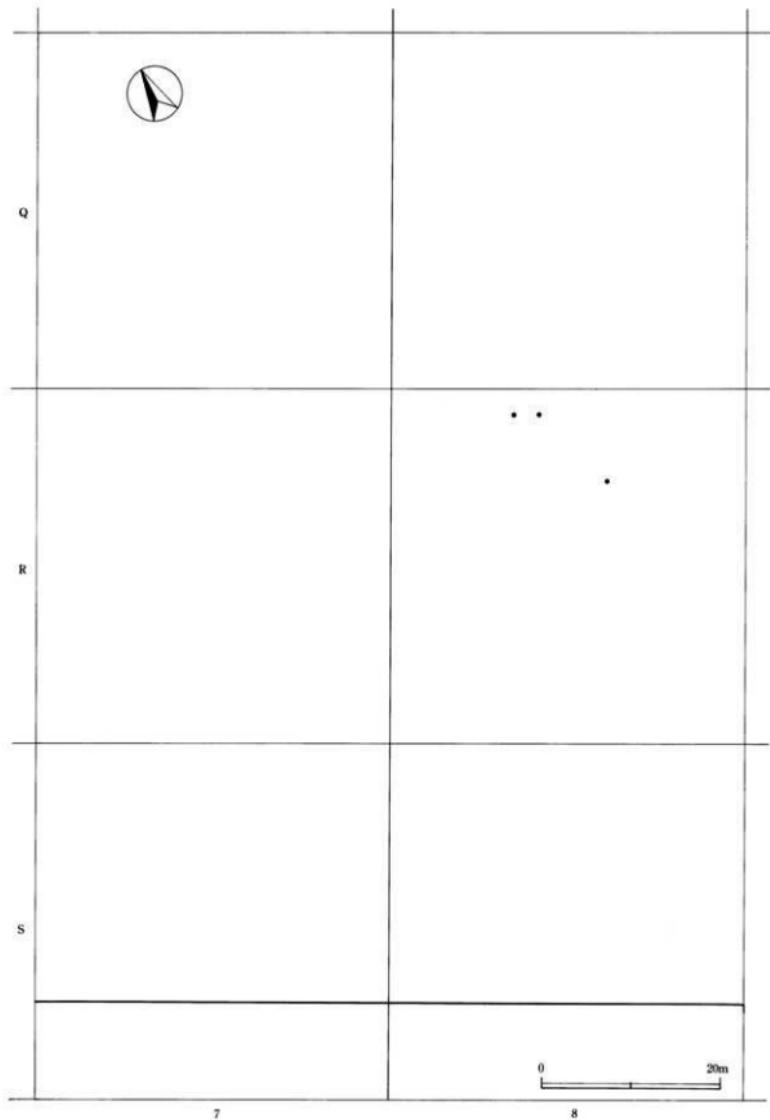
①土器の胎土中鉱物は、主に石英・長石・角閃石で構成され、クロウンモが含有される土器は少なかった。

②土器の調整方法は、主に外器面がナデ調整を、内器面が木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。

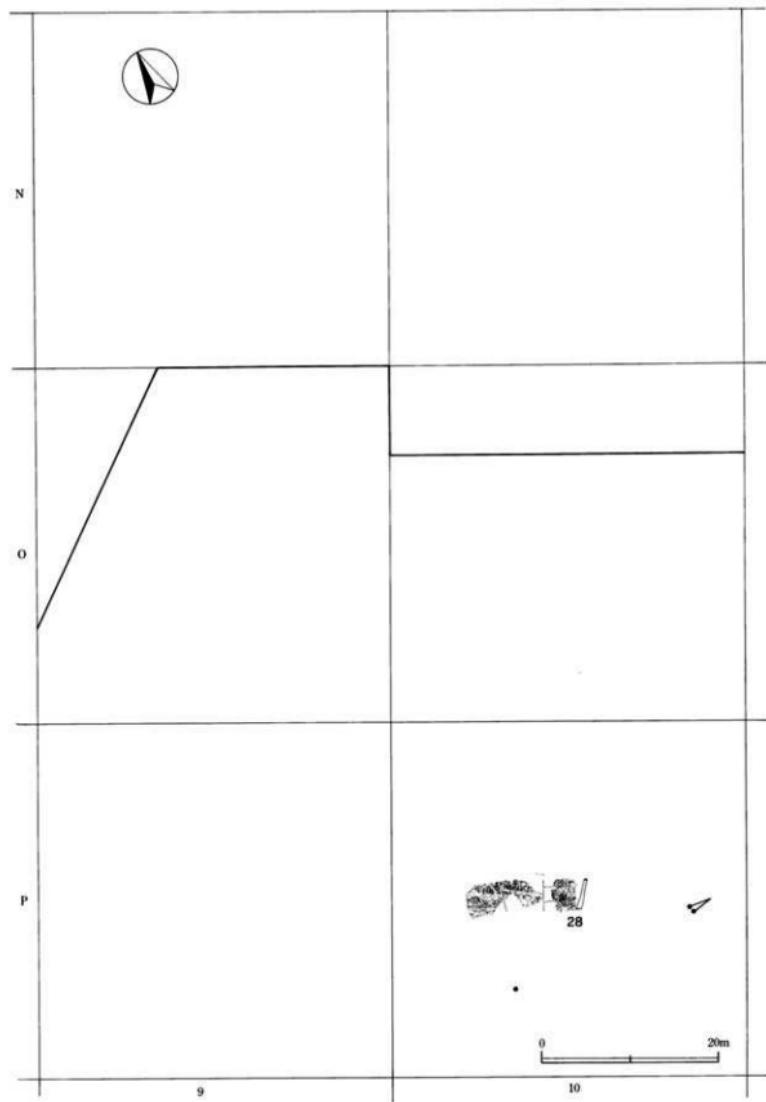
③土器の色調は、外器面では茶褐色から暗茶褐色が、内器面では暗褐色から暗黄褐色が主流であった。



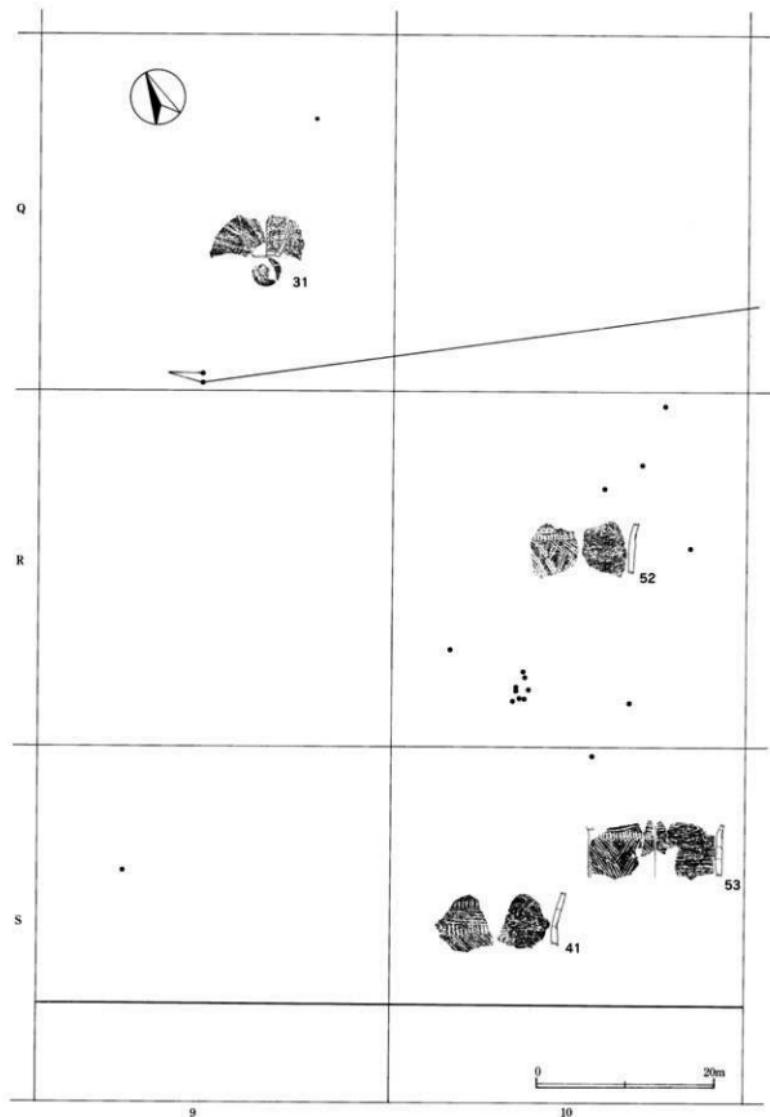
第56図 塚ノ神B d式土器出土状況全体図



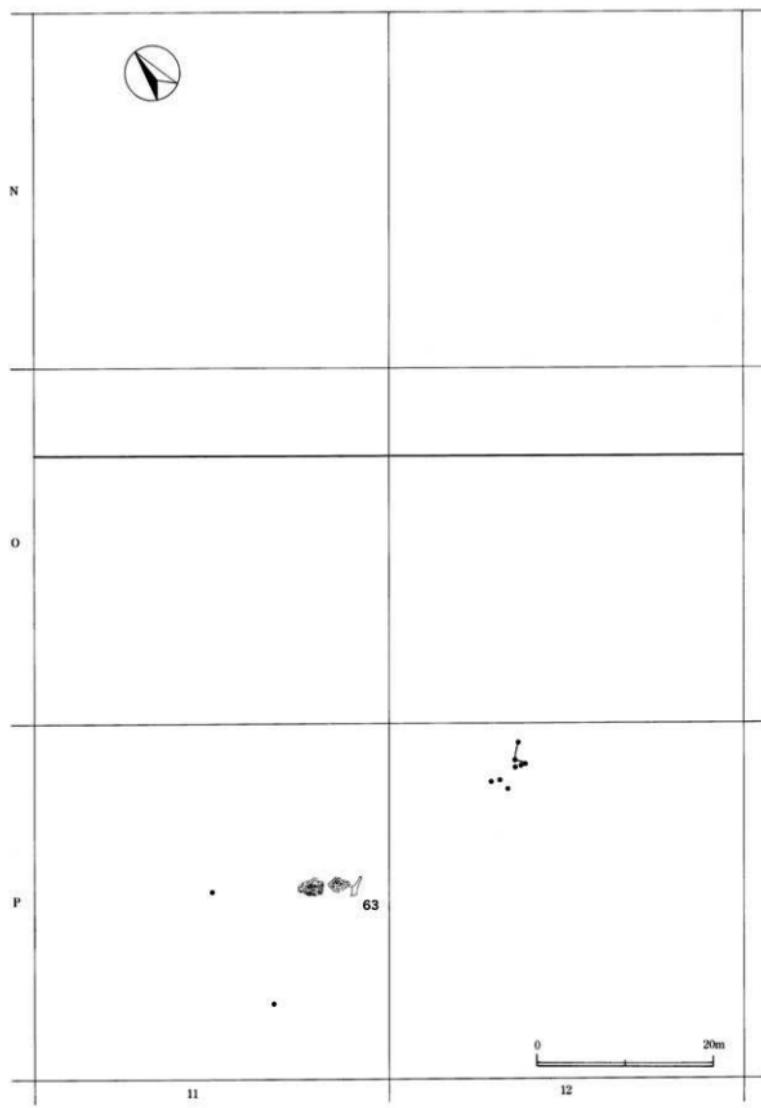
第57図 塞ノ神B d式土器出土状況図1 (Q・R・S - 7・8区)



第58図 塞ノ神B d式土器出土状況図2(N・O・P-9・10区)



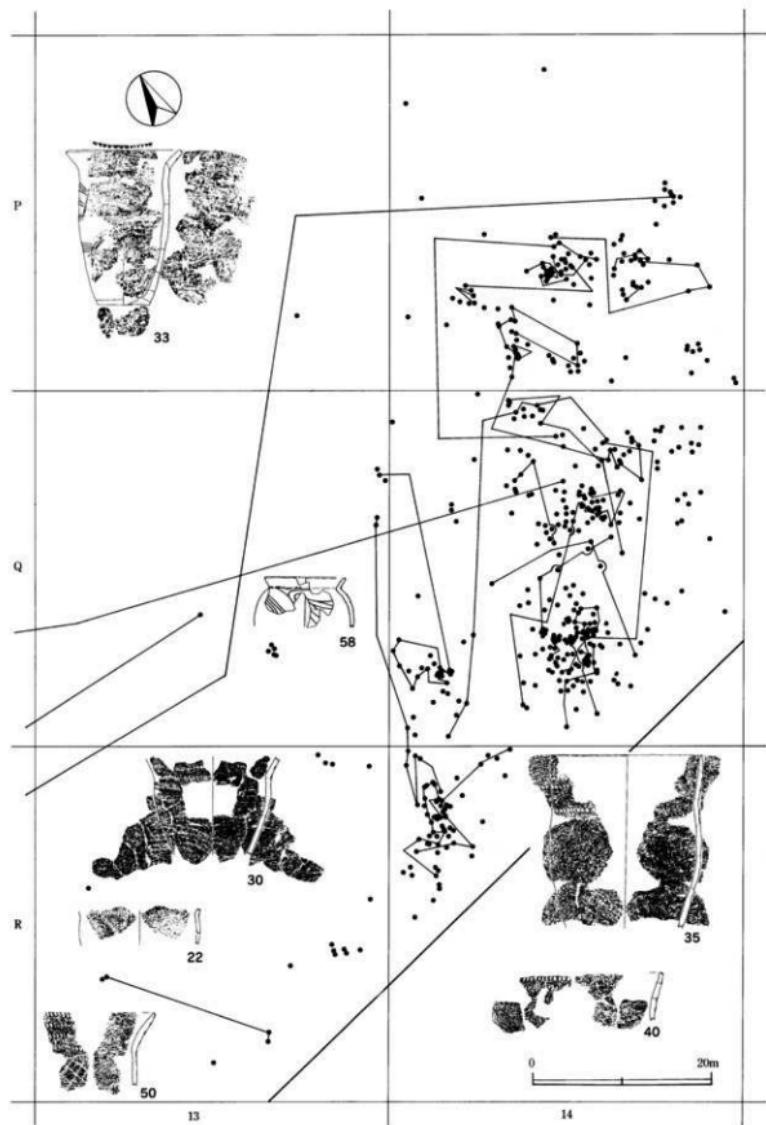
第59図 塞ノ神B d式土器出土状況図3 (Q・R・S - 9・10区)



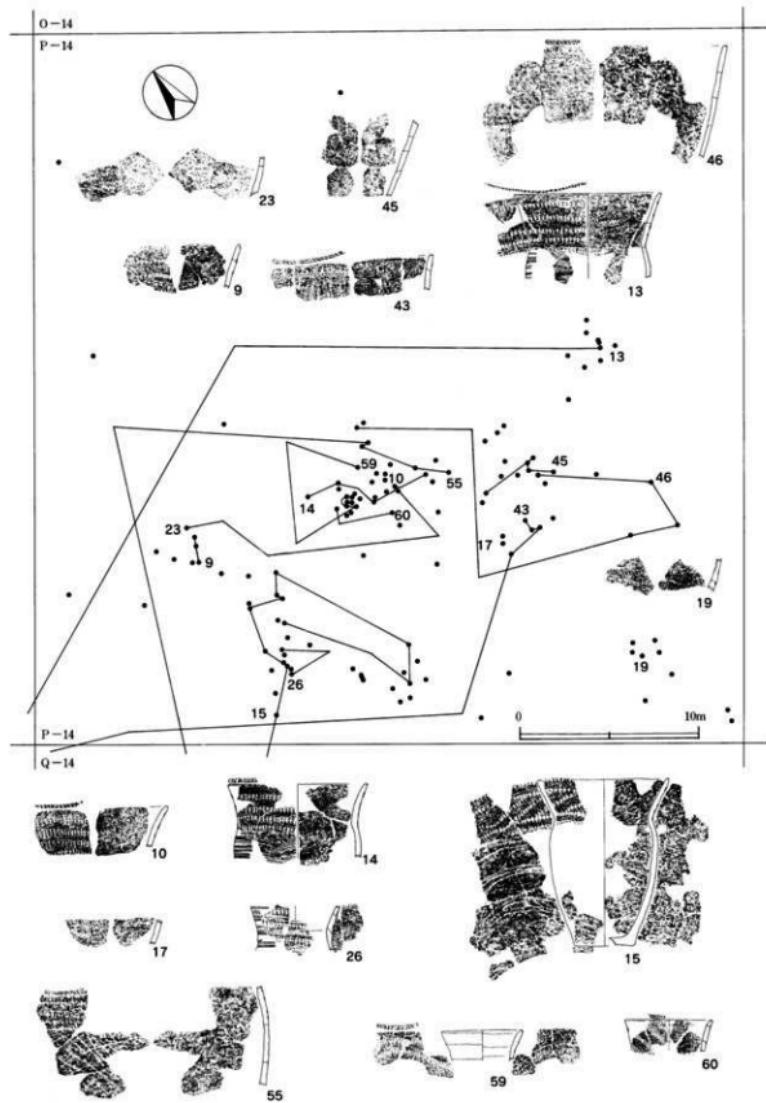
第60図 塞ノ神B d式土器出土状況図4(N・O・P-11・12区)



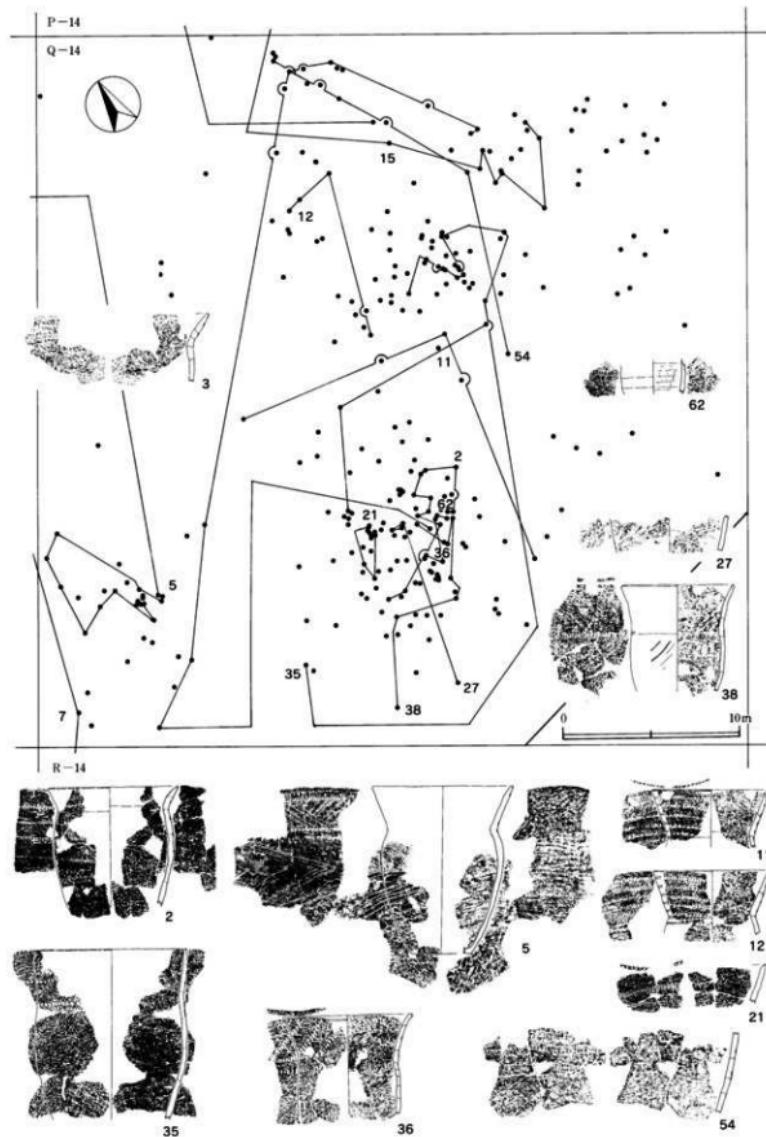
第61図 塞ノ神B d式土器出土状況図 5 (Q・R・S - 11・12区)



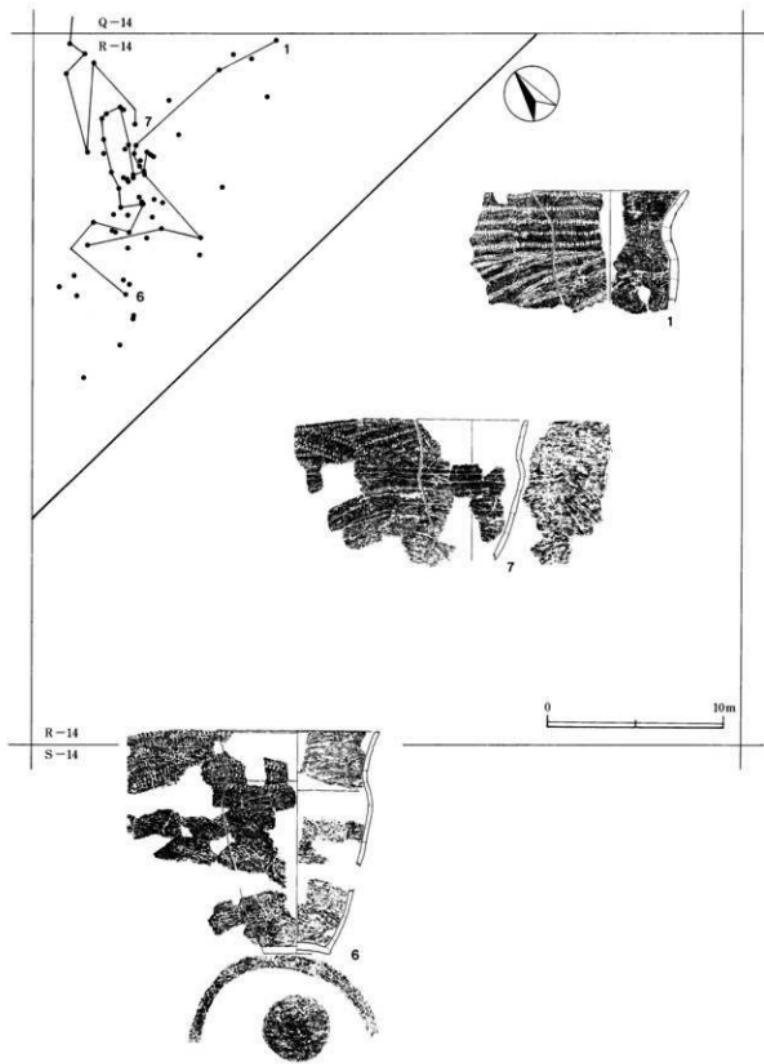
第62図 塚ノ神B d式土器出土状況図6 (P・Q・R・13・14区)



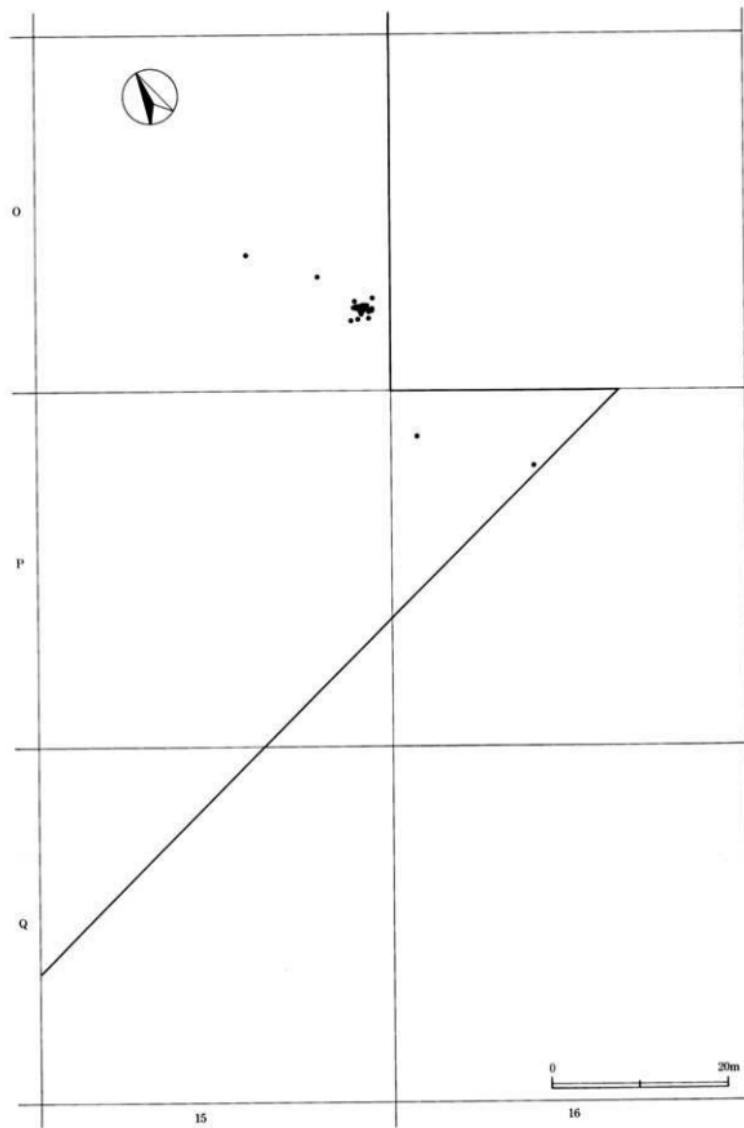
第63図 塞ノ神B式土器出土状況図7(P-14区)



第64図 塞ノ神B d式土器出土状況図8 (Q-14区)



第65図 塞ノ神B d式土器出土状況図9(R-14区)

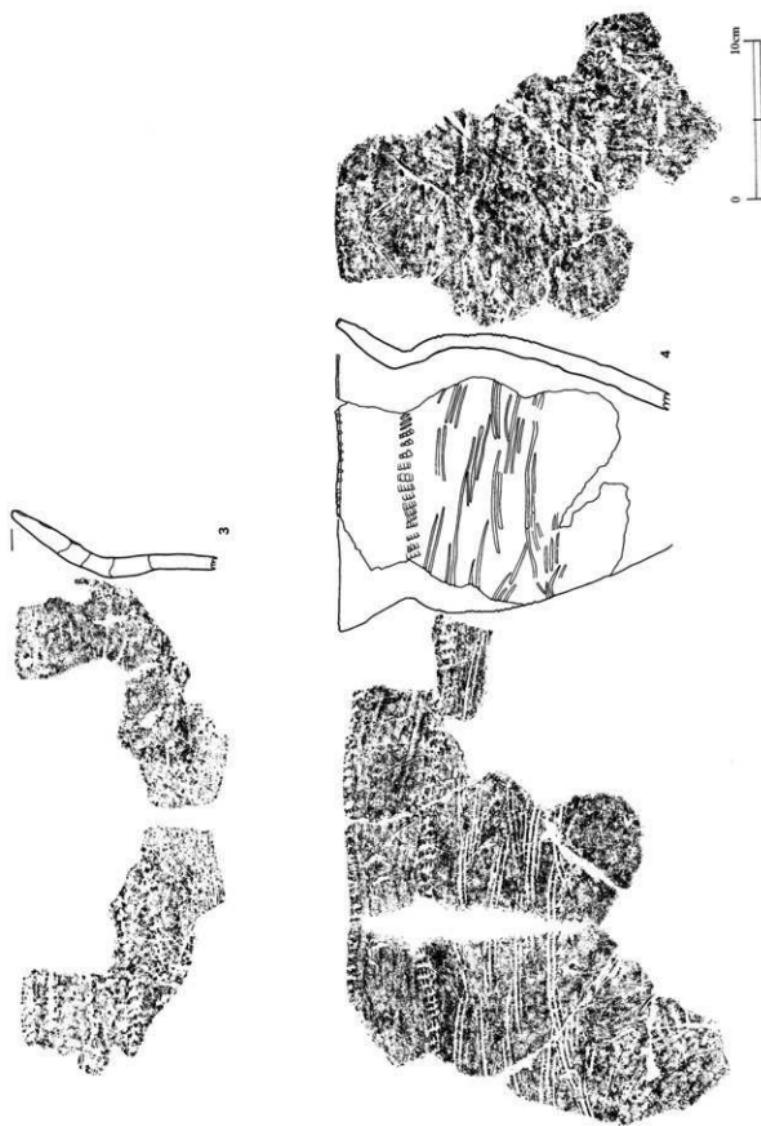


第66図 塞ノ神B-d式土器出土状況図10 (O・P・Q-15・16区)

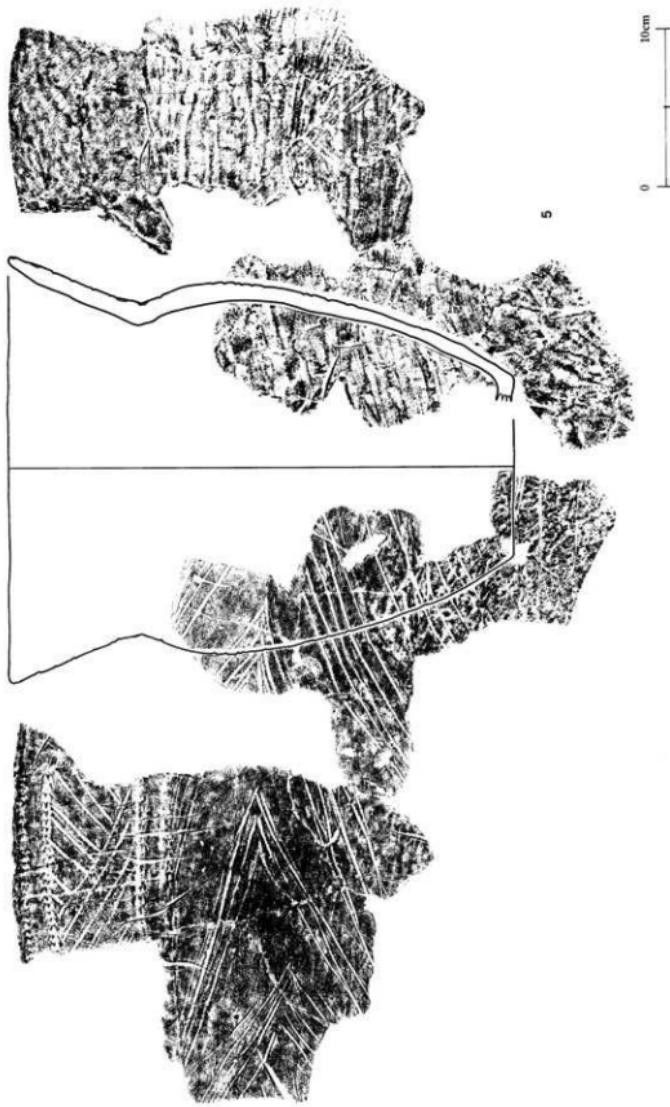
第67図 塚ノ神B d式土器実測図1(1類-1)

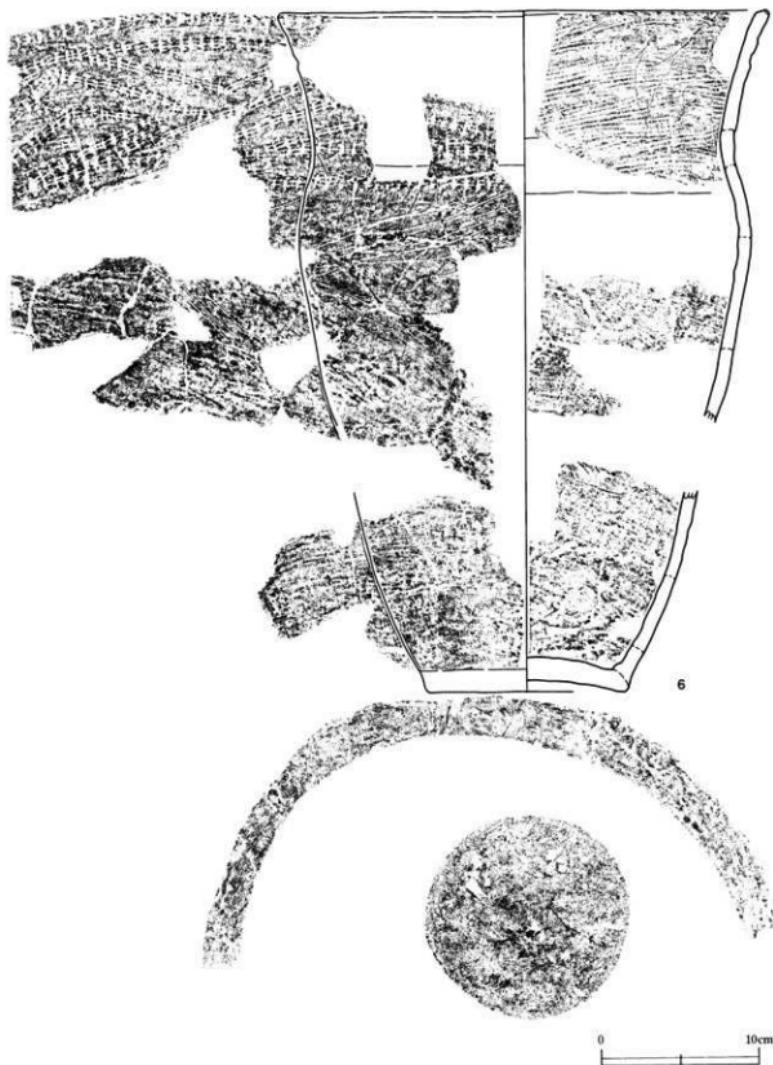


第68圖 磁ノ神B d式土器実測図2(1類-2)

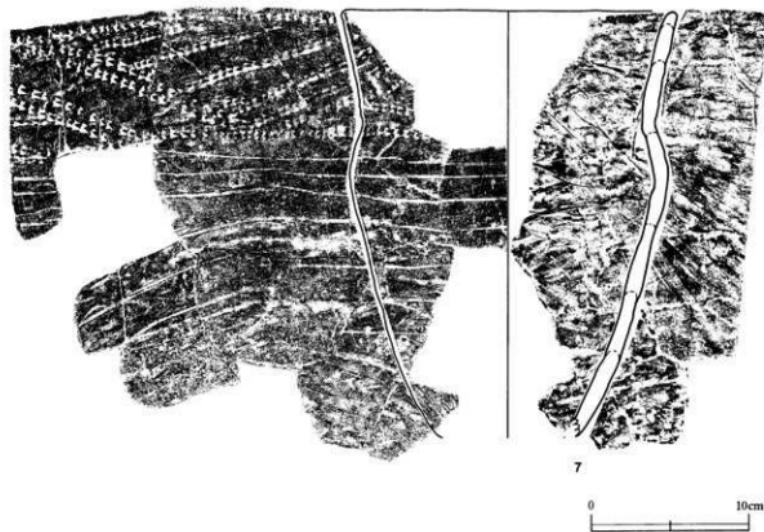
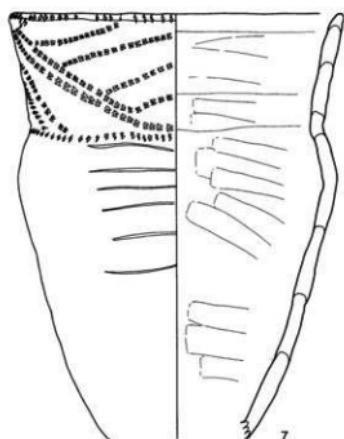


第69図 砂ノ神B d式土器実測図3(2類-1)



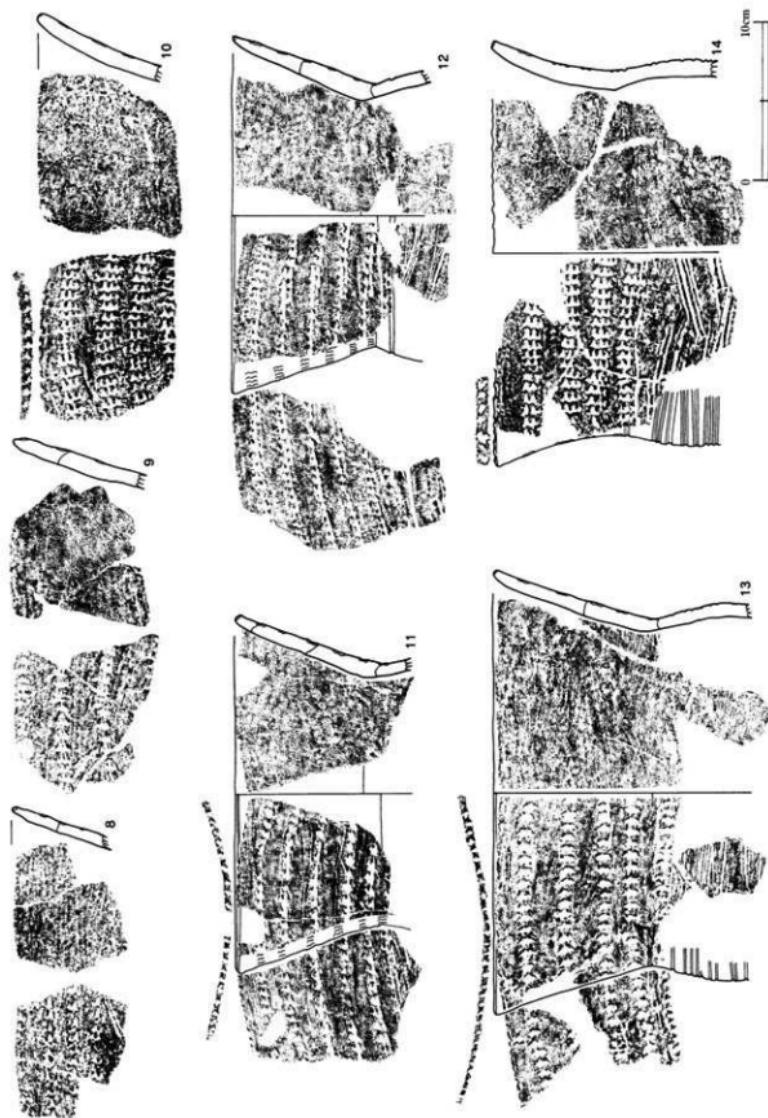


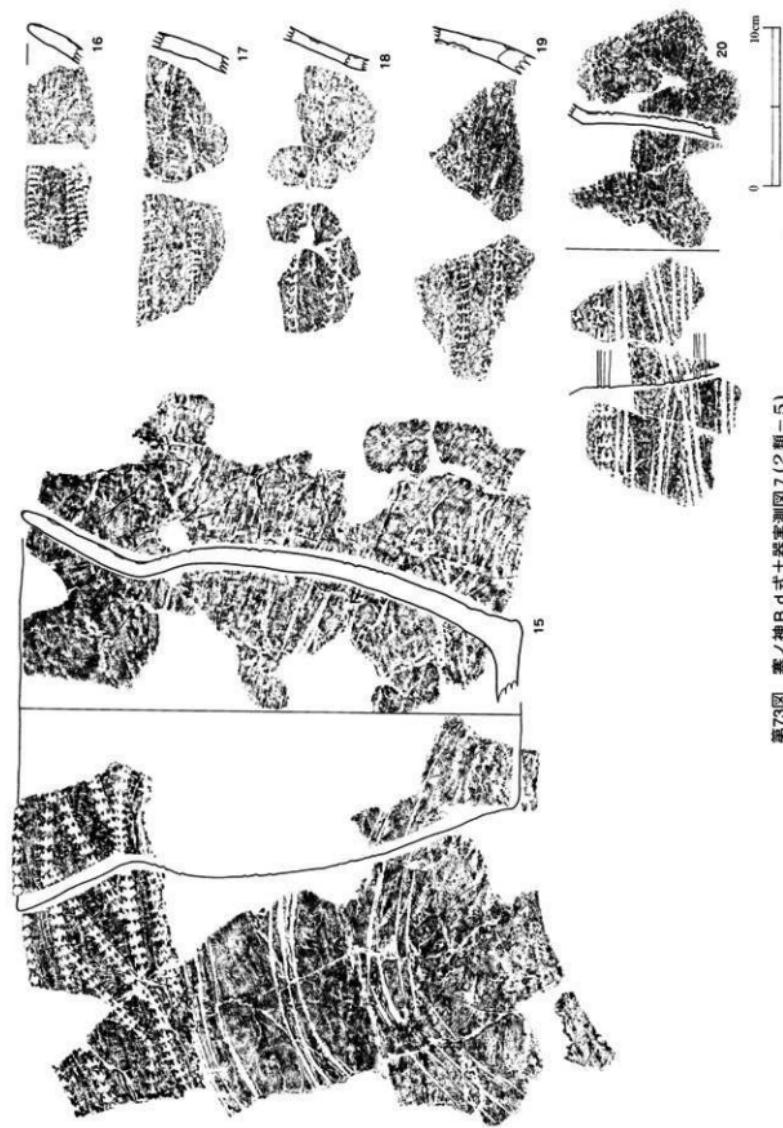
第70図 塞ノ神B d式土器実測図4(2類-2)



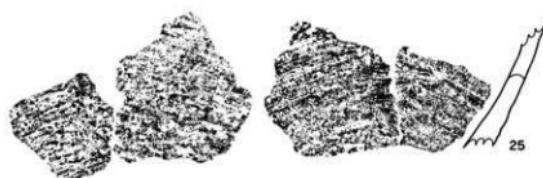
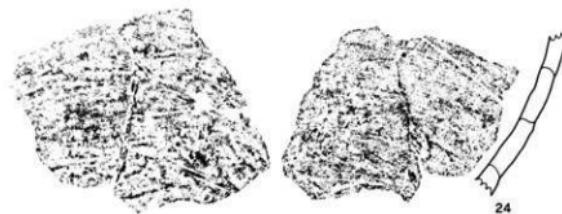
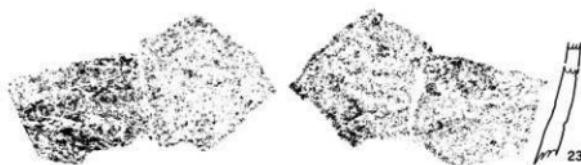
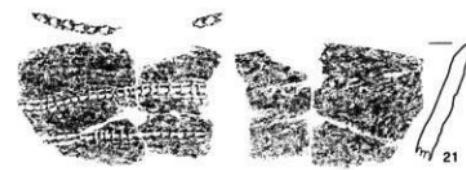
第71図 塞ノ神B d式土器実測図5(2類-3)

第72圖 墓ノ神B d式土器実測図6(2類-4)





第73図 塚ノ神B d式土器実測図7(2類-5)

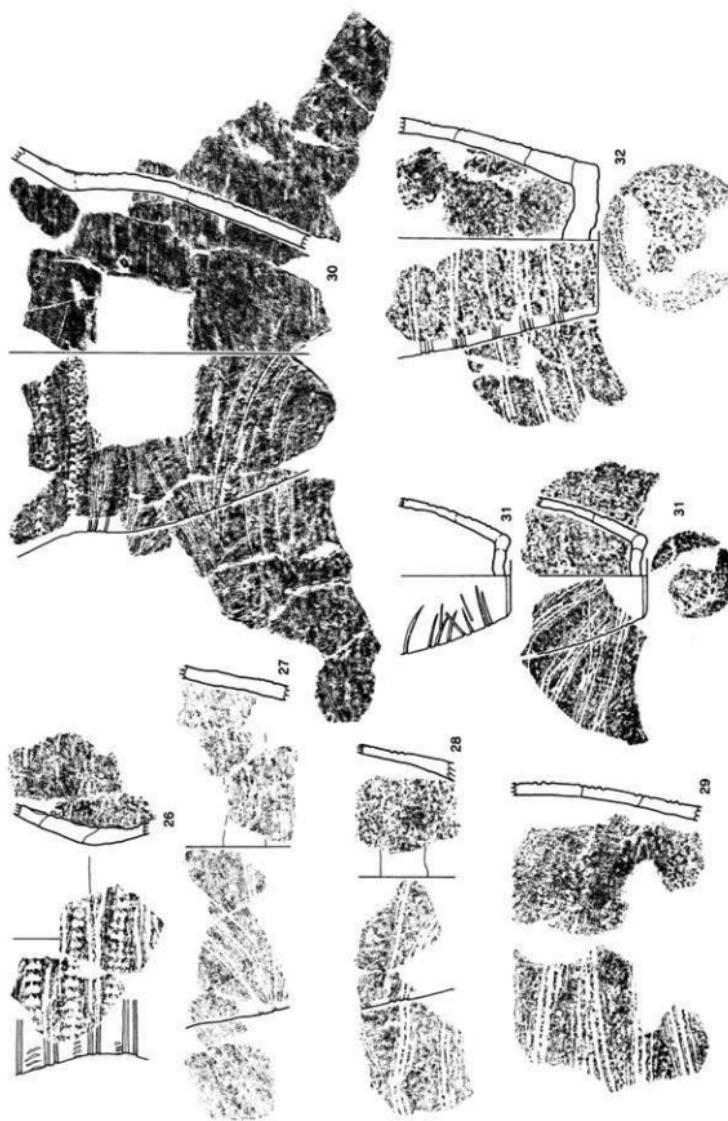


0 10cm

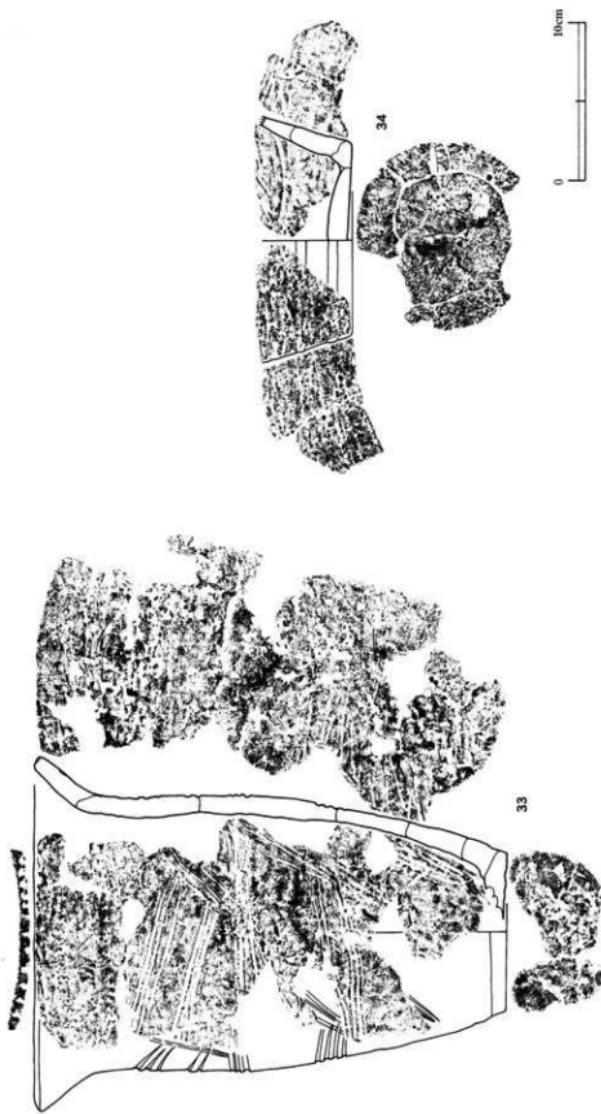
第74図 塞ノ神Bd式土器実測図8(2類-6)

第75図 塚ノ神B d式土器実測図9(2類-7)

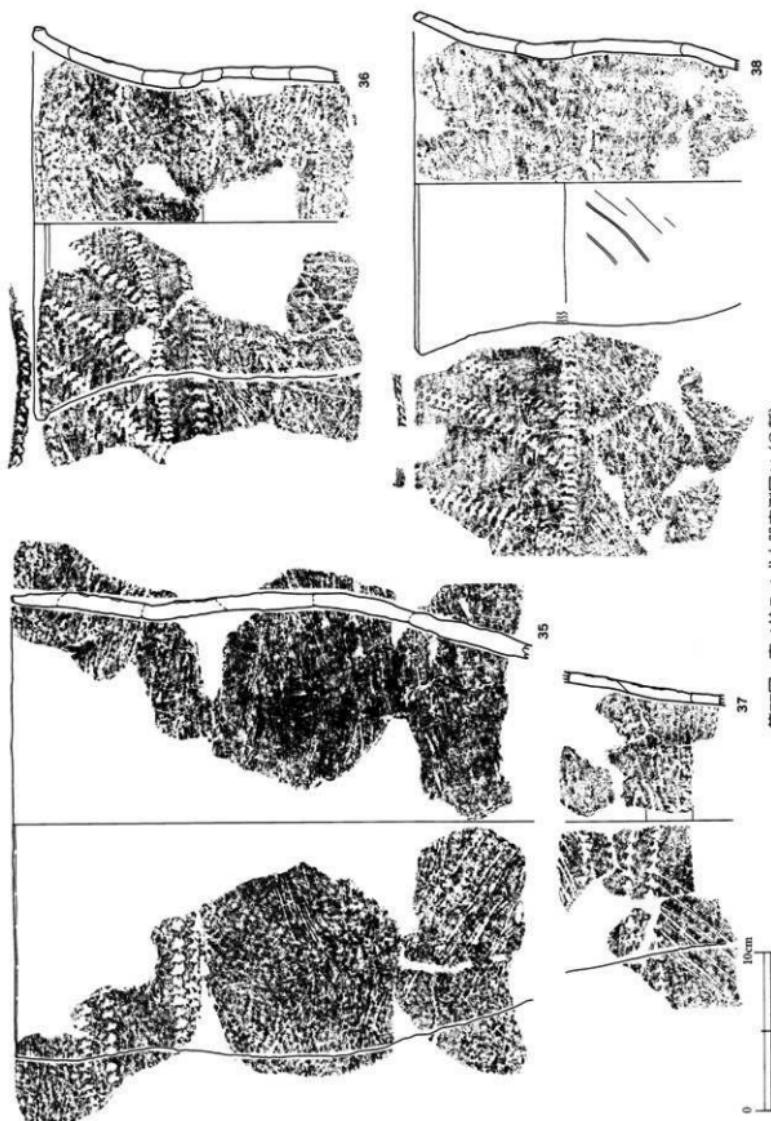
10cm
0

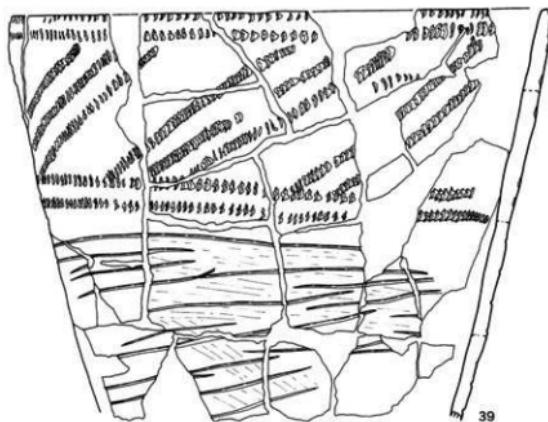


第76図 墓ノ神B d式土器実測図10(2類-8)

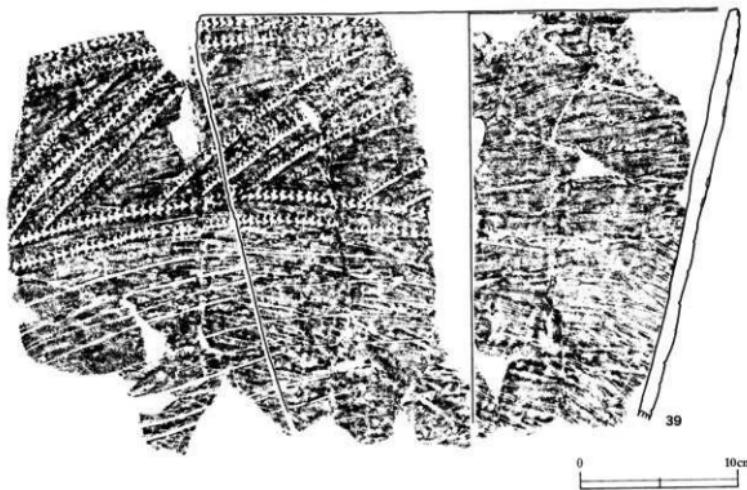


第77図 墓ノ神B d式土器実測図11(3種)



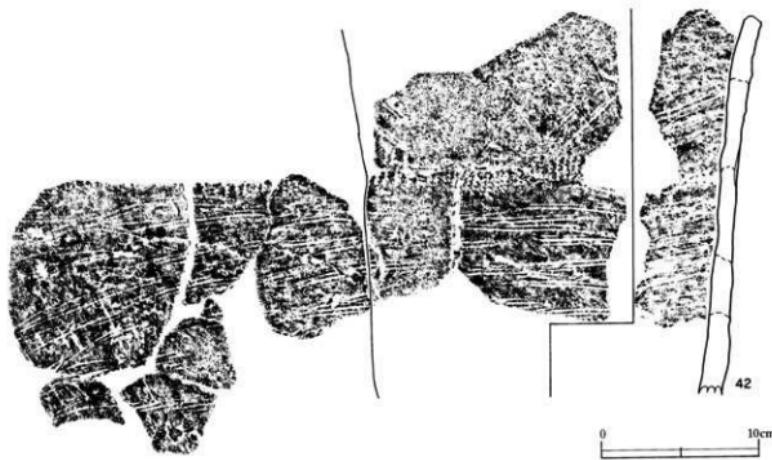
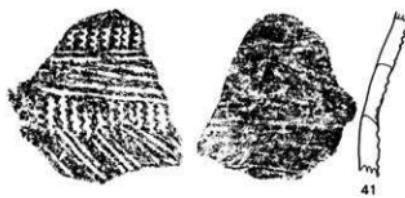


39

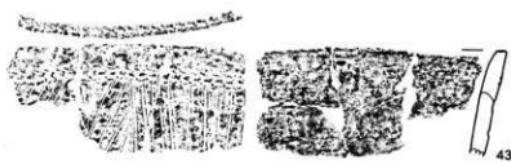


0 10cm

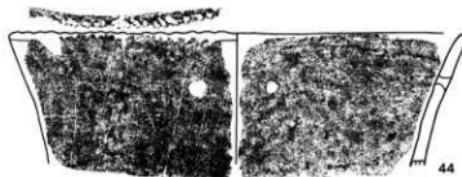
第78図 塞ノ神B d式土器実測図12(4類-1)



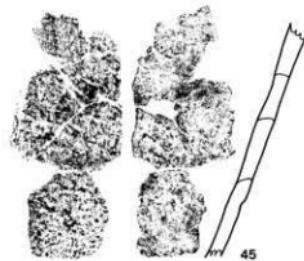
第79図 塞ノ神B d式土器実測図13(4類-2)



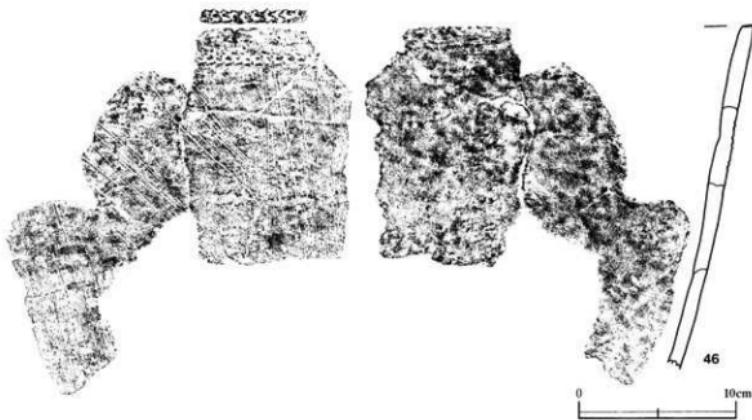
43



44



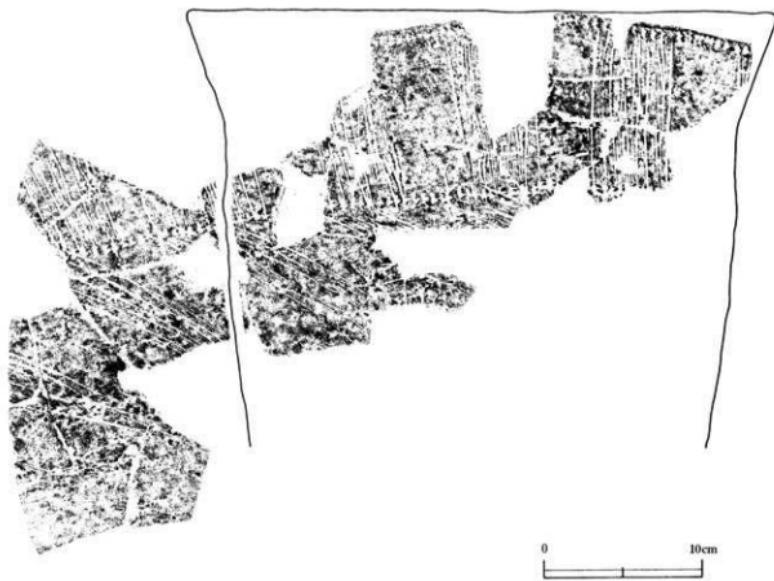
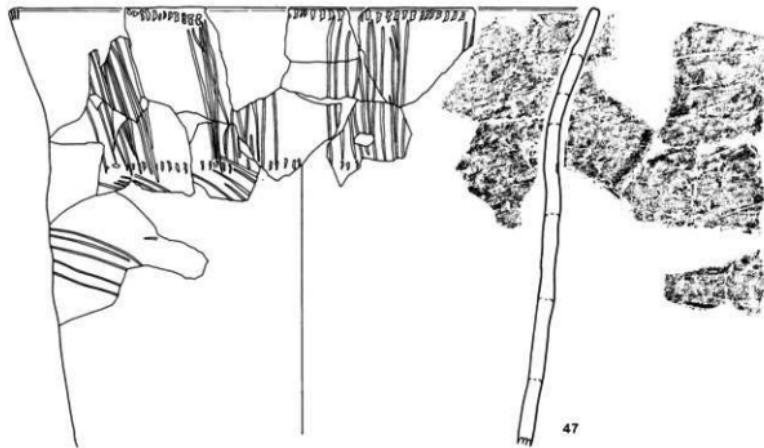
45



46

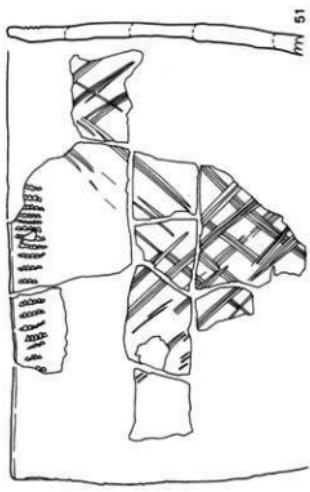
0 10cm

第80図 塞ノ神B d式土器実測図14(5類-1)

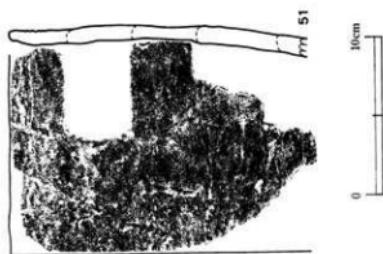


第81図 塞ノ神B d式土器実測図15(5類-2)

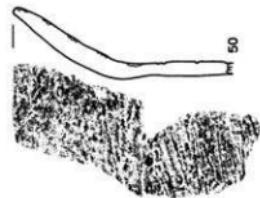
第82圖 墓ノ神B d式土器実測図16(6類-1)



48



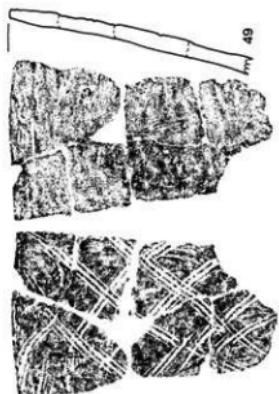
51
10cm

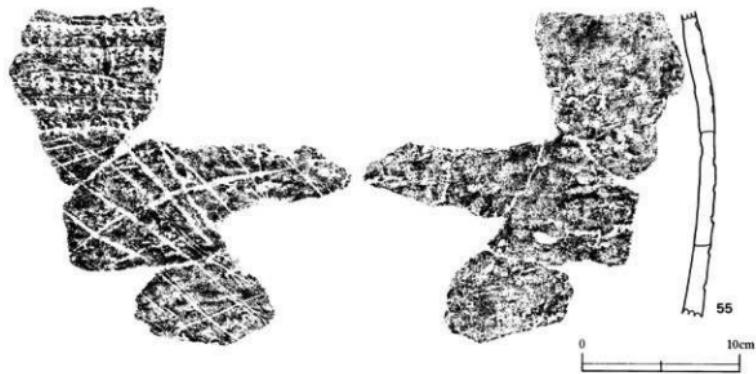
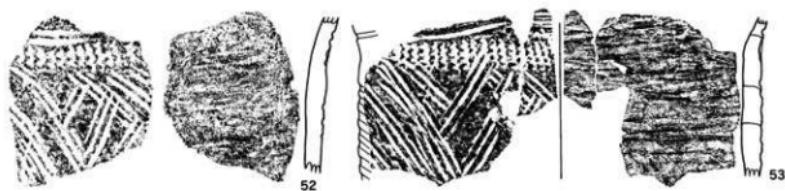


50
10cm

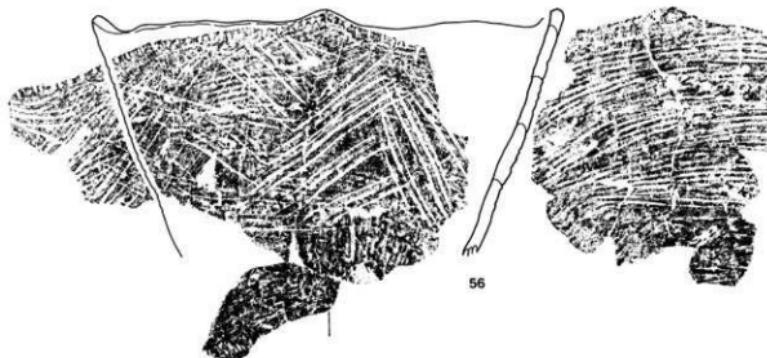


49
10cm

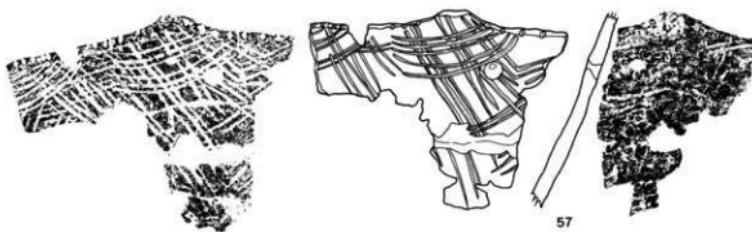




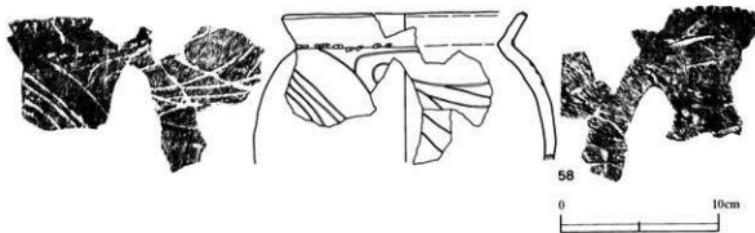
第83図 塞ノ神B d式土器実測図17(6類-2)



56



57

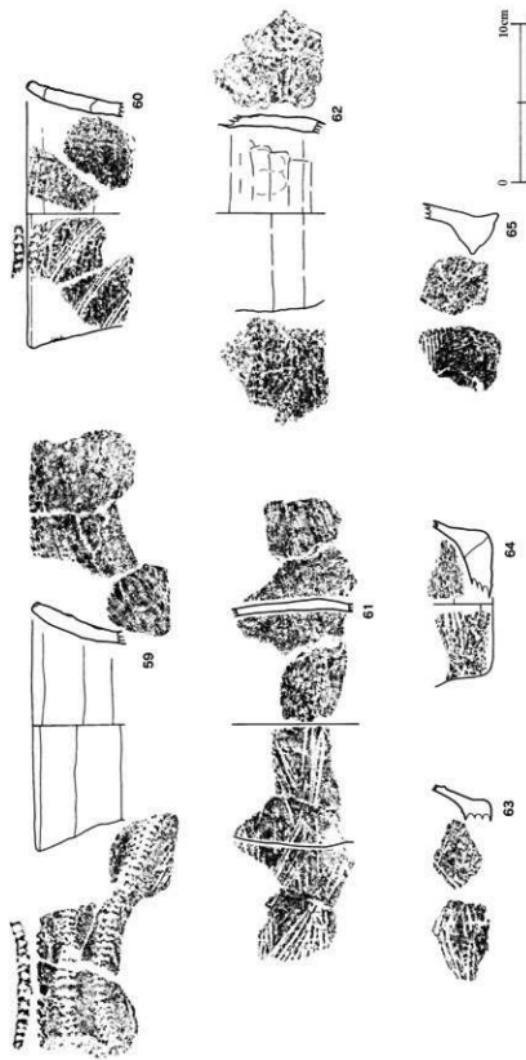


0

10cm

第84図 塞ノ神B d式土器実測図18(6類-3)

第85図 墓ノ神B d式土器実測図19(小型深鉢)



塞ノ神B d式土器1類

種類	報告番号	出土区	目記番号	実測図番号	寸	基盤	部位	粘 土			外表面 調査	内表面 調査	色 調		備考
								石英	長石	角閃石	カロウンモ		砂糖	外表面	内表面
第1	R-1-4	20		V1											
	R-1-4	84		V1											
	R-1-4	123		V1											
	R-1-4	124		V1											
	R-1-4	262		801	V1	深鉢	口縁-側部	○	○	○					
	R-1-4	863		V1											
	R-1-4	1073		V1											
	R-1-4	1347		V1											
	R-1-4	1355		V1											
第2	221号施6	124-145		V1											
	Q-1-4	336		V1											
	Q-1-4	575		V1											
	Q-1-4	653		V1											
	Q-1-4	667		V1											
	Q-1-4	1099	812	V1	深鉢	口縁-側部	○	○	○						
	Q-1-4	2179	V1												
	Q-1-4	2194	V1												
	Q-1-4	2262	V1												
	Q-1-4	2627	V1												
第3	Q-1-4	365		V1											
	Q-1-4	990	831	V1	深鉢	口縁-側部	○	○	○						
	Q-1-4	2527	V1												
第4	Q-1-1	12347	V1												
	R-1-1	264	1053	V1	深鉢	口縁-側部下平	○	○		○	砂粒を含む	若いナデ	ハテ-ナデ	暗褐色-暗褐色	暗褐色-暗褐色
	R-1-1	2198	V1												

塞ノ神B d式土器2類

種類	報告番号	出土区	目記番号	実測図番号	寸	基盤	部位	粘 土			外表面 調査	内表面 調査	色 調		備考
								石英	長石	角閃石	カロウンモ		砂糖	外表面	内表面
第5	Q-1-3	1160		V1											
	Q-1-4	428		V1											
	Q-1-4	430		V1											
	Q-1-4	431		V1											
	Q-1-4	441		V1											
	Q-1-4	472	重10	V1	深鉢	口縁-側部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗褐色-灰褐色	暗褐色-暗褐色
	Q-1-4	480	V1												
	Q-1-4	488	V1												
	Q-1-4	491	V1												
	Q-1-4	754	V1												
第6	Q-1-4	772	V1												
	R-1-4	6		V1											
	R-1-4	29		V1											
	R-1-4	38		V1											
	R-1-4	358	V1												
	R-1-4	361	V1												
	R-1-4	460	V1												
	R-1-4	636	V1												
	R-1-4	697	813	V1	深鉢	口縁-側部	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	強いヨコハケ	赤褐色-黄褐色	暗褐色-暗褐色
	R-1-4	909	V1												
第7	R-1-4	974	V1												
	R-1-4	1075	V1												
	R-1-4	1177	V1												
	R-1-4	1256	V1												
	R-1-4	1352	V1												
	R-1-4	1359	V1												
	Q-1-3	11886	V1												
	Q-1-3	11899	V1												
第8	Q-1-4	2531	V1												
	R-1-4	159	重11	V1	深鉢	口縁-側部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	若いヨコハケ	暗褐色-暗褐色	暗褐色-暗褐色
	R-1-4	166	V1												
	R-1-4	202	V1												
	R-1-4	293	V1												
	R-1-4	922	V1												

塞ノ神B d式土器2類

塞ノ神B d式土器2類

種別	部局	区分	品目	実測寸	測定寸	幅	高さ	底幅	地 上			外底部 調査	内底部 調査	色 質		種名	
									右直	左直	角内斜	クロランク	底構	外底部	内底部		
26	P	P-1-4	299	M	M	直縁	口縁下部-脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐黃褐色-褐黃褐色	脚柱付3.2cm
		P-1-4	1280	M	M	直縁	口縁下部-脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐黃褐色-褐黃褐色	脚柱付3.2cm
		Q-1-4	278	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.2cm
		Q-1-4	367	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.2cm
27	P	Q-1-4	388	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.2cm
		P-1-0	238	M	M	直縁	脚部下半	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色-褐褐色	脚柱付3.4cm
		P-1-0	231	M	M	直縁	脚部下半	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色-褐褐色	脚柱付3.4cm
28	P	Q-1-2	7194	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	丁寧ナゲ	右下がりナゲ-曳いナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
		Q-1-2	7200	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	丁寧ナゲ	右下がりナゲ-曳いナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
		Q-1-3	1429	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
		R-1-2	291	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
75	R	R-1-2	192	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
		R-1-2	195	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
		R-1-2	201	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
		R-1-2	205	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
		R-1-2	206	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
		R-1-2	208	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
		R-1-2	209	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
		R-1-2	210	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
		R-1-2	211	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
		R-1-2	212	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	褐褐色	脚柱付3.4cm
30	Q	Q-0-9	2274	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱-脚部	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-0-9	2275	3861	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱-脚部	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-4	2277	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱-脚部	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
31	R	R-1-2	450	1688	M	直縁	底縁-脚部下半	○ ○ ○					脚柱を含む	ナゲ	ナゲ-ナゲ	ナゲ	ナゲ
		R-1-2	450	1689	M	直縁	底縁-脚部下半	○ ○ ○					脚柱を含む	ナゲ	ナゲ-ナゲ	ナゲ	ナゲ
32	P	P-1-3	556	1689	M	直縁	底縁-脚部-底部	○ ○ ○					脚柱を含む	ナゲ	ナゲ-ナゲ	ナゲ	ナゲ
		P-1-3	556	1690	M	直縁	底縁-脚部-底部	○ ○ ○					脚柱を含む	ナゲ	ナゲ-ナゲ	ナゲ	ナゲ
36	Q	Q-1-1	4100	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-1	4113	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-1	9528	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-1	9544	823	M	直縁	脚部-底縁-底部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-1	12011	M	M	直縁	脚部-底縁-底部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-1	12065	M	M	直縁	脚部-底縁-底部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-1	12083	M	M	直縁	脚部-底縁-底部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm

塞ノ神B d式土器3類

種別	部局	区分	品目	実測寸	測定寸	幅	高さ	底幅	地 上			外底部 調査	内底部 調査	色 質		種名	
									右直	左直	角内斜	クロランク	底構	外底部	内底部		
35	Q	Q-1-4	997	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ハケ-曳いナゲ	ハケ-曳いナゲ	褐褐色-褐褐色	脚柱付3.4cm
		Q-1-4	1068	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ハケ-曳いナゲ	ハケ-曳いナゲ	褐褐色-褐褐色	脚柱付3.4cm
		Q-1-4	1271	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-4	1272	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-4	1286	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-4	1301	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-4	1304	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-4	1308	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-4	1309	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-4	1311	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
37	R	Q-1-4	1991	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ナゲ	ナゲ-ナゲ	ナゲ	ナゲ
		Q-1-4	2297	919	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	右下がりナゲ-ナゲ	右下がりナゲ-ナゲ	褐褐色-褐褐色	右下がりナゲ-3.4cm
		Q-1-4	2628	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
		Q-1-4	2629	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコハケ-ナゲ	ミコハケ-ナゲ	ナゲ	脚柱付3.4cm
38	Q	Q-1-4	117	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	ミクニ石付3.4cm
		Q-1-4	1693	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	ミクニ石付3.4cm
		Q-1-4	697	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	ミクニ石付3.4cm
		Q-1-4	1097	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	ミクニ石付3.4cm
		Q-1-4	1173	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	ミクニ石付3.4cm
		Q-1-4	1179	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	ミクニ石付3.4cm
		Q-1-4	2547	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	ミクニ石付3.4cm
		Q-1-4	2718	M	M	直縁	脚部	○ ○ ○					脚柱を含む	ミコナゲ	ミコナゲ	ナゲ	ミクニ石付3.4cm

塞ノ神B d式土器4類

寒ノ神B d式土器5類

寒ノ神B d式土器 6類

塞ノ神B d式土器6類

種別 番号	報告 番号	出土 区	記注 番号	実測図 番号	縦 幅	横 幅	部位	地 土				外表面 調整	内部面 調整	色 調		備考	
								石英	鉄石	角閃石	クロラント	砂糖		外表面 調整	内部面 調整		
	52	R-1-0	3205	964	V	鉄鉢	網目	○	○	○		砂粒を含む	ナゲ	ハケ+ナゲ	茶褐色	茶褐色	
	53	R-1-0	141	965	V	鉄鉢	網目上半	○	○	○		砂粒を含む	ナゲ	ナメリ	赤褐色	暗赤褐色	外壁表層土器と同様
Ⅲ	54	Q-1-4	1243	1243	V	鉄鉢	網目										
		Q-1-4	1710	1710	V	鉄鉢	網目	○	○	○		砂粒を含む	ナゲ	ハケ+(相い)ナゲ	明黃白色~暗褐色	暗黃褐色~暗褐色	スヌ付着
		Q-1-4	2031	920	V	鉄鉢	網目	○	○	○		砂粒を含む	ナゲ	ハケ+ナゲ	明黃白色~暗褐色	暗黃褐色~暗褐色	
		Q-1-4	2632		V												
		Q-1-4	2633		V												
		Q-1-4	2770		V												
Ⅳ	55	P-1-4	660		V												
		P-1-4	670		V												
		P-1-4	2068	833	V	深鉢	網目	○	○	○		砂粒を含む	ナゲ	ハケ+ナゲ	暗茶褐色~暗黃褐色	暗茶褐色~暗黃褐色	
		P-1-4	2384		V												
		P-1-4	1538		V												
		Q-1-1	1760	1817	V	深鉢	口縁+網目	○	○	○	○	砂糖・鐵砂	ナゲ	貝冠条痕+ナゲ	赤褐色~暗茶褐色	暗茶褐色	
Ⅴ	57	Q-1-1	1760	1616	V	深鉢	口縁+網目	○	○	○	○	砂糖・鐵砂	ナゲ	貝冠条痕+ナゲ	赤褐色~暗茶褐色	暗茶褐色	
		Q-1-4	595		V												
		Q-1-4	786		V												
		Q-1-4	1366		V												
		Q-1-4	2636		V												
		Q-1-4	2651	833	V	深鉢	口縁+網目	○	○	○		砂糖・鐵砂	ナゲ	ハケ+ナゲ	黃白色~暗褐色	黃白色~暗褐色	
Ⅵ	58	Q-1-4	2233		V												
		Q-1-4	2304		V												
		Q-1-4	2396		V												
		Q-1-4	2399		V												
		Q-1-4	595		V												
		Q-1-4	786		V												
Ⅶ	59	P-1-4	2255	949	V	小型深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ+ナゲ	ヨコハケ+ナゲ	暗茶褐色 暗褐色	茶褐色	口徑3.0cm
		P-1-4	2359		V												
		P-1-4	2618		V												
		P-1-4	2352	953	V	小型深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ+ナゲ	ヨコハケ+ナゲ	茶褐色~黃白色	黃白色~暗茶褐色	口徑3.4cm
		R-1-1	2258		V												
		R-1-1	1432	946	V	小型深鉢	網目	○	○	○		砂糖・鐵砂	ヨコハケ+ナゲ	ヨコハケ+ナゲ	茶褐色~黃白色	黃白色~暗茶褐色	網部径3.4cm
Ⅷ	60	R-1-1	1436		V												
		Q-1-4	458	949	V	小型深鉢	網目	○	○	○		砂糖・鐵砂	ヨコハケ+ナゲ	ヨコハケ+ナゲ	茶褐色~暗茶褐色	茶褐色~暗茶褐色	網部徑3.5cm
		R-1-1	234	345	V	小型深鉢	網目下半	○	○	○		砂糖・鐵砂	ナゲ	ハケ+ナゲ	暗褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗茶褐色	
		R-1-1	964	943	V	小型深鉢	網目	○	○	○		砂粒を含む	ナゲ	ハケ+ナゲ	茶褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗茶褐色	
		R-1-1	2142	944	V	小型深鉢	網目下半	○	○	○		砂粒を含む	ヨコヤエ+ナゲ	ヨコハケ+ナゲ	茶褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗茶褐色	底面との接合部現れ
		R-1-1	2142	944	V												

塞ノ神B d式土器・小型深鉢

種別 番号	報告 番号	出土 区	記注 番号	実測図 番号	縦 幅	横 幅	部位	地 土				外表面 調整	内部面 調整	色 調		備考	
								石英	鉄石	角閃石	クロラント	砂糖		外表面 調整	内部面 調整		
	59	P-1-4	674		V												
	59	P-1-4	687		V												
	59	P-1-4	2255	949	V	小型深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ+ナゲ	ヨコハケ+ナゲ	暗茶褐色 暗褐色	茶褐色	口徑3.0cm
	59	P-1-4	2359		V												
	60	P-1-4	2618		V												
	60	P-1-4	2352	953	V	小型深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ+ナゲ	ヨコハケ+ナゲ	茶褐色~黃白色	黃白色~暗茶褐色	口徑3.4cm
	61	R-1-1	2258		V												
	61	R-1-1	1432	946	V	小型深鉢	網目	○	○	○		砂糖・鐵砂	ヨコハケ+ナゲ	ヨコハケ+ナゲ	茶褐色~黃白色	黃白色~暗茶褐色	網部徑3.4cm
	61	R-1-1	1436		V												
	62	Q-1-4	458	949	V	小型深鉢	網目	○	○	○		砂糖・鐵砂	ヨコハケ+ナゲ	ヨコハケ+ナゲ	茶褐色~暗茶褐色	茶褐色~暗茶褐色	網部徑3.5cm
	63	P-1-1	234	345	V	小型深鉢	網目下半	○	○	○		砂糖・鐵砂	ナゲ	ハケ+ナゲ	暗褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗茶褐色	
	64	R-1-1	964	943	V	小型深鉢	網目	○	○	○		砂粒を含む	ナゲ	ハケ+ナゲ	茶褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗茶褐色	
	65	P-1-1	2142	944	V	小型深鉢	網目下半	○	○	○		砂粒を含む	ヨコヤエ+ナゲ	ヨコハケ+ナゲ	茶褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗茶褐色	底面との接合部現れ

⑥ 第6群 苦浜式土器（第86図～第98図）

苦浜式土器は、器形からみて平底の底部で、胴部が膨らみ頸部はゆるくしまり口縁部が外反するものと口縁部がバケツ状に直線的に外反するもの、口縁部が内湾気味に立ち上がるるものに分けられる。また、文様構成でもコブ状の突起および突帯を有するものと有しないものに大きく分けられる。

1～18は、コブ状の突起及び突帯を有するものである。1は、復元口縁径32.2cmを測る。ゆるくしまった頸部から口縁部は外反するものである。また、波状口縁を呈し、頂部の位置に縱位のコブ状突起を3条、その下位に横位のコブ状突起を2段有している。器面には浅い条線（直線）と押引文が施されるが、浅いため明瞭ではない。2も縱位のコブ状突起を3条有するものである。3は口縁部下位の部分と思われるが、横位のコブ状突起とその下に3条の縱位のコブ状突帯を貼り付けるものである。突起には貝殻による刻目が施されている。4は、復元口縁径39cmを測るもので、胴部から口縁部へ直線的に外反するバケツ状を呈する。口唇部は平坦で、貝殻復縁による刻み目を施す。器面全体に貝殻による条線を横位・斜位に施すものである。また、口縁部には長さ約8cmのコブ状突起を2条1対で貼り付ける。突起には口唇部と同様の刻目を施す。口縁下位に補修孔と思われる穿孔が認められる。穿孔は両面からの円穿孔である。5は復元口縁径29cmを測るもので、口縁部はわずかに外反する。口縁部から胴部にかけて突帯を縱位に施すものであるが⁴、1条の突帯を口縁部の位置で逆U字状に折り曲げてあり2条の突帯のように見えるものである。6は2条のコブ状突起を有する口縁部である。7は縱位のコブ状突起、8～10は、縱位・横位のコブ状突起を有する。11は復元口縁径25cmを測るもので、口縁部が波状を呈し、その頂部に横位の短いコブ状突起、その下に縱位の突起を有するものであるが⁵、2箇所か4箇所かについては不明である。胴部には貝殻復縁による条線文を格子目状に施すものである。12も横位・縱位のコブ状突起を有するものである。13は復元口縁径30cmを測る。口縁部は波状を呈し、頂部の位置に十字になるように縱位・横位のコブ状突起を有する。口縁

端部には貝殻復縁による刺突文、胴部には波状・直線の条線文を施すものである。14は、復元口縁径15.7cmを測るもので、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。器形がいびつなものであるが⁶、口縁部は波状を呈し頂部に縱位のコブ状突起を有する。胴部には貝殻復縁による波状を呈する押引文と条線文（直線）を施す。15は復元口縁径35.4cmを測る。口縁部は直線的に外反し、頸部はゆるやかにしまるものである。口縁部は波状を呈し、頂部の位置に横位のコブ状突起を3段に有する。胴部には貝殻復縁による刺突文と条線文（直線）を交互に施すものである。16は口縁部およびその下に横位のコブ状突起を有し、口辺部には貝殻押引文、胴部には条線文（直線）を施すものである。17～20はコブ状突起を有するものである。21～47はコブ状の突起および突帯を有しないものである。胴部には、貝殻復縁による押引文・条線文（波状・直線）・刺突文等を施す。24は復元口縁径27cmを測り、口縁部がわずかに内湾するものである。胴部には貝殻復縁により波状および直線の押引文を施す。26は口縁端部に貝殻復縁による刺突文、胴部には条線文（大きな波状文・こまやかな波状文・直線文）を施すものである。27は口縁部下位に貝殻復縁による条線文（波状）を施し、胴部は条線文状の貝殻条痕を器面全体に斜位に施すものである。28は頸部がゆるやかにしまるものである。胴部上位には貝殻復縁による条線文（波状）を施し、下位には直線の条線文を格子目状に施すものである。29は胴部に直線の条線文を斜位及び横位に施すものである。30～40は胴部破片であるが⁷、貝殻復縁による押引文、条線文（直線・波状）、刺突文を施すものである。41は、復元口縁径29.6cmを測る。波状口縁を呈し、口辺部には貝殻復縁による刻目様の押引文を巡らし、胴部には浅い条線が施される。42は胴部に貝殻復縁による直線の条線文と波状の条線文を交互に施すものである。43は平底の底部から胴部はあまり膨らまないものである。復元底部径14.4cmを測る。胴部上位には波状の条線文、下位には直線の条線文を施す。44～46はいずれも平底の底部である。復元底部径は44が11cm、45が8.8cm、46が8.4cmを測る。47は復元口縁径31.2cm、器高41cm、底部径

11.6cmを測る。平底の底部から胴部はあまり膨らまずに立ち上がり、ややしまった頭部から口縁部はゆるやかに外反するものである。

胴部には器面全体に弧状の条線文を奔放に施してある。

苦浜式土器観察表 No.1

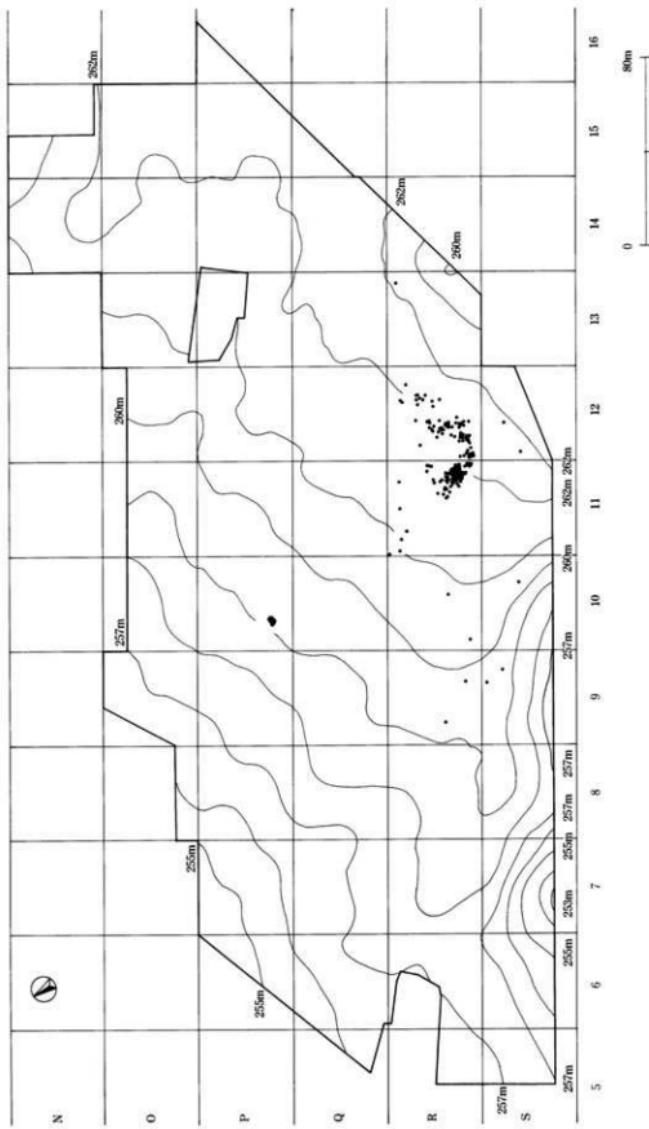
調査 番号	種類 番号	出土法	底足 番号	縁	腹縁	縁柱	地 土				外壁面 調 査	内壁面 調 査	色 調		備 考
							石英	長石	角閃石	クロウンモ			外底面 調 査	内底面 調 査	
Ⅲ	1	R-12	206	V1	直縁	口縁一列目	○	○	○				黄褐色	灰黑色	褐色(2回)・黒色(3回)のコブ状斑紋 貝物表面による神似文
	2	R-12	204	V1	直縁	斜縁	○	○	○		○	黄褐色	灰黑色	黄褐色	褐色(3回)のコブ状斑紋
	3	R-12	199	V1	直縁	斜縁	○	○			黄褐色	灰黑色	灰黑色	褐色(2回)のコブ状斑紋	
Ⅳ	4	R-11	2107	V1	直縁	口縁一列目	○	○	○		黄褐色	灰黑色	黄褐色	褐色(2回)・黒色(3回)のコブ状斑紋 貝物表面による神似文	褐色(2回)のコブ状斑紋
			2102												
			2096												
			2054												
			2103												
			2115												
			1438												
			1439												
			1475												
			1487												
			2006												
			2454												
Ⅴ	5	R-12	2051	V1	直縁	口縁一列目	○	○	○		黄褐色	灰黑色	黄褐色	褐色(2回)のコブ状斑紋	褐色(2回)のコブ状斑紋
			2105												
			2106												
Ⅵ	6	R-12	2461	V1	直縁	斜縁	○	○	○		黄褐色	灰黑色	黄褐色	褐色(2回)のコブ状斑紋	褐色(2回)のコブ状斑紋
			2090												
			2072												
Ⅶ	7	R-12	2079	V1	直縁	斜縁	○	○	○		黄褐色	灰黑色	黄褐色	褐色(2回)のコブ状斑紋	褐色(2回)のコブ状斑紋
			2108												
			2077												
Ⅷ	8	R-12	2065	V1	直縁	斜縁	○	○	○		黄褐色	灰黑色	黄褐色	褐色(2回)のコブ状斑紋	褐色(2回)のコブ状斑紋
			2066												
			2106												
Ⅸ	9	R-12	2078	V1	直縁	斜縁	○	○	○		黄褐色	灰黑色	黄褐色	褐色(2回)のコブ状斑紋	褐色(2回)のコブ状斑紋
			2085												
			2108												
Ⅹ	10	R-12	2082	V1	直縁	斜縁	○	○	○		黄褐色	灰黑色	黄褐色	褐色(2回)のコブ状斑紋	褐色(2回)のコブ状斑紋
			2083												
			2109												

苦浜式土器観察表 No.2

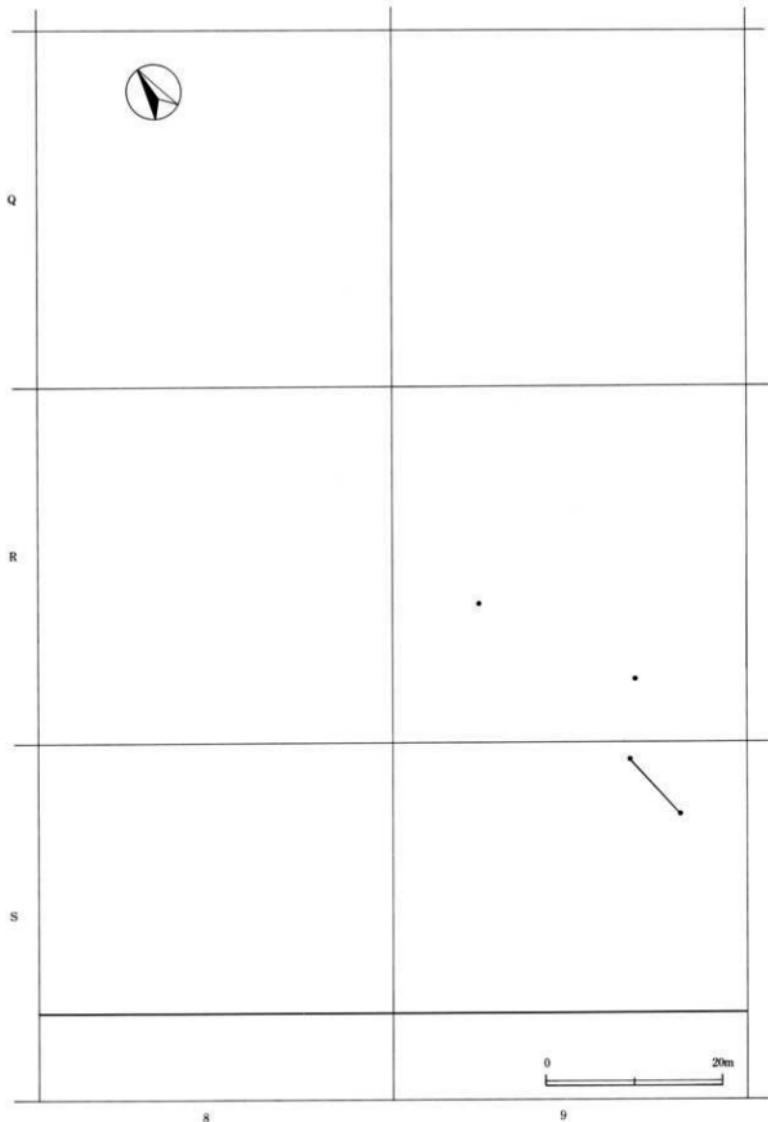
件番 番号	報告 番号	出土場 所名	行 基 年	標 様	標 印	土				外觀面 石英	内觀面 腐 殖	色 調	備 考	
						石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫				
國 國	8	R-11	3106	V1	深鉢	口縁部	○	○			貝殻多様	ヘラ削り	黒茶褐色	暗茶褐色
	9	R-11	3110	V1	深鉢	口縁部	○	○	○		貝殻多様	ヘラ削り	赤茶褐色	暗褐色
	10	R-11	3173	V1	深鉢	口縁部	○	○	○		貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
	11	R-12	171 190 216 239 269 354	V1	深鉢	口縁部	○	○	○		貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
國 國	12	R-12	882 887 905 906 907 913 917 967	V1	深鉢	口縁～側面	○	○	○		貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
	13	R-11	1879 1897 1908 1914 2492	V1	深鉢	口縁～側面	○	○	○		貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
	14	P-10	301 303 304 308 310 311 315 317 318 319 321 322 323 325 328	V1	深鉢	口縁～側面 ～底面近く	○	○			貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
	15	R-12	42 44 46 91 92 93 95 96 213	V1	深鉢	口縁～側面	○	○			貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
國 國	16	R-12	45	V1	深鉢	口縁	○	○	○		貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
	17	R-12	690	V1	深鉢	口縁	○	○	○		貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
	18	S-12	20	V1	深鉢	口縁	○	○	○		貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
	19	R-12	714	V1	深鉢	側面	○	○	○		貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
國 國	20	R-12	763	V1	深鉢	側面	○	○	○	○	貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
	21	R-12	883	V1	深鉢	口縁	○	○	○		貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
	22	R-11	1839	V1	深鉢	口縁	○	○	○		貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
	23	R-12	647	V1	深鉢	口縁	○	○	○		貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
國 國	24	R-12	702 1017	V1	深鉢	口縁	○	○			貝殻多様	ヘラ削り	茶褐色	暗褐色
													暗褐色	

苦浜式土器観察表 No.3

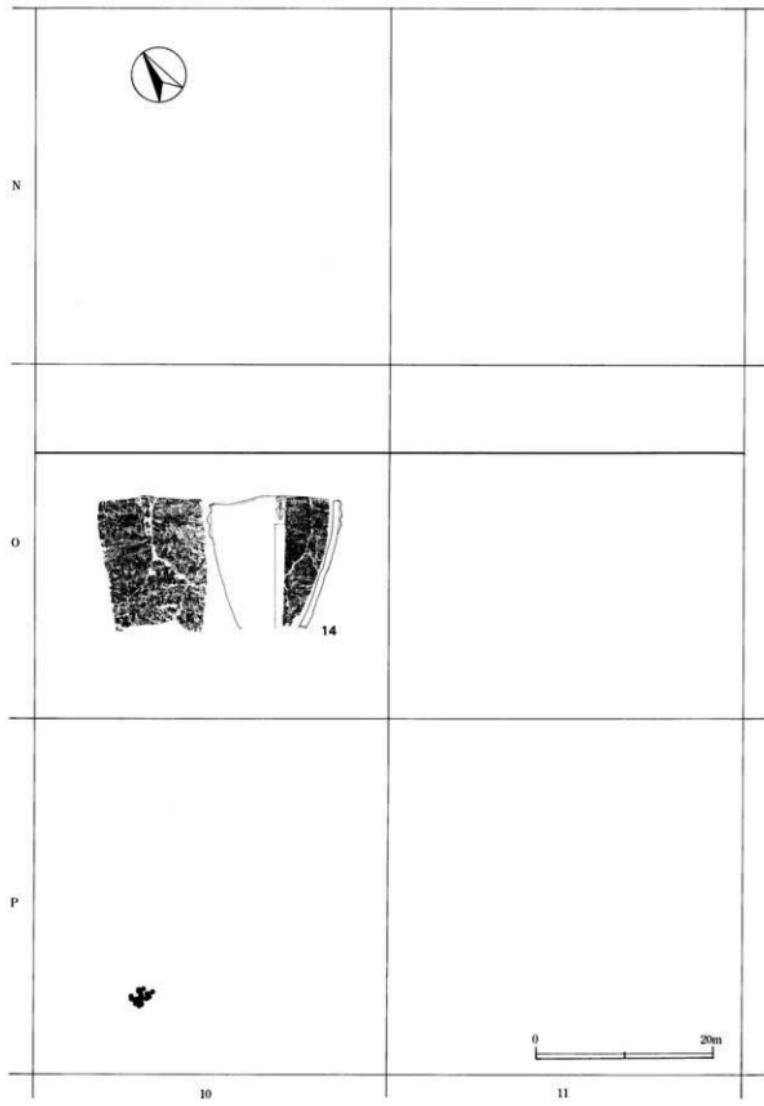
種別 番号	報告 番号	出土区	注記	層	器種	部位	地 土			外表面 調査	内表面 調査	色 質		圖 考					
							石英	長石	英開石	クロウンセ		外表面	内表面						
第 1群	25	R-11	1881 1884 2506	VI	深鉢	口縁	○	○	○		貝殻条板	へラ削り	淡茶褐色	淡茶褐色	貝殻条板(底状・直線)、刺突文				
			1919 1912				○	○	○				淡茶褐色	淡茶褐色	貝殻条板、押引文				
	27	R-12	362 584 559 645 967 975	VI	深鉢	側部					貝殻条板	へラ削り	茶褐色	茶褐色	貝殻押引文、貝殻条板(横子目状)				
			22 25 29 33 39 40 45 47				○	○	○				茶褐色	茶褐色	貝殻条板(横子目状)				
			29 30 31 32				2175 2433 161 726 1883	VI	深鉢	側部	○	○	○	○	貝殻条板 貝殻条板 貝殻条板 貝殻条板	へラ削り へラ削り へラ削り へラ削り	淡茶褐色 淡茶褐色 淡茶褐色 茶褐色	茶褐色 茶褐色 茶褐色 茶褐色	貝殻条板(底状・直線) 貝殻条板(底状) 貝殻条板 貝殻条板押引文
			33 34 35 36 37 38				160 1968 151 685 936 Q-11	VI	深鉢	側部	○	○	○	○	貝殻条板 貝殻条板 貝殻条板 貝殻条板 貝殻条板 貝殻条板	へラ削り へラ削り へラ削り へラ削り へラ削り へラ削り	淡茶褐色 淡茶褐色 淡茶褐色 茶褐色 茶褐色 茶褐色	茶褐色 茶褐色 茶褐色 茶褐色 茶褐色 茶褐色	貝殻条板(底状) 貝殻条板(底状) 貝殻条板 貝殻条板 貝殻条板 貝殻条板
			39 40 41 42 43 44 45 47				12059 120 268 270 299 371 378 549 556 588 997 1000 1013 1014 1016 2012 2120 2126 2132 2135 2137 2148 2166 2157 2441 125 128 396 779 45 99 250 254 491	VI	深鉢	口縁	○	○	○		貝殻条板	へラ削り	淡茶褐色	淡茶褐色	貝殻条板、貝殻押引文
第 2群	40	R-12	270 299 371 378 549 556 588	VI	深鉢	側部	○	○	○		茶褐色	茶褐色	貝殻条板(底状) 貝殻条板 貝殻条板 貝殻条板 貝殻条板 貝殻条板						
			997 1000 1013 1014 1016				○	○	○		明茶褐色	茶褐色	貝殻文(貝殻押引文と直線文を交互に施す)						
			2012 2120 2126 2132 2135 2137 2148 2166 2157 2441				○	○	○		茶褐色	茶褐色	貝殻文(上位に直線押引文、下位に直線文)						
			125 128				底部	○	○				明茶褐色	茶褐色					
			396 779				底部	○	○				明茶褐色	茶褐色	粘土結晶み上げの痕跡が明瞭				
第 3群	41	R-12	45 99 250 254 491	VI	深鉢	側部～底部	○	○	○		貝殻条板	へラ削り	明茶褐色	茶褐色	貝殻文(底状に貝殻押引文と直線文を交互に施す)				
			47				口縁～底部	○	○	○			明茶褐色	茶褐色					



第86図 呂沃式土器出土状況全體図



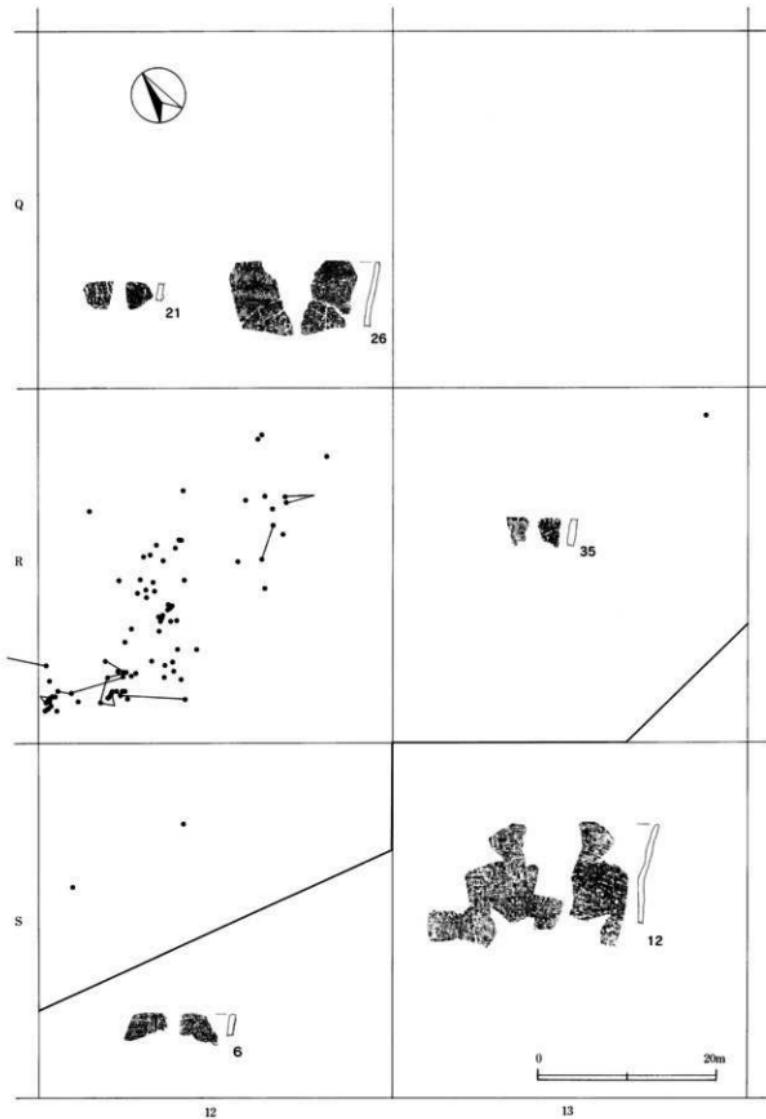
第87図 苦浜式土器出土状況図1 (Q・R・S - 8・9区)



第88図 苦浜式土器出土状況図2 (N・O・P-10・11区)



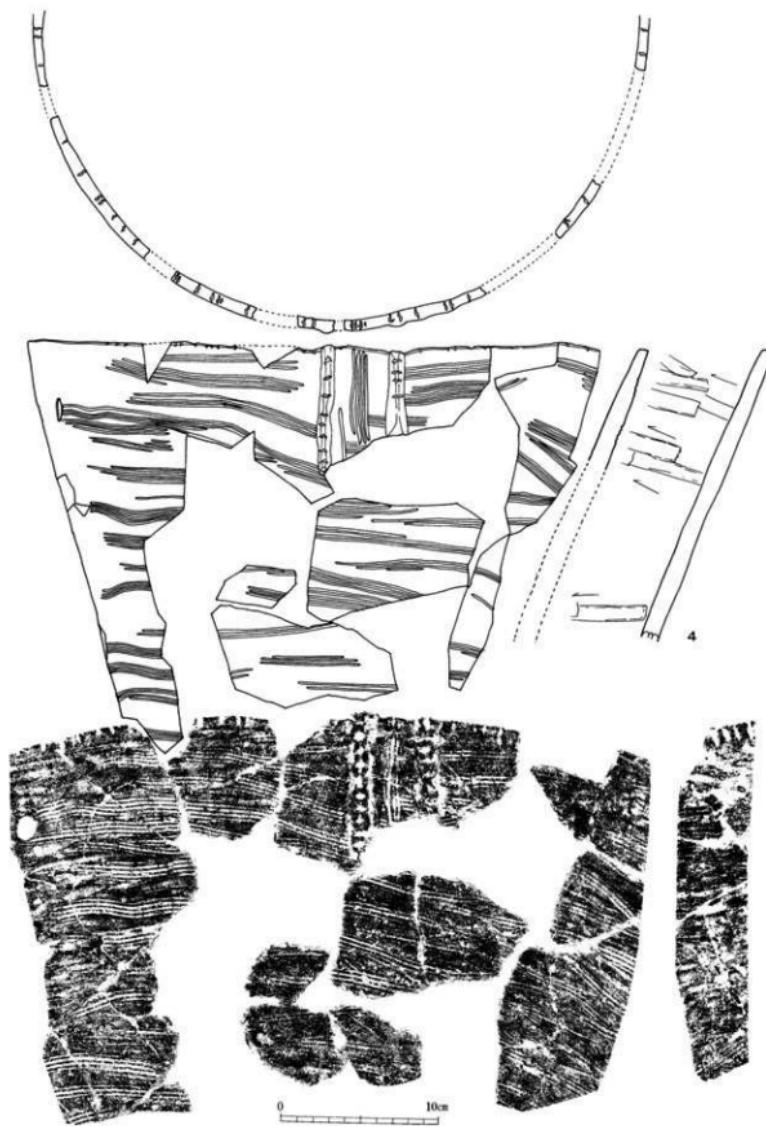
第89図 苦浜式土器出土状況図3 (Q・R・S - 10・11区)



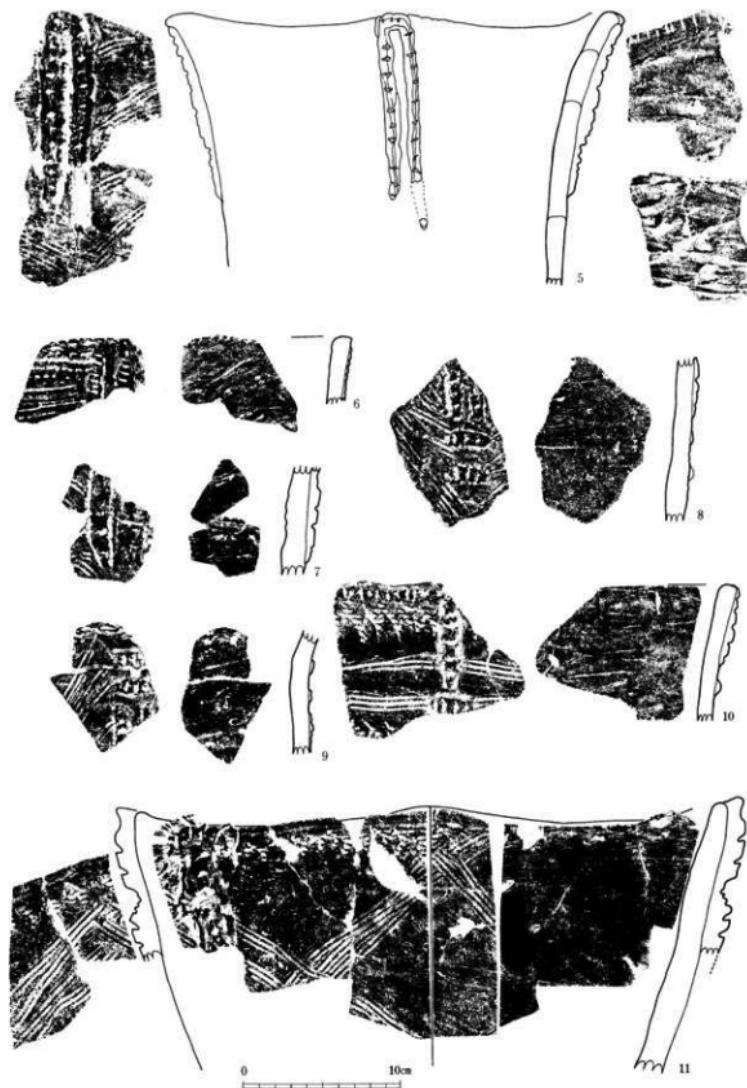
第90図 苦浜式土器出土状況図 4 (Q・R・S - 12・13区)



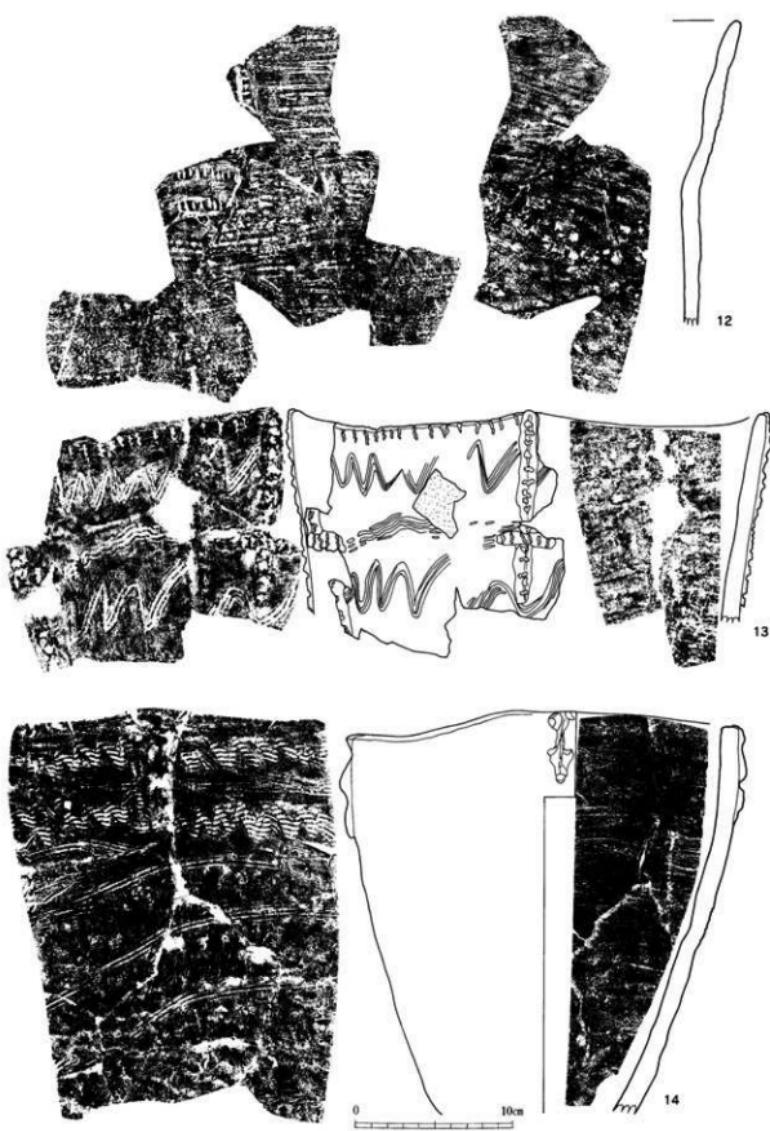
第91図 苦浜式土器実測図 1



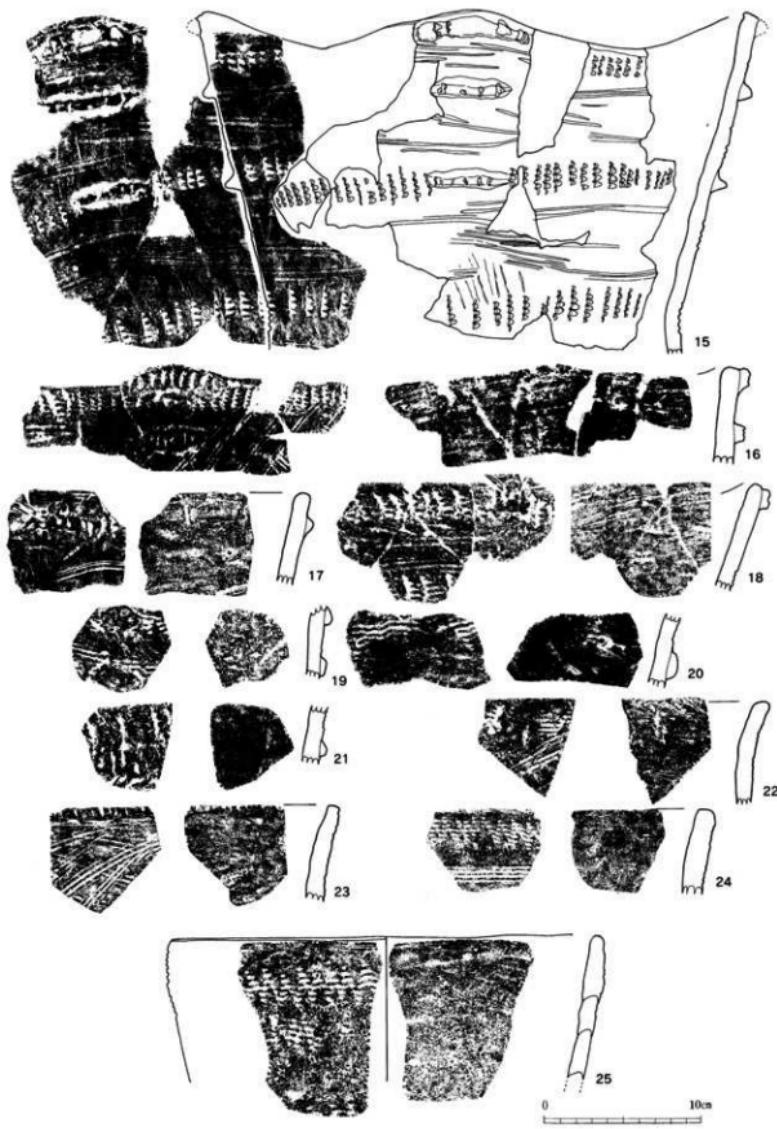
第92図 苦浜式土器実測図 2



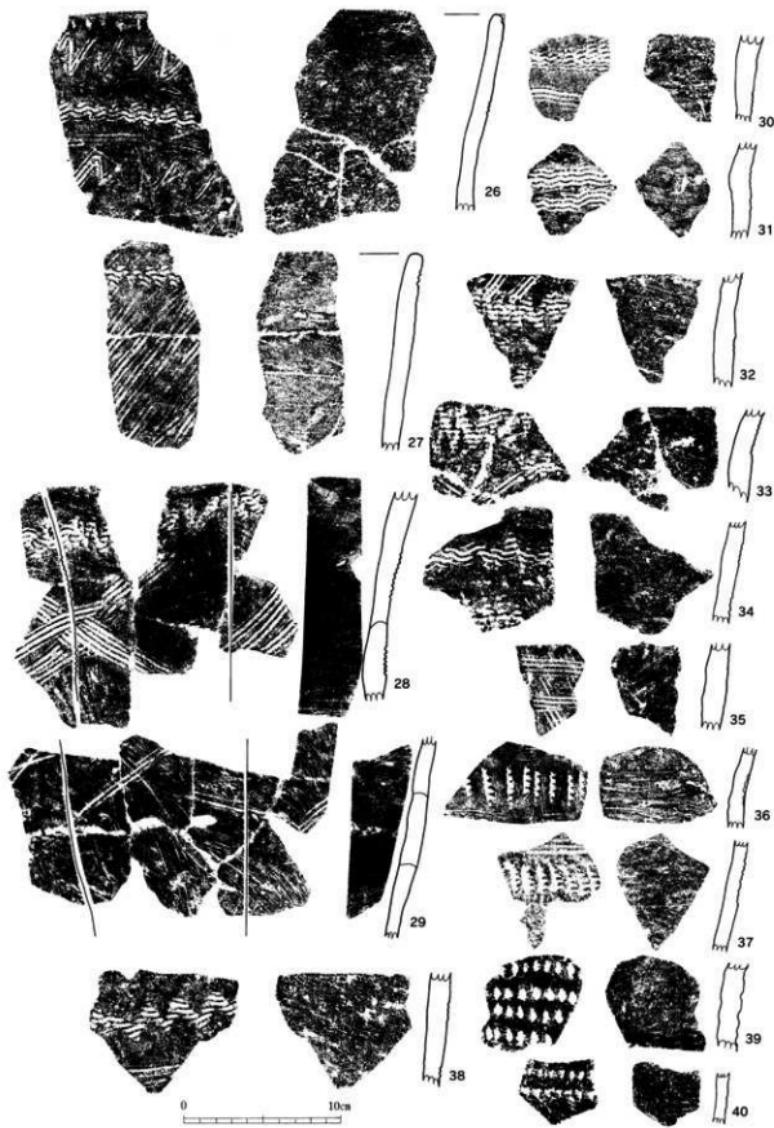
第93図 苦浜式土器実測図 3



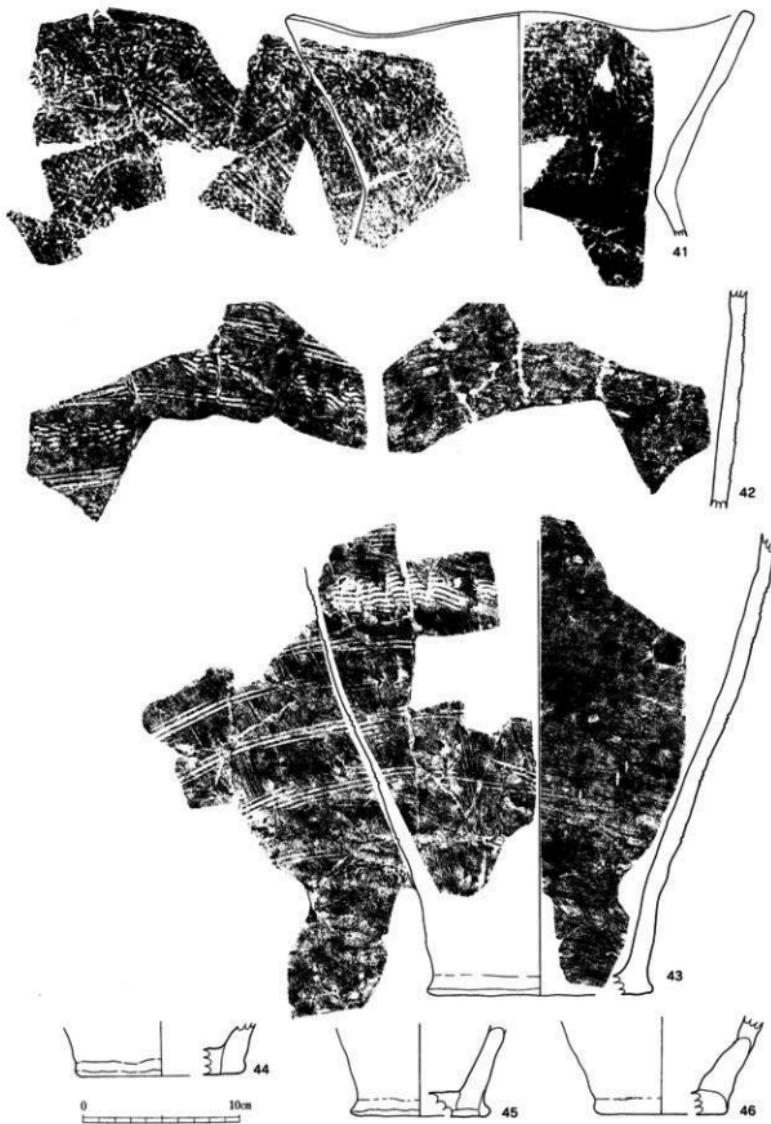
第94図 苦浜式土器実測図 4



第95図 苦浜式土器実測図 5

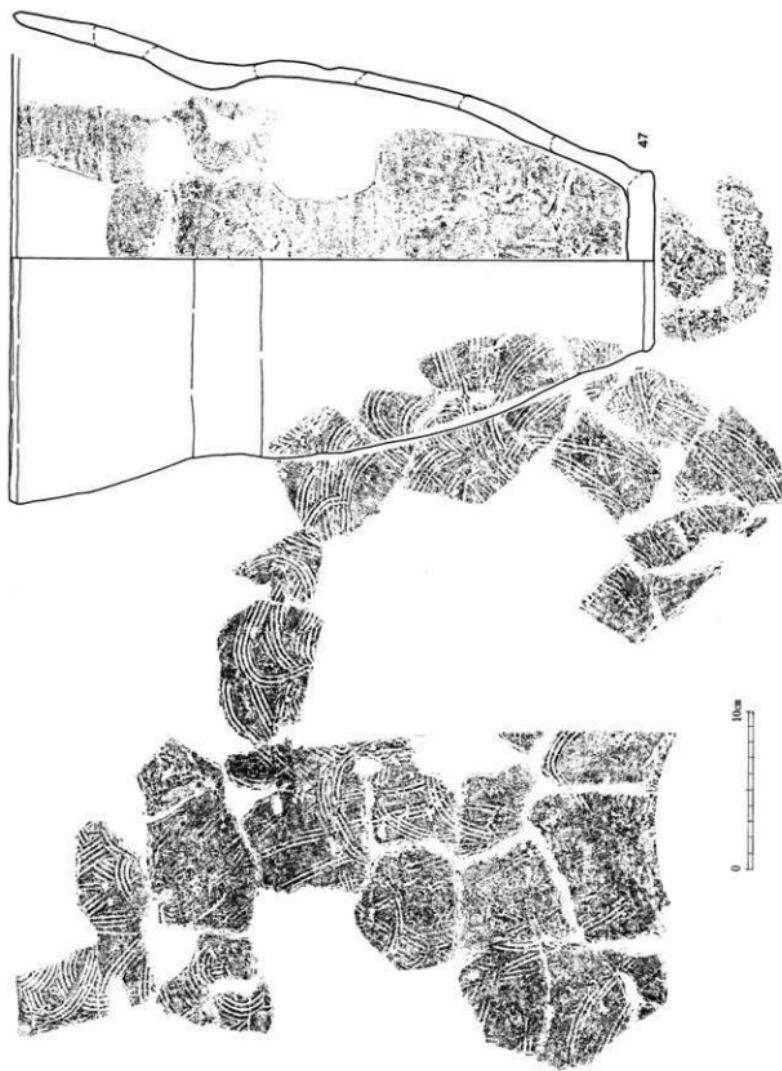


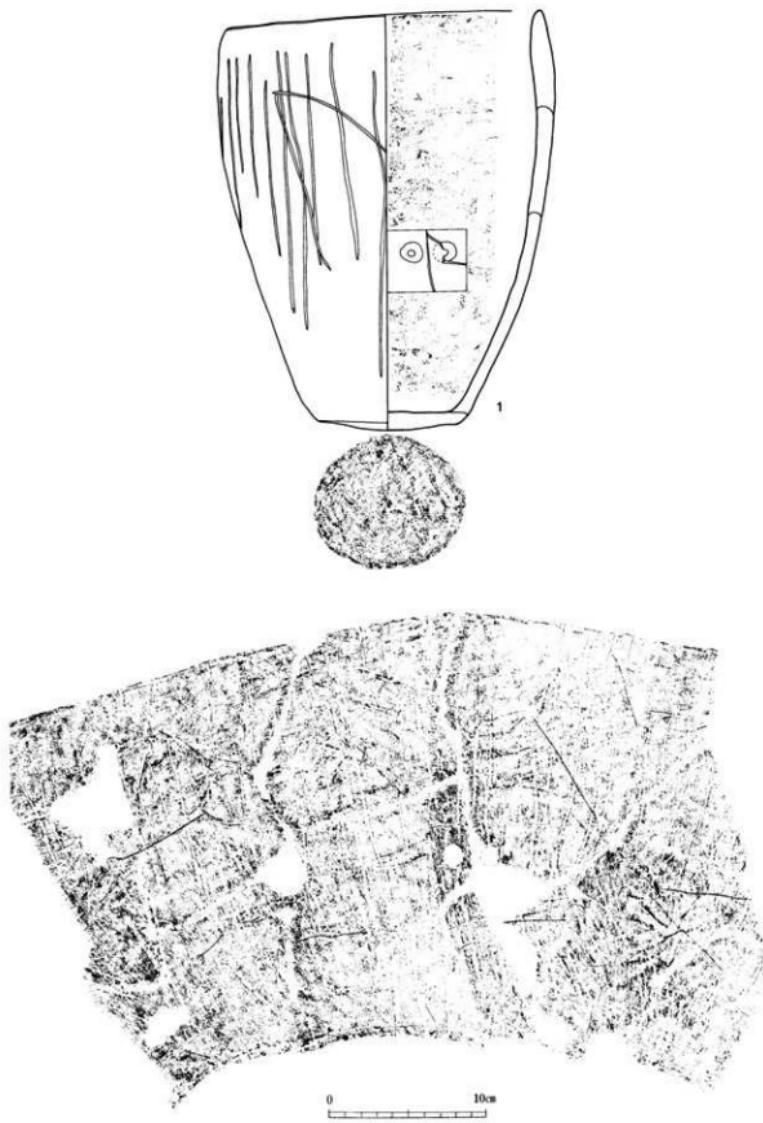
第96図 苦浜式土器実測図 6



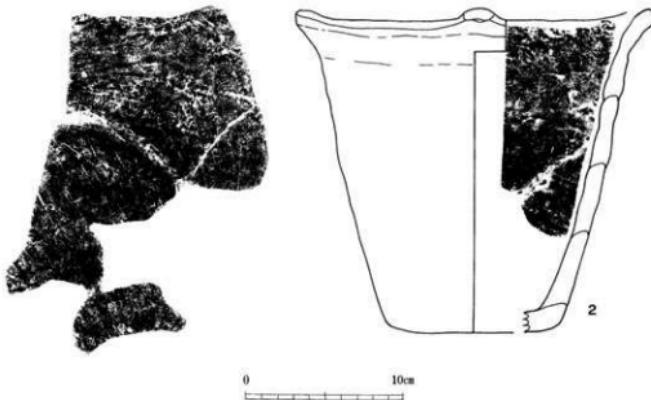
第97図 苦浜式土器実測図 7

第98圖 茅浜式土器実測図 8





第99図 型式不明土器実測図 1



第100図 型式不明土器実測図2

型式不明土器観察表

件 番 号	報告 番号	出土所	登記 番号	種 類	部位	地 土			外表面 調 査		内表面 調 査		色 調	備 考
						石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂礫	外表面	内表面		
第 1	1	Q-13	1944 1960 4462	Ⅴ	深鉢 口縁～底部	○	○	○		○	ヘラ削り の後ナデ	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色 複方向の波線文 鋸歯や位に1枚の補修孔 口縁部付近にスス材着
	2	Q-9	761 3353 3354 3551	Ⅵ	深鉢 口縁～底部	○	○	○		○	ヘラ削り の後ナデ	ヘラ削り	茶褐色	茶褐色 波状口縁部 黒文

型式不明の土器

上野原遺跡の第10地点における绳文時代早期の土器は、早期中葉から後葉まで22類に分類することができた。しかしながら、そのどこにもあてはまらない土器が2点ある。ここでは、無理に型式にあてはめないで型式不明の土器として取り扱うこととした。

1は、口縁径19.8cm、底部径9.2cm、器高26cmを測る深鉢形土器である。底部は平底であるが、底面がやや丸みを帯びているため座りがよくない。脇部はあまり膨らまず、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はすばまるものである。また、口唇部はわずかな平坦面を有する。外面には浅くて不規則な縱方向

の沈線文を施す。また、口縁部付近にススの付着が顕著に認められる。脇部には補修孔と思われる穿孔が1対対なっているが、中心よりやや下位に穿孔があるため煮炊きには使用することは不可能と思われる。当初は煮炊きに使用されていたものであろうが、補修後は堅果類等の貯蔵用として利用されたのではないだろうか。

2は復元口縁径22.6cm、器高20.3cmを測る深鉢形土器である。平底の底部から直線的に立ち上がり、口縁部は外反するものである。口縁部は突起を有し波状口縁状を呈している。外面は無文で荒いヘラ削り調整の後、一部ナデ調整を施しているのみである。

⑥ 小結

上野原遺跡第10地点の発掘調査では、縄文時代早期の時期の土器は、層位的に把握することはできなかつた。しかしながら、早期後葉後半期の土器についても、各型式間には器形的特徴にも施文的特徴にも違いがある。さらには出土分布の状況にも明瞭な差が認められた。このことなどから、ここまで分類したタイプが時間差を示すと仮定して、型式組列を考えることにする。

⑥-1 第1群について

この項では、塞ノ神式土器様式とした第1群から第5群のうち、特に第1群に属する土器について若干の考察を記す。

南九州縄文早期土器編年において、「平柄式土器」から「塞ノ神Aa式土器」へという変遷が考えられている。深鉢形土器について、この型式の変化を属性の変化で置き換えると以下のような。

- 1) 口縁肥厚帯が消滅する。
- 2) 口縁部内面と胴部内面との境の屈曲が明瞭になり、棱線ができる。
- 3) 口縁部文様が、沈線文と刺突連点文とで文様が構成される土器から、沈線文のみで文様が構成される土器へ。
- 4) 胴部文様が「結節縄文」から「網目撲糸文」へ。

以上、4点の属性変化が主に考えられる。

さて第1群に属する深鉢形土器は、從来、塞ノ神式土器様式に属する諸型式の土器として分類されてきた土器である。しかし、上野原遺跡第10地点の調査では約400点の土器片が、第1群に属する土器として抽出できた。しかも下記に示すように、さらに類型化できるタイプともいえる、一定の確まりをもつた土器群として認識できたことが成果であった。

A 口縁形態が緩やかな波状口縁もしくは平口縁を呈し、口縁中央部でいくぶんか屈曲する。口縁屈曲部上位には沈線文と刺突連点文とで文様を構成し、口縁屈曲部下位には微隆帯文を施す。胴部には「結節文」を施す土器である（1類土器）。

なお、微隆帯文を口縁部（上位）に施す土器の中には、口縁部下位を削り取ることで見かけの口

縁部肥厚帯を作出する土器がある（5～8）。

B 口縁形態がほぼ平口縁を呈し、口縁中央部で屈曲し立ち上がる。口縁屈曲部外面の棱線が不明瞭な土器群（2類土器）と、口縁屈曲部外面の棱線は明瞭であるが口縁屈曲部内面の棱線が不明瞭な土器群（3類土器）とがある。口縁屈曲部上位には沈線文と刺突連点文とで文様を構成し、口縁屈曲部下位には微隆帯文を施す施文的特徴を持つ。

C 口縁形態はほぼ波状口縁を呈し、口縁中央部で強く屈曲し立ち上がる。屈曲部内面の棱線が明瞭になる。波頂部の口唇端部を外側に張り出させると共に、口縁屈曲部に瘤状突起を貼付する。施文的特徴はBと同様の土器である（4類土器）。

D Cとほぼ同様の器形を呈し、胴部には縱位方向に網目撲糸文を施す土器である（5類土器）。

という類型化が、深鉢形土器についてできた。

このように類型化できた深鉢形土器の主な特徴を、先に1～4で挙げた属性変化に合わせて並べると、

$$(A) \rightarrow (B) \rightarrow (C) \rightarrow (D)$$

という型式組列を考えることができる。

この変遷については、(A) タイプの中に平柄式土器の特徴を色濃く残した土器を含んでいることや、(E) タイプの土器の中に塞ノ神Aa式土器の特徴が見えつつあることから、深鉢形土器に関するこのタイプの型式変遷は概ね妥当であると考える。

一方、壺形土器とした土器は、志布志町に所在する別府（石踊）遺跡でVI類土器に分類されたのが初出である。以来、新東見一編年では「界子仏式土器」に分類された土器でもある。

壺形土器に分類した土器には長頸壺と無頭壺がある。この器形的特徴は、「平柄式土器」（本報告では平柄C類土器）でもいえることであり、両者の土器が型式的に近い関係にあるといえる。

最後に壺形土器の出土状況（第4図～第9図）を検討すると、第1群においても壺形土器の出土状況は深鉢形土器の出土状況と全く同様であることがわかる。このことは壺形土器そのものが、当時の人々にとって何らかの祭祀的行事に用いる特別の存在であったと、解釈することは困難であり、深鉢形土器とは用途を異にしてセットで用いた土器であろう。

⑧-2 塞ノ神式土器様式まとめ

この項では、次頁に示す上野原遺跡第10地点繩文早期後葉後半土器編年表を基に、各時期を概観するところとなる。

【XⅢ期】

第1群（塞ノ神・微隆帶文土器）に分類した土器を基準とする時期である。器形的・施文的特徴の類似性から、平桙C類土器（平桙式土器）に後続する時期の所産と考えられる。

平桙C類土器（平桙式土器）期より、土器の出土が希薄な区域が狭まり、東側では出土集中区域との差が不明瞭となる。しかし、R-11・12区南側と、S-11・12区での出土量が少ないことは、当該期の人々が“広場”的意識を持ち続けていたと解釈できる。

【XⅣ期】

第2群（塞ノ神Aa式土器）に分類した土器を基準とする時期である。器形的・施文的特徴の類似性から、微隆帶文土器に後続する時期の所産と考えられる土器群を位置づけた。出土量が多く、繩文早期後葉後半の時期では、ピークの時期の1つである。

微隆帶文土器期より、さらに東側で出土集中区域と出土希薄域との差が無くなり、土器の出土が希薄な区域に対する意識がなくなる時期といえる。

また、新たにP・Q・R-14区からP・Q-15区での土器集中が見られる時期である。当該期の人々が“場の機能”に対する意識を変化させはじめた時期であると、解釈できる。

【XV期】

第3群（塞ノ神Ab式土器）に分類した土器を基準とする時期である。土器が出土する地点は点々と点在する状況であり、全体図を見ても極めて単発的な出上である。したがって、上野原遺跡第10地点では非常に小規模な生活が行われていたと解釈できる。

【XVI期】

第4群（塞ノ神Bc式土器）に分類した土器を基準とする時期である。出土地点がR-8・9区に限定され、出土個体数が2個体と少ないので特徴である。この時期に上野原遺跡第10地点では、人々はほとんど生活を行っていないかったと考えられる。

【XVII期】

第5群（塞ノ神Bd式土器）から苦浜式土器に分類した土器を基準とする時期である。ともにR-11区南側からR-12区南側にかけての区域を遺物集中地点とすることからⅠ期としてまとめた。

この期は、第5群全体で約900点にのぼる土器が出土したことが確認できたことから、早期後葉後半段階では上野原遺跡第10地点における人々の生活が、ピークを迎える時期の1つであると解釈できる。

ところで、P・Q・R-14区に遺物が集中して出土している状況が見られることから、この区域の南側や東側に続く発掘区域外にも生活域が拡がることが予想できる。

さてこの期に土器が集中して出土する、R-11区南側からR-12区南側にかけての区域は、手向山式土器期（第4分冊第102図参照）から妙見式土器期（第5分冊第17図参照）・天道ヶ尾式土器期（第5分冊第52図参照）、そして平桙A類土器期（第5分冊第91図参照）・平桙C類土器期（第5分冊第163図参照）を経て、塞ノ神・微隆帶文土器期（第6分冊第3図参照）および塞ノ神Aa式土器期（第6分冊第23図参照）に至るまで、土器の出土が希薄な地域であり、その外側に拡がる土器出土集中区域との出土量の差が大きいところから、祭祀を行う“広場”として注目してきた区域である。

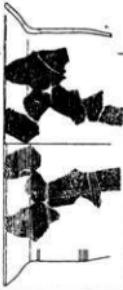
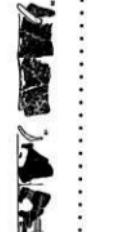
まさに、この区域に土器を残した人々は、この前段階の人々とは全く異なる意識の下に生活をする場を設定したと解釈できる。

さて、早期中葉から早期後葉前半および後半の時期にかけて、上野原遺跡第10地点で人々が、“場の機能”についてどのような意識の下に生活を送ったか、ある程度明らかにし得たと考える。

しかし、“場の機能”的内容などについては分析が未然である。また、上野原遺跡第10地点の各期に対応する、上野原遺跡他地点の様相も不明瞭である。したがって、これらの様相が明らかとなつた段階で、再度分析を行い、上野原台地で生活した人々の諸様相を明らかにする、ことが必要であろうことを提起して、土器編を閉じることとする。

	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類
大型 深 形 土 器	中型 1 類	中型 2 類	中型 4 類	小型	壺形土器
					
					
					

墨ノ神・微隆帶文土器分類表 (縮尺同一)

	1 類	2 類	3 類	4 類
大型	深 鉢	中型 影 形	中型 土 器	中型 3 類 ・小 型
				
				

塞ノ神・Aa式土器分類表（縮尺同一）

彫形土器

⑧-3 苦浜式土器について

苦浜式土器については、熊毛郡中種子町苦浜貝塚出土の土器について、調査担当者の盛園尚孝氏によって型式設定がなされたものである。そして種子島において他に6遺跡が報告され、地域性の強い土器として認識されてきた。

近年の調査によると鹿児島県内でも各地で同様の土器の出土がみられるようになり、南九州に普遍的にある土器型式としてとらえられるようになった。

苦浜式土器については、堂込秀人氏が1998年に「苦浜式土器からみた塞ノ神式土器」（九州縄文土器編年論議問題・九州縄文研究会編）において南種子町横峯C遺跡出土の土器の再検討の中で分類検討をしている。それによる苦浜式土器の設定は以下のとおりである。

1. 器形は口辺部が外反し、頭部がゆるくしまり、胴部が膨らみ平底の底部にいたるものと、頭部がゆるくしまり、口縁部が直立気味に立ち上がるものの、口縁部が内湾気味に立ち上がり、直線的に平底の底部にいたるものがある。
2. 焼成は全体的に良好であるが、胎土に砂礫をかなり含むために、剥落がよく見られる。色調は暗赤褐色や淡黄褐色を呈する。
3. 口縁部に貝殻腹縁による刻目が入る。波状口縁のものがある。
4. 文様は貝殻による条線文を施す。条線は波状を呈するものが多いが、直線のものもある。上半部に区画文を施すものもある。外側の口縁部下に、縦位あるいは横位に短突帯や瘤状突帯を施す。突帯はナデ出しているものと、貼り付けているものがあるがいずれも貝殻による刻目があり微隆である。微隆起突帯は口辺部あるいは土器の上半部分にナデ出されたり貼り付けられ、全周を巡るものと、部分的にとどまるものがある。
5. 内面調整は、ナデおよびヘラケズリである。

また、堂込秀人氏は苦浜式土器の編年的な位置付けについては、塞ノ神式土器に続く縄文時代早期末としている。

上野原遺跡においても、苦浜式土器として捉えられる土器が少なからず出土している。これらは大き

くコブ状突起（突帯）を有するものと有しないものに分類される。また、口縁部が直線的に外反しバケツ状を呈するものと、頭部でしまり口縁部が外反するものとに分けられるが、概して突起を有するものはバケツ状を呈する傾向がみられる。これらが時間差によるものか否かについては現在の段階での結論は出し得ない状況である。また、塞ノ神式土器との関連についても、器形や文様構成からみて密接な関係があることは間違いないところであろう。編年的な位置付けについては、今後の資料の増加と研究に待ちたい。

型式不明の土器については、アカホヤより下層から出土していることを考慮に入れると、縄文時代早期としての時期設定は出来よう。しかしながら、器形および文様構成等が、これまでの型式設定された土器に当てはまらないものである。今後の類例の増加に期待したい。

土 製 品 編

(2) 土製品（第101図～第112図）

① 土偶及び異形土製品（第101図～第103図）

土偶は、1点出土している。1は高さ5.5cm、幅5cm、厚さ1.5cmを測るものである。頭部と両腕を三角の突起で表現し、乳房を表した突起も認められる。ただ、片方の乳房は焼成前に剥脱しており痕跡を留めるのみである。また、胸部には横位の細い沈線が施されている。左側に9本、右側に7本の沈線が肋骨を表現している可能性も考えられるものである。背面上には製作時にいたと思われる爪の痕跡も認められる。

2は現状で分離の形をしているものであるが、欠損しているため全体の形状は不明である。厚さ2.9cmの平板なもので、前面に沈線文を施す。また、上部には穿孔を有する。土偶の一部とも考えられるが用途についても不明である。

3は高さ4.3cm、厚さ2.9cmの土製品である。瓢箪に似た形状で胴部は球形を呈するが、用途については不明である。

4・5・6は棒状土製品である。土偶の手・足の可能性も考えられるが用途は不明である。

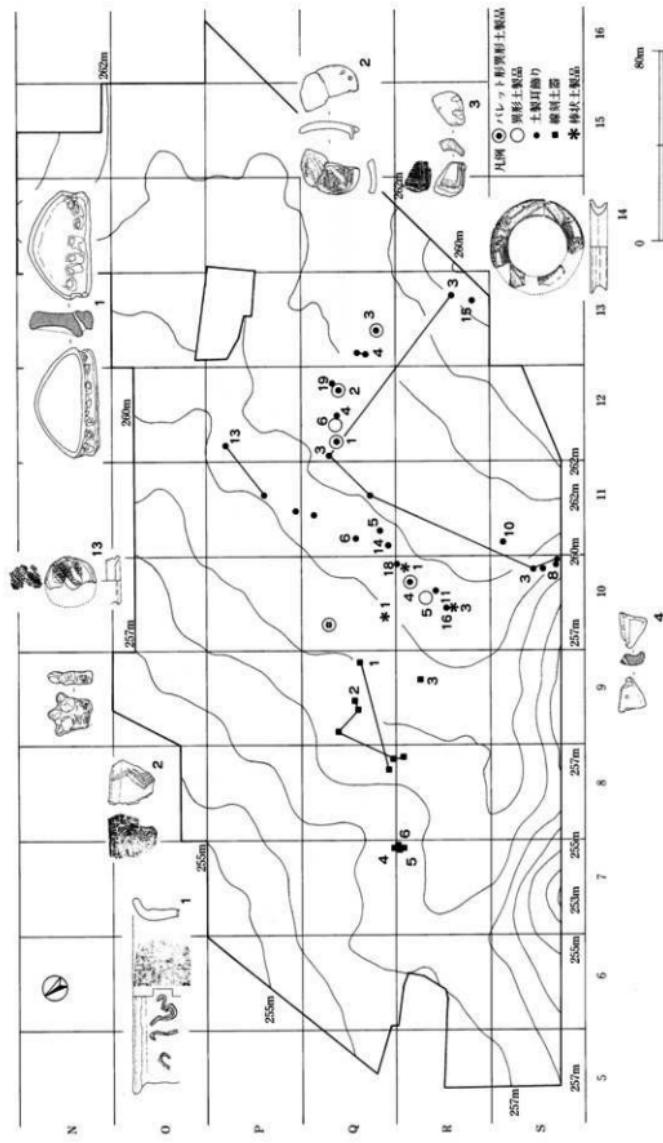
7～10も異形土製品である。7だけが完形で、8～10は破片であるが、同じ用途の土製品と思われるものである。7は、底辺13.5cm、高さ8.1cm、厚さ3.3cmを測る略三角形を呈した完形品である。上部は皿状に凹み、下位には7箇所の焼成前に穿たれたと思われる穿孔がみられる。8はやや薄手の土製品であるが、上部の皿状に凹んだ部分に沈線文と刺突連点文を施すものである。9も皿状の部分に沈線文を施すものである。

② 土製耳飾り（耳栓）（第104～第107図）

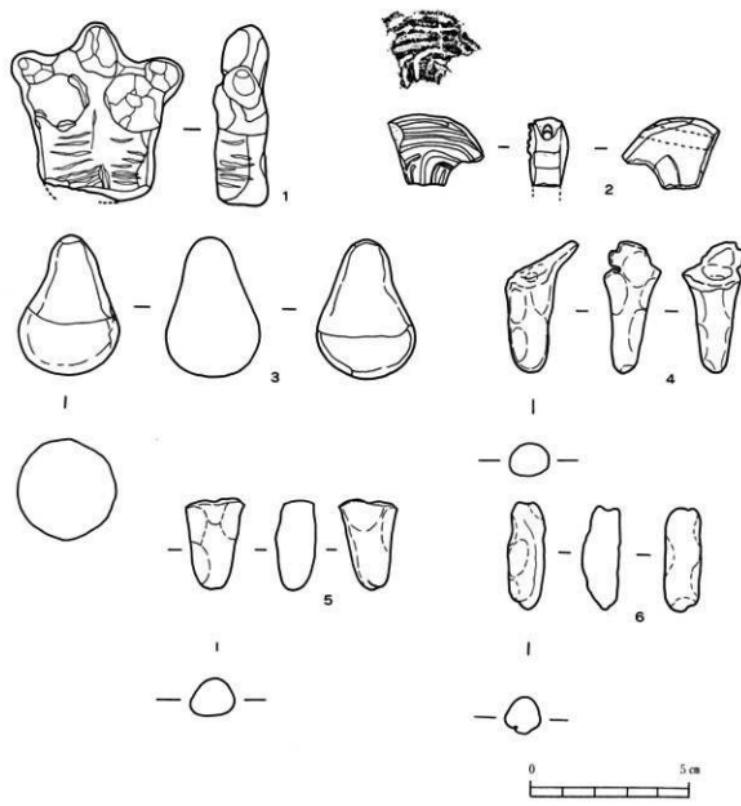
土製耳飾は、環状を呈する輪状耳栓と環状を呈さないで充填された円盤形態の白形耳栓の大きく2種類に分類される。また、表面の径と裏面の径では、ほとんどのものが表面径のほうが大きい。

I類は、輪状耳栓である（1～11）。いずれも外面には抉りを持つが、内面は後を有するものと（3・5・10）、上下2箇所に棱を有するもの（1・2・6・7・8）、丸みを帯び棱を有しないもの（4・11）に分けられる。また、10は外面があまり凹まず断面三角形を呈する。文様についてみると1・3～9は沈線文と刺突連点文を施し、2・4は無文である。1はS字状の文様で沈線内の一部に丹と思われる赤色顔料が残る。3は鍵手状文と刺突連点文の組合せで沈線内に赤色顔料（丹）が残る。5～11は沈線による直線文・曲線文と刺突連点文が施されるものである。

II類は、臼状耳栓である（12～19）。12～17は充填部分に沈線文・刺突連点文などが施されるものである。12は鋭いヘラ状施文具による細沈線文と刺突連点文が施されるが、沈線内に赤色顔料（丹）が残る。13・15～17は弧状の沈線文と刺突連点文。14は鍵手状沈線文と刺突連点文が施される。18は臼状耳栓であるが、これまでのものとは形状の異なるものである。表面径が2.9cm、中央部の径が2.1cmと小さく文様も無い粗雑な造りである。19は外面に刻みを有するやや異なった形状である。小破片のため輪状耳栓か臼状耳栓か判断出来ないものである。

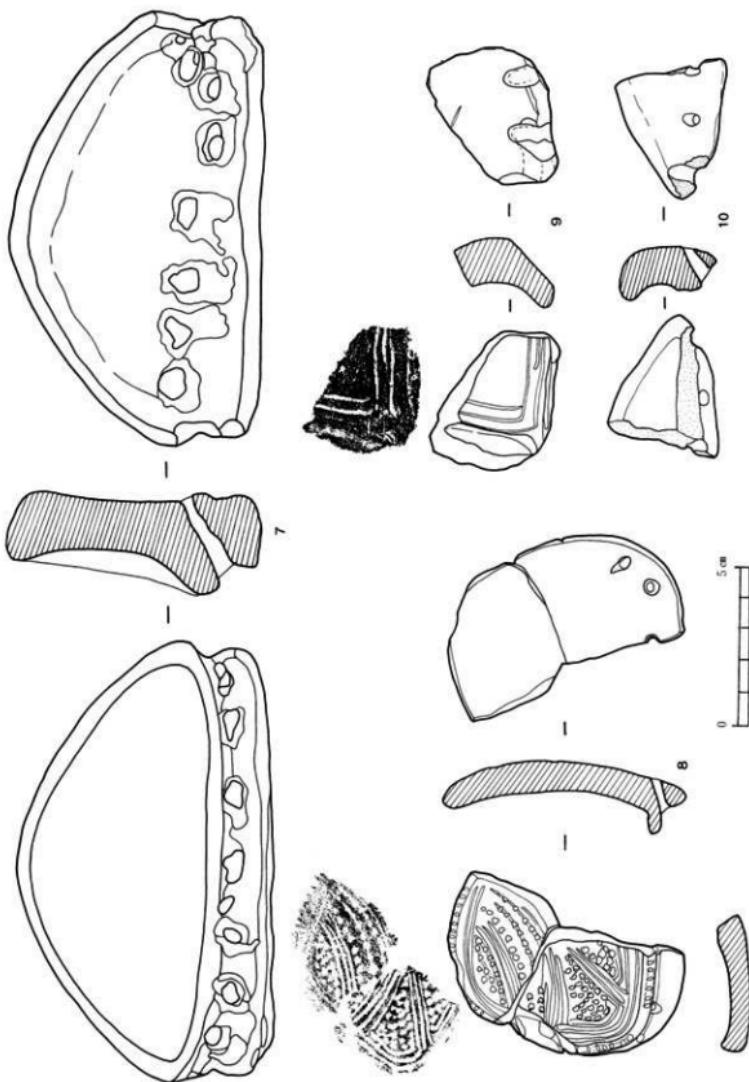


第101図 土製品出土状況全體図1(土器、棒状・異形土製品、土製耳飾り、線刻土器)



第102図 土製品実測図1(土偶、棒状・異形土製品)

第103図 土製品実測図 2 (パレット形土製品)



土偶觀察表

表内の()は復元及び現存部分計測による数値

査団番号	番号	出土区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	文様構成	備考	重文番号
102	1		VI	5.5	5.4	1.8	(32.6)		上半身に乳房(左側は剥落) 表面に細沈線、裏面に爪の痕跡	1

棒状土製品觀察表

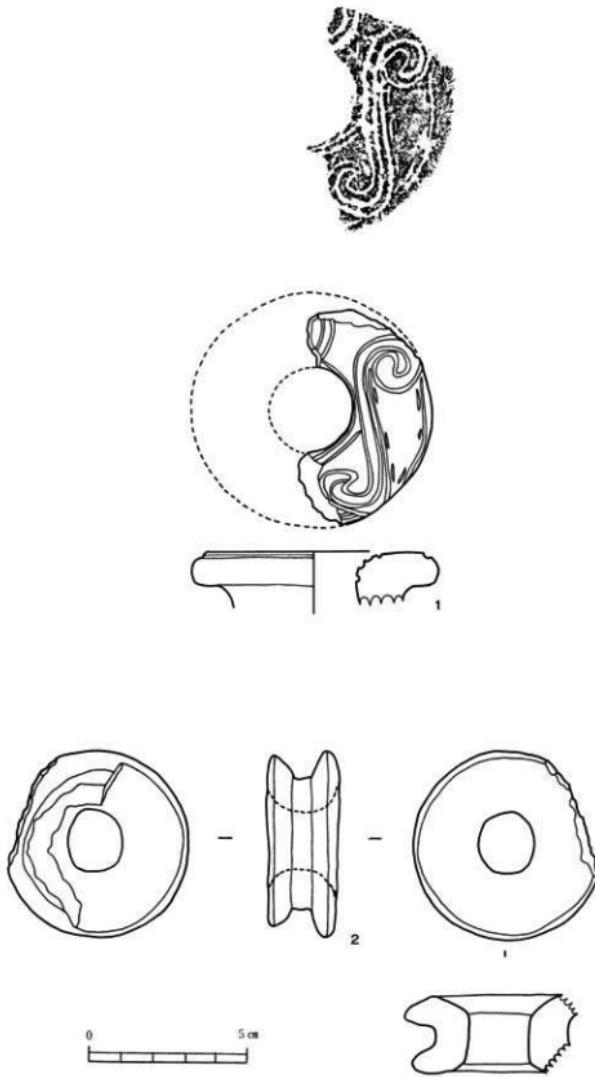
表内の()は復元及び現存部分計測による数値

査団番号	番号	出土区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	文様構成	備考	重文番号
102	4	R-10	VII	(4.1)	(2.4)	(2.0)	(5.76)	無文		1
	5	Q-10	VI	(3.3)	1.2	1.1	(4.29)	無文		2
	6	R-10	VI	(2.9)	(1.8)	1.1	(4.96)	無文		3

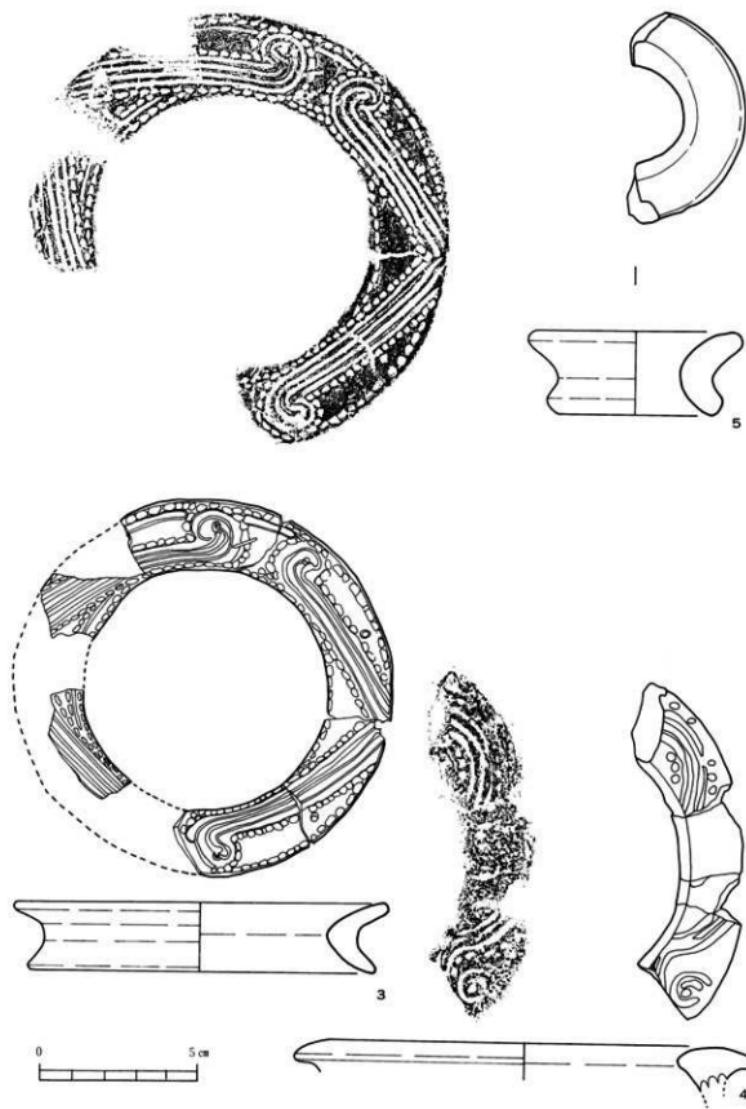
異形土製品觀察表

表内の()は復元及び現存部分計測による数値

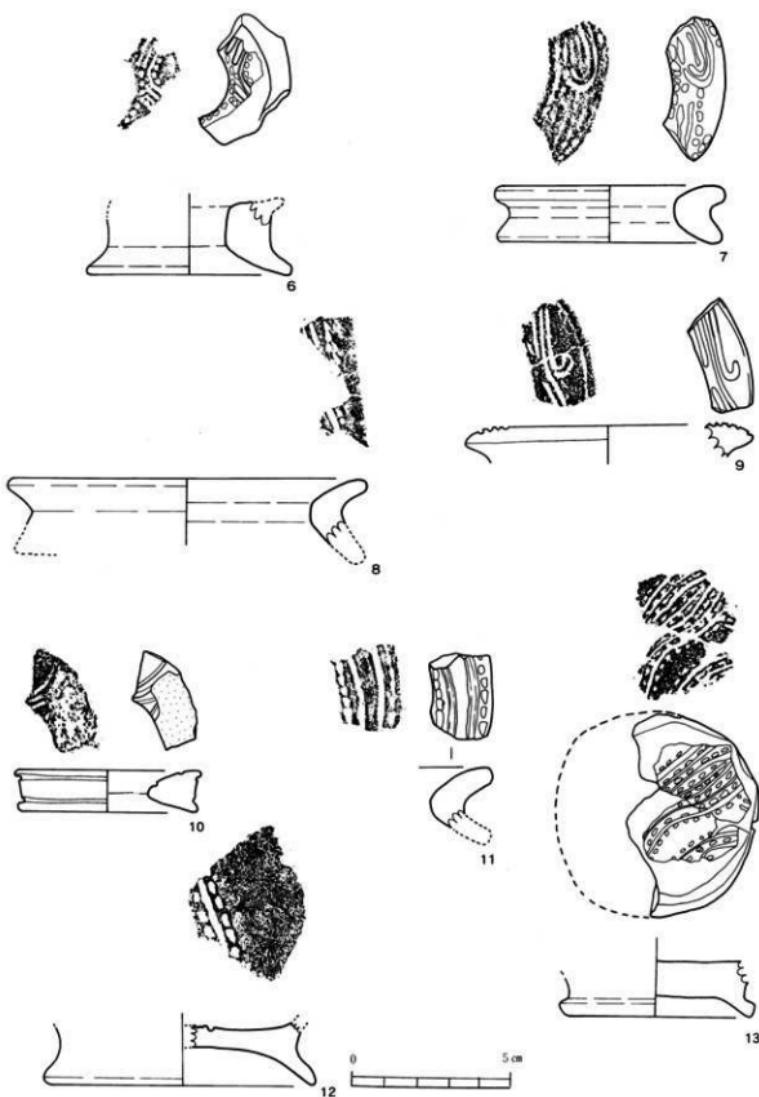
査団番号	番号	出土区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	文様構成	備考	重文番号
102	2	Q-12	VI	(2.3)	(3.3)	1.2	(6.5)	沈線文	分割形、穿孔有り	6
	3	R-10	VI	4.3	3.3	2.9	26.93		渦渦形土製品	5
103	1	Q-12	VI	8.1	13.5	3.3	290.0		バレット形土製品、穿孔有り	1
	2	Q-12	VI	(6.9)	(7.2)	1.3	(41.2)	刺突文・沈線文	バレット形土製品、穿孔有り	2
	3	Q-13	VI	(4.1)	(4.4)	2.3	(28.8)	沈線文	バレット形土製品、穿孔有り	3
	4	R-10	VI	(3.6)	(4.3)	(1.8)	(26.9)		バレット形土製品、穿孔有り	4



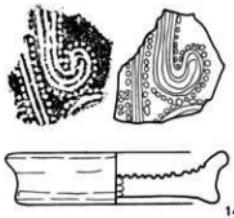
第104図 土製品実測図3(土製耳飾り1)



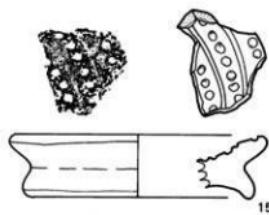
第105図 土製品実測図4(土製耳飾り2)



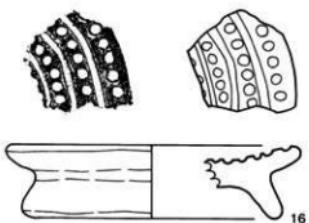
第106図 土製品実測図5(土製耳飾り3)



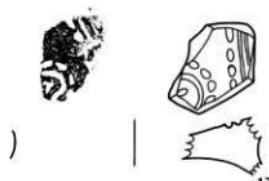
14



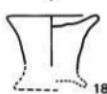
15



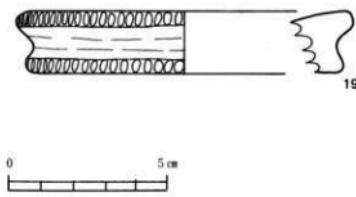
16



17



18



19

第107図 土製品実測図 6 (土製耳飾り 4)

土製耳飾り観察表

表内の()は復元及び現存部分計測による数値

辨別番号	番号	出土区	層	表面径 cm	裏面径 cm	厚さ cm	重さ g	文様構成	備考	重文 番号
104	1	Q-12	VI	7.8		(1.7)	(34.8)	刺突連点文・沈線文	滑車形、沈線内に赤色顔料塗布	1
	2	Q-11	VI	5.9	5.4	2.6	(52.2)	無文	"	2
105	3	Q-11・1 2・R-13 S-10	VI	11.9	11.0	2.2	(107)	刺突文・沈線文	"、沈線内に赤色顔料塗布	3
	4	Q-13	VI	14.7		(1.5)	(31.3)	刺突文・沈線文	"	4
	5			(6.8)	(5.6)	2.2	(42.2)	無文	"	5
	6	Q-11	VI		(6.5)	(2.3)	(13.4)	刺突文・沈線文	"	6
	7	Q-11	VI	(7.0)	(6.8)	1.8	(9.6)	刺突文・沈線文	"	7
106	8	S-10	VI	11.4		(2.1)	(14.1)	刺突文・沈線文	"	8
	9	Q-12	VI	(9.1)		(0.9)	(4.3)	沈線文	"	9
	10	S-11	VI	(5.9)	(5.7)	1.5	(4.7)	沈線文	"	10
	11	R-10	VI			(1.5)	(7.5)	刺突文・沈線文	"	11
	12	Q-12	VI		(8.7)	(2.0)	(40.1)	刺突文・沈線文	臼形	12
	13	P-11 P-12	VI		(6.1)	(1.8)	(36.5)	刺突文・沈線文	"	13
	14	R-11	VI	(7.1)	(6.4)	(1.7)	(15.7)	刺突文・沈線文	"、沈線内に赤色顔料塗布	14
	15	R-13	VI	(8.2)	(7.3)	1.8	(10.5)	刺突文・沈線文	"	15
	16	R-10	VI	(9.4)	(8.3)	2.1	(17.0)	刺突文・沈線文	"	16
	17	P-11	VI			(1.9)	(12.2)	刺突文・沈線文	"	17
	18	R-10	VI	2.9	(2.3)	(1.7)	(8.4)	無文	"、小型	18
	19	Q-12	VI	(10.7)	(10.1)	(2.0)	(12.4)	刺目	滑車形？	19

③ 土製円盤（第108図～第111図）

土製円盤は土器の破片を円盤状に再加工したもので「メンコ」とも呼ばれる土製品である。縄文時代の全時期を通じて出土しているが、用途については諸説あり定まっていない。縄文時代後期に多く出土する傾向があるが、鹿児島県においては、すでに縄文時代前期半には出現しており、上野原遺跡においても縄文時代早期後半の平柄式土器の破片を再利用した土製円盤が41点出土している。

最大のものは、2の径 7.3cm × 6.9cm、重さ59gで、最小のものは、28の径 2.8cm、重さ 3.0gである。いずれも、平柄式土器の破片のため、その深鉢形土器や壺形土器と同様の文様構成である。沈線文(29)、沈線文と刺突文(1～6・27)、縄文(7・8・11・15・32・33)、縄文と沈線文(10)、結節縄文(12～14・23・35・38)、結節縄文と刺突文(25)、羽状縄文(9・26)、撚糸文(28)、押引文(39)、無文(16～22・24・30・31・34・36・37・40・41)。また、33は底部の破片利用である。

④ 線刻画を有する土器（第112図）

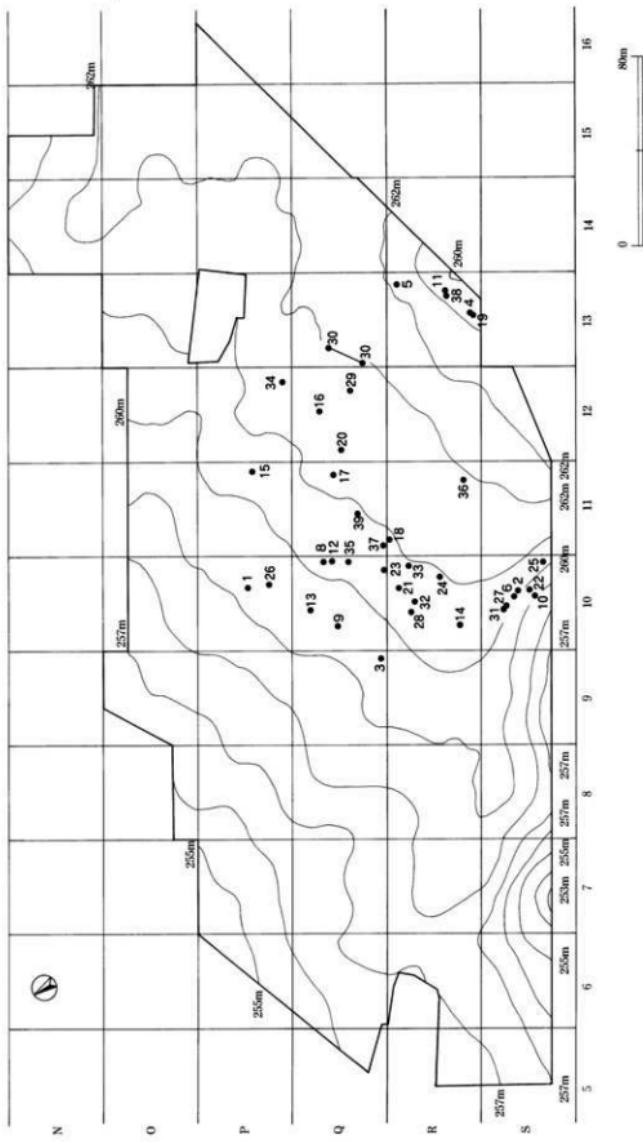
線刻画を有する土器片は8点、4個体分が出土している。

1～3は、いずれもVI層出土で同一個体である。復元口縁径25.2cmを測り、口縁部が外反するものであるが、肩部はあまり張らない。一見古代の土師器の壺に類似した器形である。肩部上位のみの破片であるが、外面に鋭いヘラ状の工具により曲線・直線の線刻画が自由奔放に描かれている。4は、壺形土器の肩部と思われる。肩部に直線による線刻画が描かれている。5～7は同一個体で、壺形土器の肩部と思われる。地文の縄文が施された後で鋭いヘラ状の工具による線刻画が描かれている。6の線刻画は、同心円状を呈し、絵画的である。8は、復元口縁径10cmを測る壺形土器の口縁部と思われる。口唇部は刻みを有し外面に線刻画が描かれている。この土器はIVa層出土で縄文後期の土器の可能性の高いものである。

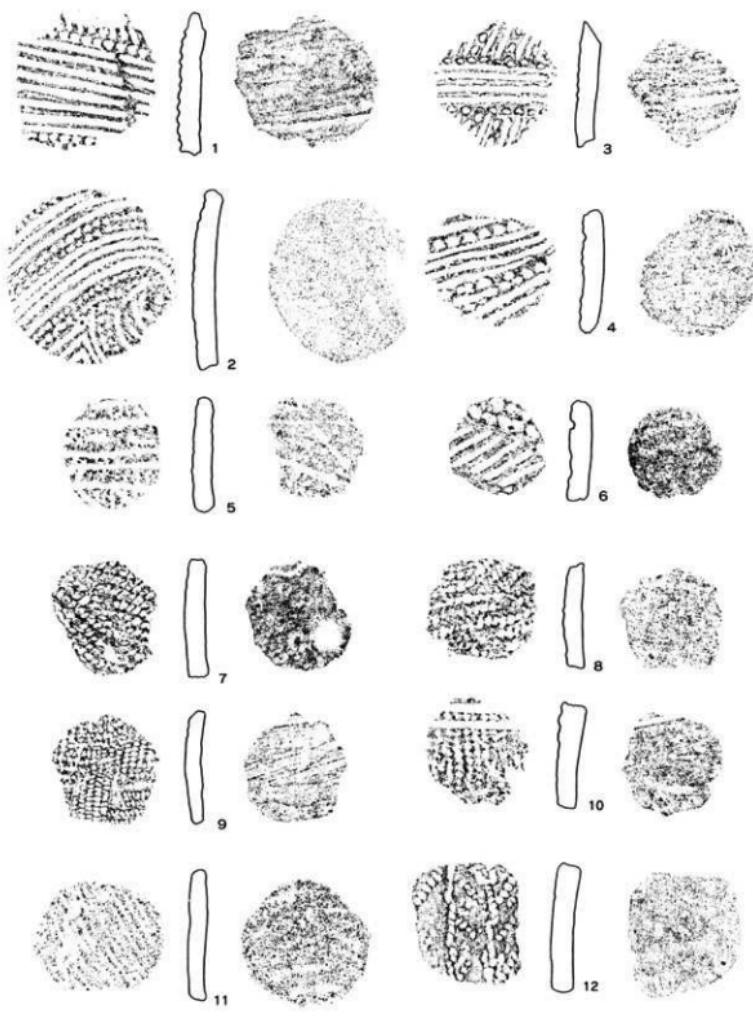
線刻画土器観察表

表内の()は復元による数値

持団番号	番号	出土区	層	口縁径 cm	器 高 cm	底部径 cm	最大径 cm	文様構成	胎 土	備 考
112	1	Q-8	VI	(25.2)			(25.2)	無文 絵画様沈線	石英・長石 角閃石	鋭いヘラ状工具による線刻画有り。 1～3は同一個体 深鉢形土器
	2	Q-9								
	3	Q-11								
	4	R-9	VI					無文 絵画様沈線	石英・長石	鋭いヘラ状工具による線刻画有り。 壺形土器
	5	R-6								
	6	Q-7 R-7	VI					縄文 絵画様沈線	石英・長石	鋭いヘラ状工具による線刻画有り。 6～8は同一個体 壺形土器
	7									
	8									

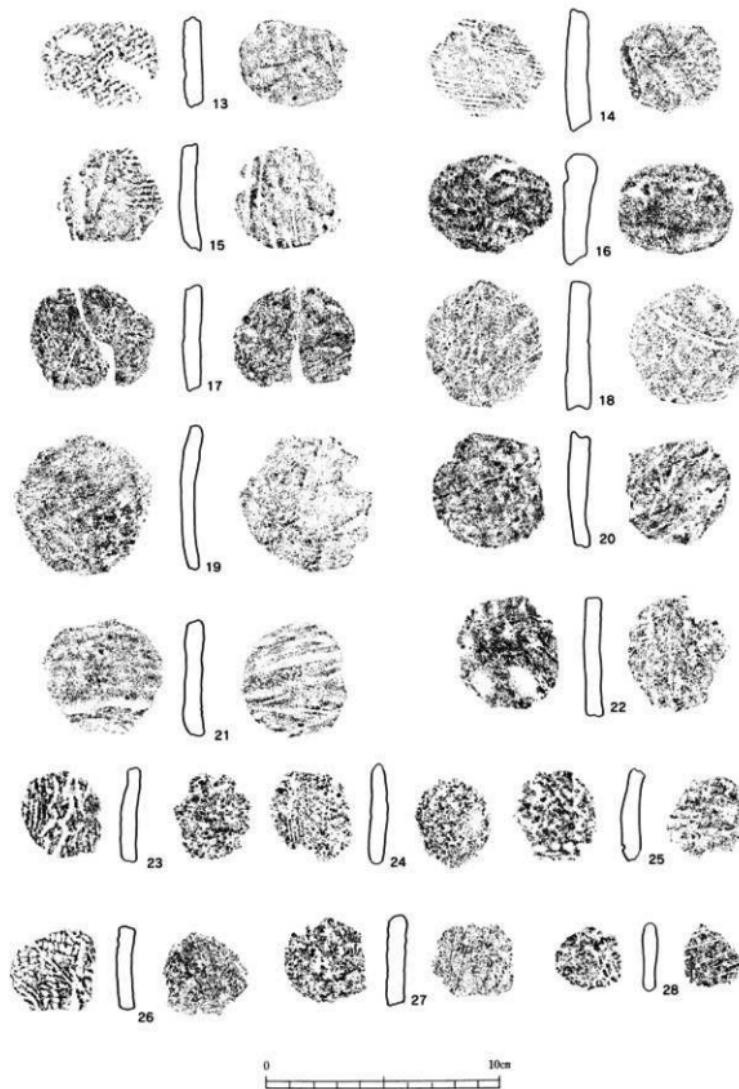


第108圖 主製品出主狀況金體圖2(主製門盤)

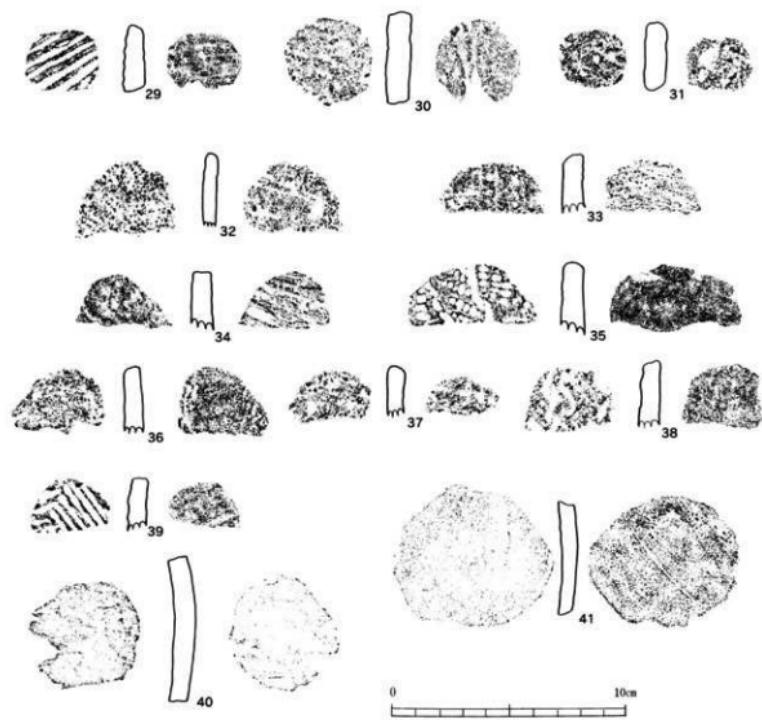


0 10cm

第109図 土製品実測図7(土製円盤1)



第110図 土製品実測図 8(土製円盤2)



第111図 土製品実測図 9 (土質円盤3)

土製円盤観察表 No.1

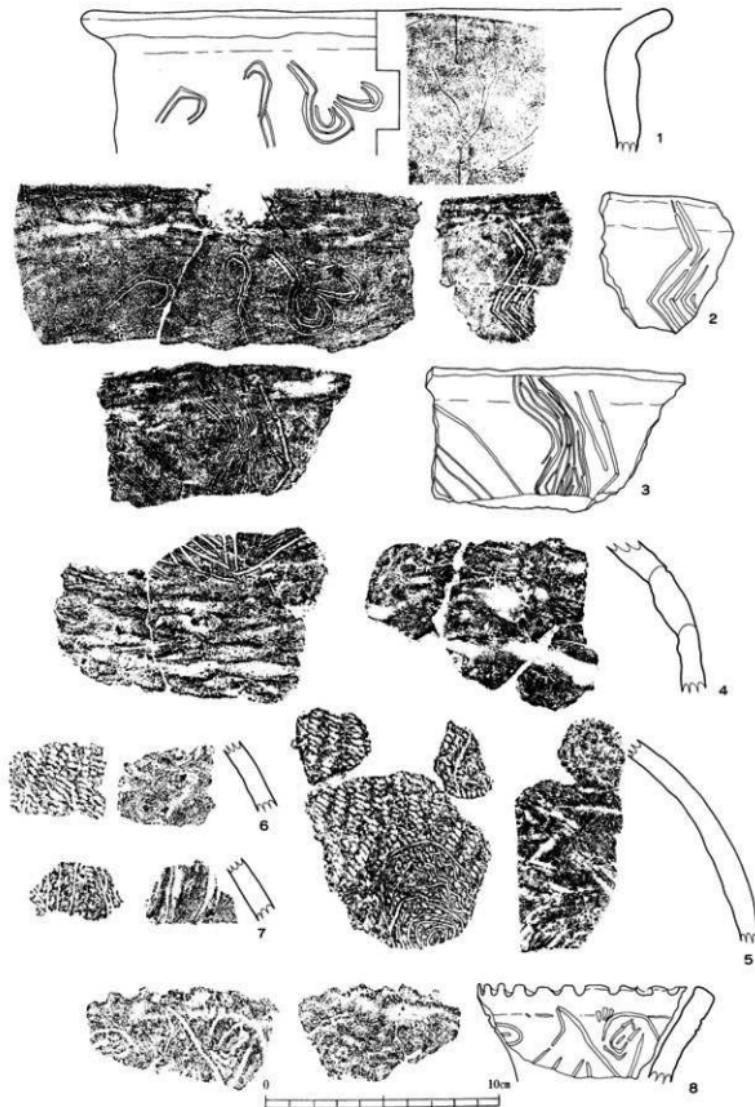
表内の()は復元及び現存部分計測による数値

押抜 番号	番号	出土区 層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	文様構成	備考	重文 番号
109	1	P-10 VI	5.75	6.05	1.00	48.65	刺突文・沈線文		1
	2	S-10 VI	7.30	6.90	1.05	59.37	刺突文・沈線文・こぶ状突起		2
	3	Q-9 VII	5.20	5.25	0.90	27.82	刺突文・沈線文		3
	4	R-13 VI	5.20	5.25	1.05	37.95	刺突文・沈線文		4
	5	R-13 VI	4.75	4.30	0.95	24.64	刺突文・沈線文		5
	6	S-10 VI	4.10	4.30	1.05	24.54	刺突文・沈線文		6
	7	S-10 VI	4.45	5.20	1.00	25.49	繩文		7
	8	Q-10 VI	4.40	5.05	0.90	22.74	繩文		8
	9	Q-10 VI	4.60	4.60	0.90	18.70	羽状繩文		9
	10	S-10 VI	4.50	4.40	1.05	27.54	沈線文・繩文		10
	11	R-13 VI	5.65	5.50	0.85	28.47	結節繩文		11
	12	Q-10 VI	4.60	5.35	1.05	45.17	結節繩文		12
110	13	Q-10 VI	3.70	5.10	0.85	21.36	結節繩文	楕円形を呈する	13
	14	R-10 VI	4.25	5.20	0.95	22.52	結節繩文		14
	15	P-11 VI	4.40	4.20	0.80	16.49	繩文		15
	16	Q-12 VI	4.35	5.35	1.25	39.46	無文	楕円形を呈する	16
	17	Q-11 VI	4.80	5.20	0.90	25.89	無文		17
	18	R-11 VI	5.05	5.40	1.10	37.06	無文		18
	19	R-13 VI	5.90	6.00	0.75	28.53	無文		19
	20	Q-12 VI	5.35	5.05	1.00	23.07	無文		20
	21	R-10 VI	4.90	5.15	0.90	25.57	無文		21
	22	S-10 VI	4.80	4.95	0.80	18.67	無文		22

土製円盤観察表 No.2

表内の()は復元及び現存部分計測による数値

埠団 番号	番号	出土区	層	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	文様構成	備考	重文 番号
110	23	Q-10	VI	3.50	3.80	0.75	11,34	結節繩文	小型	23
	24	R-10	VII	3.45	4.20	0.80	12,71		小型。器壁が荒れている	24
	25	S-10	VI	3.80	3.50	0.90	14,00	刺突文・結節繩文	小型	25
	26	P-11	VI	3.45	3.90	0.75	12,10	結節繩文	小型	26
	27	S-10	VI	3.70	3.50	0.80	12,77	無文	小型	27
	28	R-10	VI	2.80	3.0	0.75	6,16	無文	小型	28
111	29	Q-12	VI	2.70	3.50	0.90	10,19	沈線文	小型。梢円形を呈する	29
	30	Q-13	VI	3.75	3.70	1.10	19,91	無文	小型	30
	31	S-10	VI	2.90	3.25	1.00	8,95	無文	小型	31
	32	R-10	VII	4.40	(3.05)	0.70	(11,4)	無文	一部欠損	32
	33	R-10	VII	4.90	(2.30)	0.95	(12,6)	無文	一部欠損	33
	34	P-12	VI	4.30	(2.30)	0.90	(10,7)	無文	一部欠損	34
	35	Q-10	VI	5.60	(2.70)	1.10	(24,3)	結節繩文	一部欠損	35
	36	R-11	VI	(2,8)	4.20	0.90	(11,6)	無文	一部欠損	36
	37	Q-11	VI	(2,3)	3.60	0.80	(5,78)	無文	一部欠損	37
	38	R-13	VI	3.70	(2,7)	0.95	(12,7)	結節繩文	一部欠損	38
	39	Q-11	VI	3.40	(2,3)	0.90	(6,80)	押引文	一部欠損	39
	40			(6,1)	(4,9)					40
	41			(4,8)	(7,0)					41



第112図 土製品実測図10（線刻土器）

⑤ 小結

土製品についてみると、土偶・棒状土製品・分胴形土製品・パレット形土製品と種々の土製品が出土している。

土偶

土偶は、縄文時代後期・晩期に多く見られるようになるものである。これまで、鹿児島県内においても、加世田市上加世田遺跡の縄文時代晩期の土偶が唯一の土偶であった。それが一気に縄文時代早期までさかのぼったことになる。全国的にも縄文時代早期の土偶は少ないが、近年の調査で、増加してきており、原田昌幸氏によると1997年の段階では、全国で20遺跡183個体が知られている。また、三重県御見井尻遺跡においては縄文時代草創期の土偶も出土しており土偶の起源がかなり古いことが知られてきている。

上野原遺跡の土偶についてみると板状土偶ではあるが、頭部と両腕を突起で表現し、胸には乳房を表現するものであり、明らかに女性を表現したものである。また、胸部に横位の細い沈線が施されているのが観察されるが、この沈線が人体内部の肋骨を表現したものであるとすれば興味深い。

分胴形土製品・棒状土製品

分胴形土製品・棒状土製品については、土偶の一部ではないかとも考えられるが、全体の形状が不明なため用途についても分からぬものである。

パレット形土製品

パレット形の土製品についても、このような形状の土製品は初めての例であり、用途については皆目検討がつかないのが現状である。ただ、同様の土製品が完形品と破片を含め4点出土しており、なんらかの意図をもって製作・使用されたことと思われる。上野原遺跡の持つ祭祀的な様相とも考え合わせれば祭祀に関わる土製品ではないかと想定される。

土製耳飾り

土製耳飾りは、環状を呈する輪状耳栓と環状を呈さないで充填された円盤形態の白形耳栓の大きく2種類が出土している。耳栓については、これまで縄文時代中期頃から製作・使用されていると言われてきていたものである。しかしながら、南九州では

川辺郡知覧町「石坂上遺跡」、曾於郡志布志町「下田遺跡」、熊本県人吉市「白鳥平A遺跡」等で縄文時代早期の段階で耳栓が出土することは早くから知られていたものである。上野原遺跡においてもアカホヤ火山灰層の下層より出土している点や文様が平柄式土器と同様のものであることから縄文時代早期に位置付けて間違いないものと考えられる。

土製円盤

土製円盤については、縄文時代の全時期を通じて見られるものである。縄文時代後期に多く出土していたものであるが、近年の調査では、縄文時代早期前半から見られるようになってきている。上野原遺跡においても、縄文時代早期後半の平柄式土器の胸部破片を再利用したものである。この土製円盤も使用目的については諸説あり定まっていないところである。

線刻土器

線刻土器については、4個体分、8点が出土している。1点は脣層出土で、縄文時代後期の可能性のあるものであるが、他の3個体7点はアカホヤ層下位のVII層出土である。

1~3については、縄文時代早期のものとは思えないような器形であるが、鋭いヘラ状の施文具で胸部に曲線・直線を描いてある。4および5~7は平柄式土器の壺形土器の胸部と思われるものである。いずれも鋭いヘラ状施文具で直線・曲線を描くものであるが、なにを描いているかについては不明である。

出土状況についてみると、まとまった状態ではなく、上層からの落ち込みの可能性はないものである。つまり、縄文時代早期（平柄式土器）の所産と考えて然るべきものと思われる。

このような、絵画的な沈線を有するもので縄文時代早期に位置付けられるものは類例がなく貴重なものと考えられるが、なにを意図して描かれたものかについては、判断できないものである。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28)

国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(II)

上野原遺跡（第10地点）（第6分冊）

発行日 平成13年3月31日

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-5652 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地

☎ (0995) 65-8787

印刷所 濱島印刷株式会社

〒890-0052 鹿児島市上之園町17-2

☎ (099) 255-6121

